

に深さは浅い。第2遺構面を覆う包含層が、A区では東半には縄文時代の遺物が、西半には弥生時代の遺物が多く見られる事から、東半のピット群は縄文時代のピットである可能性が高く、西半のピットは弥生時代のピットである可能性が高い。B区東半でピットのまとまりが見られる箇所では、縄文時代の可能性のある土坑がいくつか検出されており、包含層にも同時期の遺物が特に多く含まれる事から、ピット群も同時期に属する可能性がある。B区西端では包含される遺物の量は少ないものの、比率は弥生時代の遺物が多く、これらのピット群は弥生時代に属する可能性がある。D区では遺物の出土数が極めて少ないため、時期を判断する素材にはかけている。

これらのピットの中で遺物が出土しているものも多くあるが、ほとんどは細片で図化できる遺物は少なかった。P232～P233はA区東半ピット群に含まれるものである。P232はD1グリッド、P233はD2グリッドの北側、P234はC3グリッドの南東部にそれぞれ位置する。381はP232出土の粗製深鉢の底部。胎土や色調、調整から縄文時代後期～晩期のものである可能性が高い。丸底のため、他の時期のもの可能性もある。382はP233出土の突帯文土器の深鉢で、口縁部に無刻目突帯を貼り付ける。383はP234出土の小型の深鉢である。外面は貝殻条痕の後ナデ調整されている。縄文時代早期末～前期初頭の所産であると考えられる。(三木)

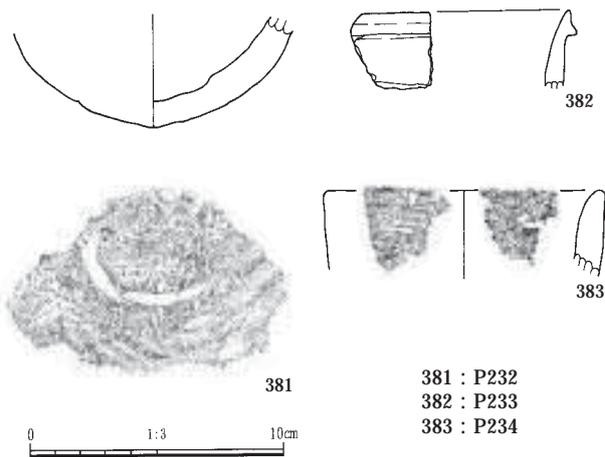


図95 第2遺構面ピット出土遺物

第5節 遺物包含層の調査

1. 概要

第1遺構面と第2遺構面の間に堆積する層には縄文時代早期から弥生時代後期にかけての遺物が大量に含まれていた。時期幅の広い遺物を含んでいるものの、遺物の時期による出土レベル差は見られず、層の上部から下部まで満遍なくすべての時期の遺物が見られた。このことから、層は二次堆積によって形成された遺物包含層で、包含される最新遺物から考えて弥生後期ごろに堆積したと推定できる。また、前述したように、第2遺構面の遺構は層堆積時に崩壊がおこっているので、それにとまって遺構内から流出した遺物も多数含まれていると思われる。

遺物は調査地全面から出土したが、出土量には粗密が見られる。B区の西半部やD区は全般に遺物出土量が少ない。ほかの地区ではいずれも多量の遺物の出土を見たが、中心となる出土遺物の時期に偏りがある。E区では弥生土器の出土量が極めて多い反面、縄文土器の出土量は少なかった。A・B・C区の東側では縄文土器や石器の出土量が非常に多く主体をなすが、弥生土器が出土していないわけではない。逆に、A・B・C区の西側では、弥生土器が主体になり、縄文土器や石器の出土量は非常に少ない。層は二次堆積層であるため遺物は原位置をまったくとどめていないが、こうした遺物分布の様相はある程度本来の遺物分布や遺構分布を反映していると思われる。包含さ

第5章 第3調査地の調査



図96.1 第3調査地第2遺構面ピット配置図(1)

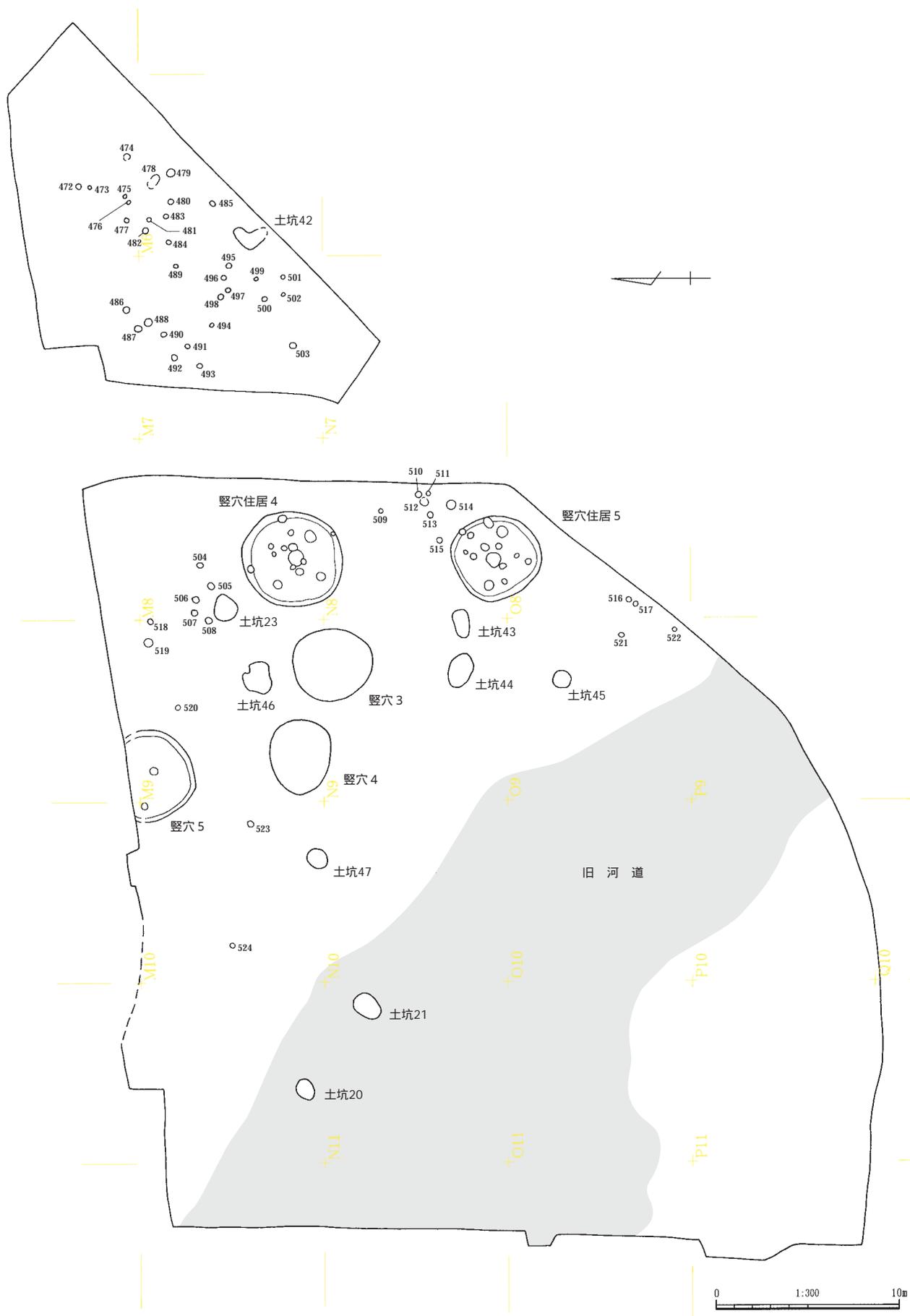


図96-2 第3調査地第2遺構面ピット配置図(2)

れていた遺物は、ほとんど摩滅しておらず、遺存状態が比較的良好なことから、遺物の移動が比較的少なかったことが推定できる。 (北)

2. 弥生土器 (図97~104、図版65~68・カラー図版4、表42~46)

出土した弥生土器は前期から後期にわたる。出土した土器の器面は全体的に摩滅しておらず、遺存状態が良い。いずれの時期のものも甕が多数を占め、壺・鉢・高杯などは少数である。

前期 (図97、図版65、表42・43)

弥生時代前期の土器には甕・壺・鉢がある。甕は、口縁部が小さく「く」字状に外反して開く形態で、口縁端部の下半に刻目を施すものが古相を示す。385・387・388・391がこれにあたり、清水



図97 包含層出土弥生土器〔1〕前期〕

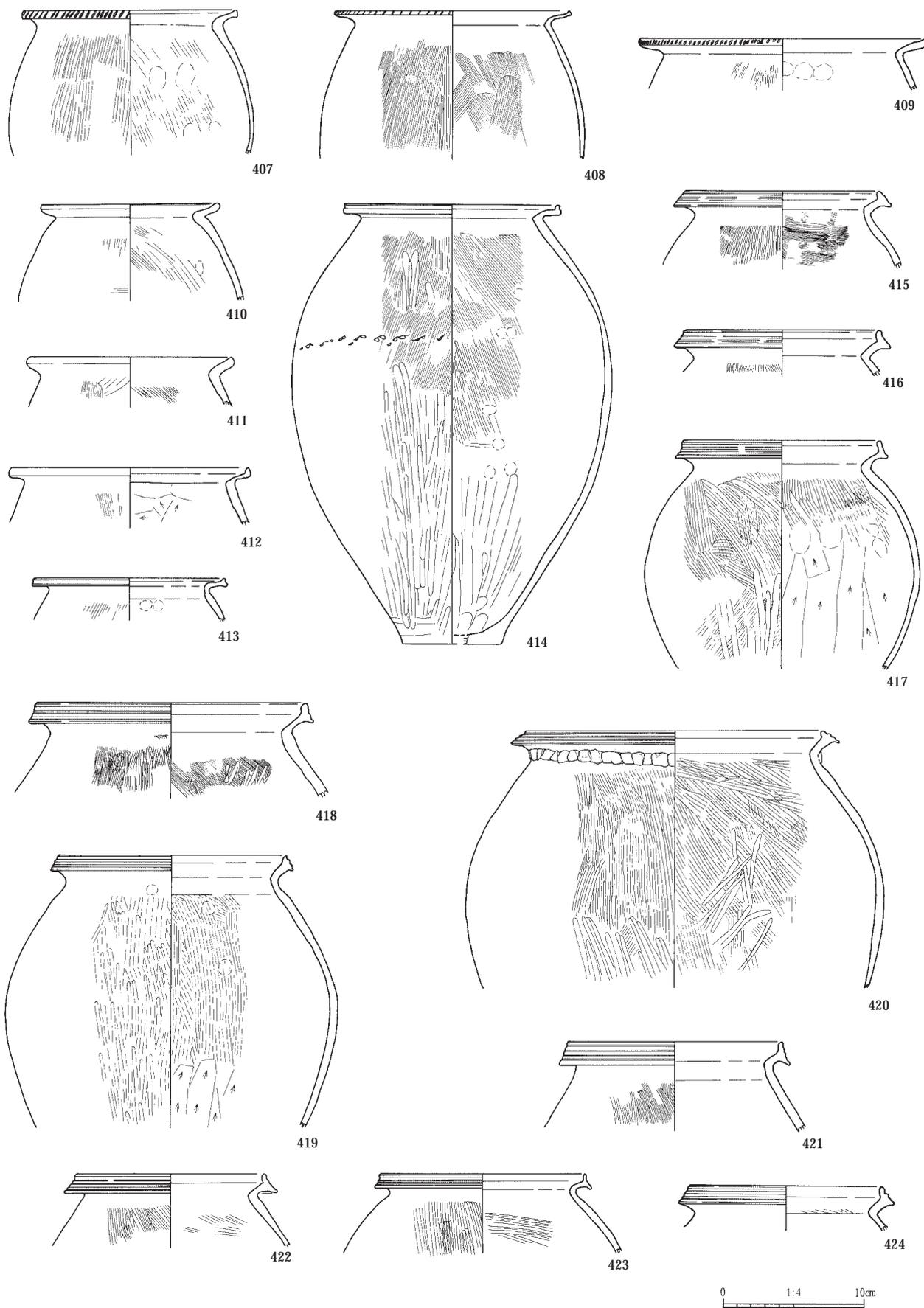


図98 包含層出土弥生土器〔2〕〔中期〕

編年での - 1 様式に相当する。395は口縁端部に刻目はなく、頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らす。口縁端部はシャープで、これも同様式であろう。384・386・389は、口縁端部の刻目が端部全体に及ぶもので後出的である。これらは清水編年での - 2 様式に相当する。394・398・399などは口縁部の屈曲が小さく、口縁端部も丸くなり、頸部には多条のヘラ描き沈線を施す。これらと、393・396・397など沈線上と沈線間に刻目を施して装飾するものは後出的なもので、清水編年 - 3 様式に相当する。

400・401・404・405は壺である。いずれも口縁部が「く」字状に外反するものである。400は粘土帯の接合部が段をなして古相である。口縁部内面はヘラミガキの後にナデ調整する。口縁部外面はナデ、頸部の段の下に板ナデの痕跡がわずかに残る。清水編年 - 1 様式のものである。401は頸部にヘラ描き沈線を1条巡らせる。内外面とも横のヘラミガキを施す。404と405は同一個体である。404は口頸部が長く外反する。頸部にはヘラ描き沈線を4条巡らす。外面は横ナデ、頸部内面は縦ナデ、口縁部内面は横ナデ調整である。401と404・405は頸部を装飾するなど新しい要素をもち、清水編年 - 3 様式に相当する。

402・403・406は鉢である。402はやや外反する口縁で、頸部下に段をもつ。内外面ともナデ調整である。403はやや外反する口縁をもつ。外面はハケの後ヘラミガキを施す。口縁部外面には指頭圧痕を明瞭に残す。内面頸部以下はヘラミガキとヘラケズリの後ナデ。口縁部内面はナデ調整である。406は口縁部を逆「L」字形に折り曲げるもので、後出的である。内外面とも頸部以下はヘラミガキおよびナデ、口縁部は内外面ともナデ調整である。清水編年 - 2 様式に相当する。

中期（図98～101、図版65～68、表43～45）

中期前葉の資料は見られない。中期中葉から中期末の遺物には、甕・壺・高杯がある。407～437は甕である。407～411は逆「L」字状に口縁部を屈折させ、端部が拡張しないものである。407は体部内面に指頭圧痕が良く残る。410・411は口縁部がやや角度をもって屈曲する。411は清水編年 - 1 様式に相当する。407～410は清水編年 - 2 様式に相当し、弥生時代中期中葉のものである。412～414は口縁端部を短く上方につまみ上げる。414は肩部下に貝殻腹縁による刺突文を巡らす。412～414は清水編年 - 1 様式に相当する。これらは弥生時代中期後葉のものである。415～437は口縁部が拡張し、複合口縁を呈するもので、口縁帯に凹線文を施す。415・419・420・422・423は、口縁帯の拡張が上下ともほぼ同じ程度のものである。416～418・424・428～430は、口縁帯の上端は大きく拡張し下端は拡張せず、断面が三角形状をする。417は口縁帯上端の拡張が際立つものである。420は、頸部に低い指頭圧痕貼付突帯を施すが、指で撫でつけた退化したものである。425～427は口縁帯の下端の器壁が薄く特徴的なものである。425は胴径の大きなもので、肩部下に一系列の刺突文を巡らせる。426は口縁帯の上下端に刻目を施す。431～436は口縁帯上端を外反させてつまみ上げたもので、内側に明瞭な稜をなす。431は口縁部が水平に開いてから上方へとつまみ出される。432は体部にハケ原体の小口で浅く刺突した羽状文を巡らせる。437は口縁部上端部を直上につまみ出すが、口縁帯には凹線文を施さない。これらの調整はいずれも、頸部から口縁部は内外面ともナデ、外面体部上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面体部上半をハケメ、下半ヘラケズリが基本である。433の体部内面には一部にヘラミガキを施す。419・420は清水編年での - 1 様式に相当する。415～418・421～428は清水編年の - 2 様式に相当し、弥生時代中期後葉のものである。429～437は清水編年での - 3 様式に相当し、弥生時代中期末のものである。

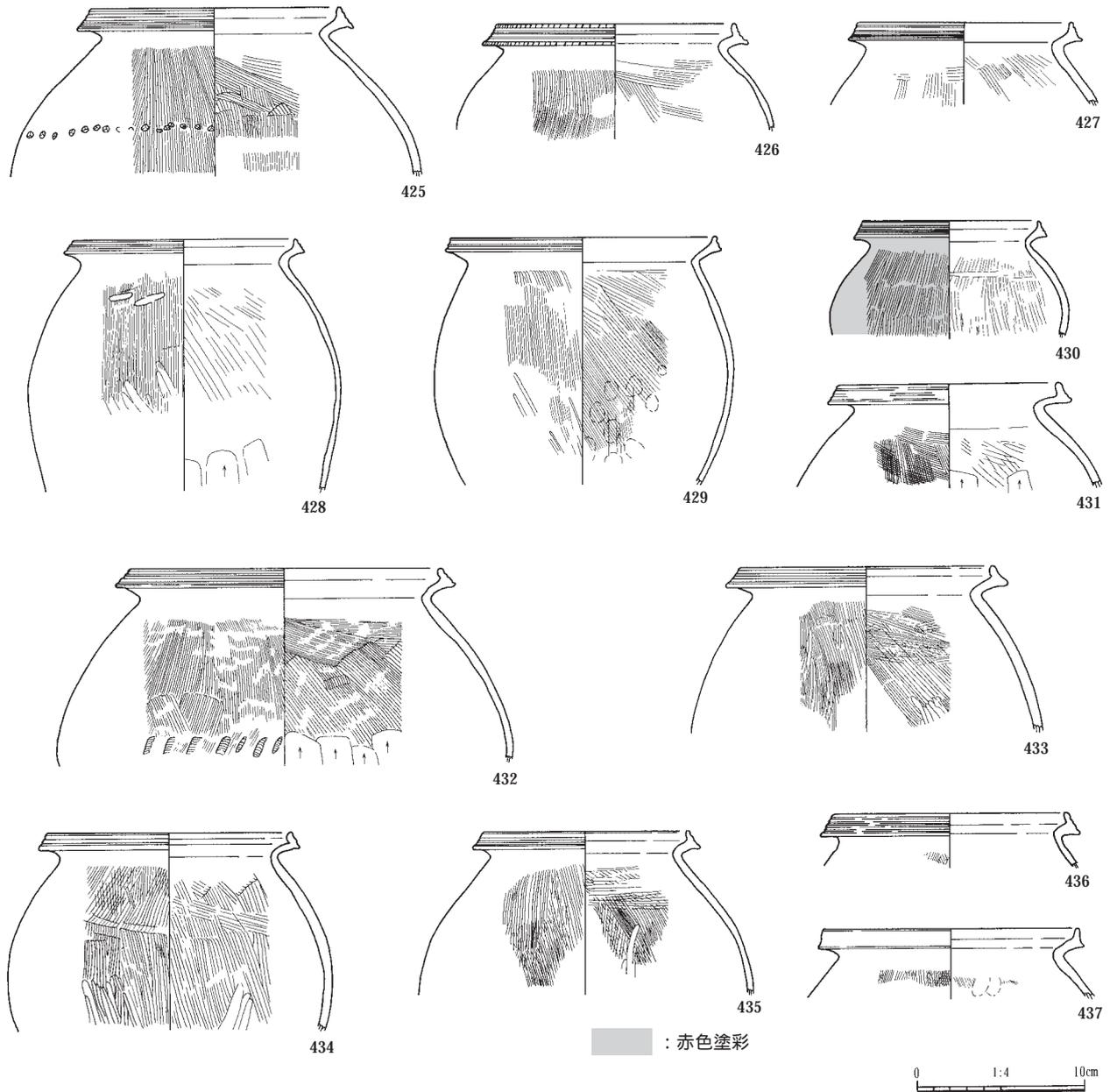


図99 包含層出土弥生土器〔3〕〔中期〕

438～445は壺、447・448は無頸壺である。446は器種不明である。438は口頸部を大きく外反させるものである。口縁端部は上下端を拡張させる。口縁帯には2条の凹線を巡らせ、刻目を施す。頸部下には貼付突帯に刻目を入れる。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部以下外面はハケメである。頸部内面はナデ、体部内面はハケメを施す。清水編年での - 2 様式に相当する。439は、頸部がやや短く、口縁部上下端を拡張させ、口縁帯には4条の凹線文を施す。頸部下には2条の凹線の間刻目を1列巡らせる。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部以下外面はハケメである。頸部内面はナデ、体部内面はハケの後、一部にヘラミガキを施す。清水編年での - 3 様式に相当する。440は広口壺で、口縁部をやや下方に屈折させて、縁帯をなすものである。口縁帯には4条の凹線文を施す。清水編年での - 2 様式である。441は口縁部を大きく外反させ、開く広口壺である。口縁部断面は三角形状で、口縁帯には3条の凹線文を施す。頸部下には貼付突帯を2条もつ。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部外面は縦方向のハケメである。頸部の下半は縦方向のナデ、頸部の上半

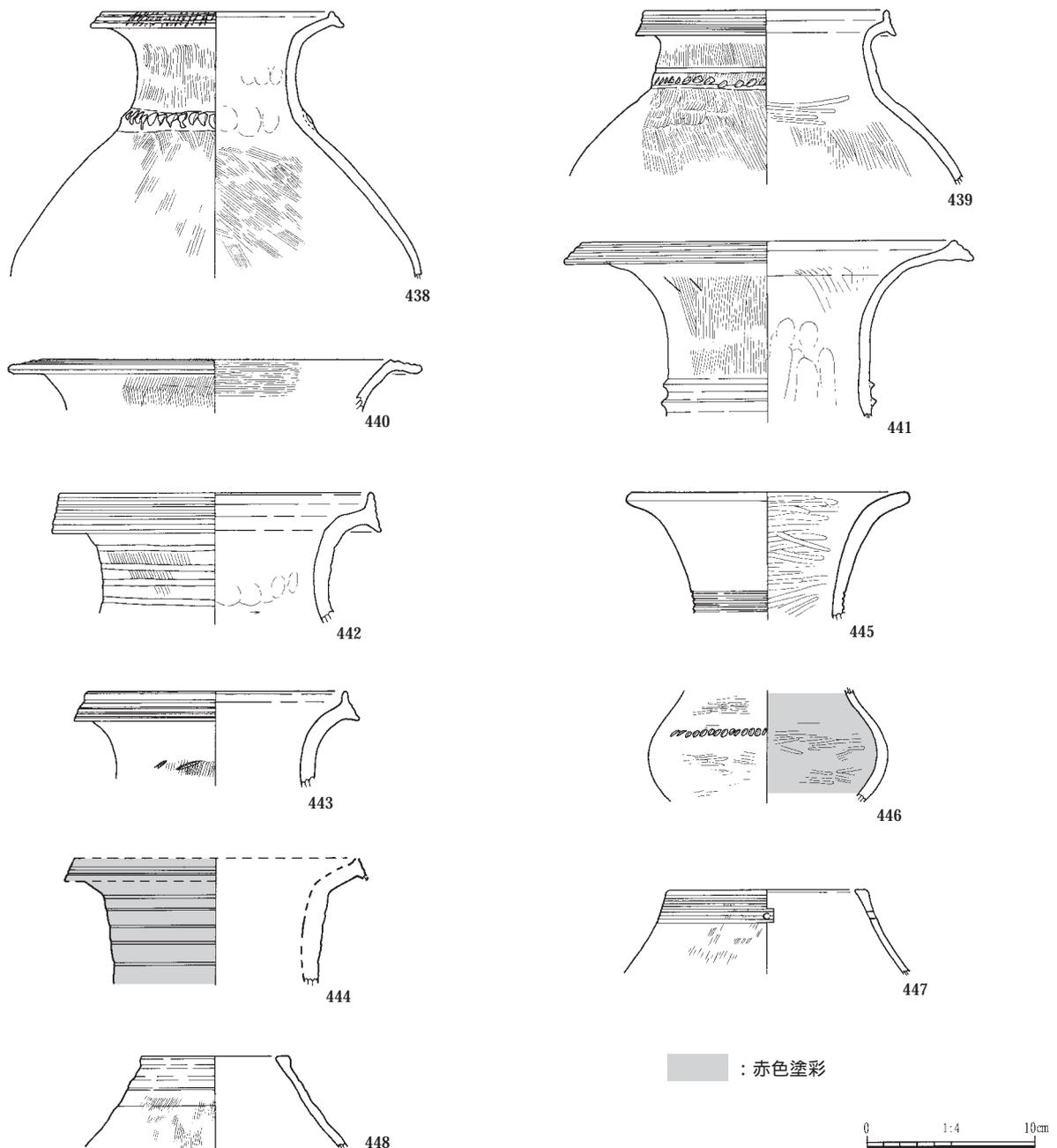


図100 包含層出土弥生土器〔4〕中期〕

はハケメである。清水編年での - 1 様式に相当する。442～445は長頸壺である。442は口縁部が上下に大きく拡張し、口縁帯は5条の凹線文を施した後ナデる。頸部には縦ハケ後、4条以上の凹線を施す。1本の原体を4周させて施した可能性がある。443も口縁部は上下端とも拡張し、口縁帯はやや内傾する。口縁帯には4条の凹線文を施す。頸部には刻目を施す。442・443は清水編年での - 3 様式に相当する。444は赤色塗彩するものであるが、器表面の摩滅が激しい。口縁部は直線的な頸部から外折し、口縁端部はわずかに拡張するが、上下端部とも欠損する。頸部は5条の凹線を施す。清水編年での - 3 様式のものと考え、 - 2 様式のものでもある可能性もある。447は口縁部下に穿孔がある。口縁部は5条の凹線を施し、その上からナデる。体部はハケメ、内面はヘラケズリの後ナデている。448は口縁部に3条の凹線を施しナデる。体部の調整はハケメ、内面は横ナデである。447・448は清水編年 - 2 様式に相当する。446は屈曲する体部片で、最大径部の



図101 包含層出土弥生土器〔5〕中期〕

上に刻目を巡らす。内外面ともヘラミガキ調整である。438は弥生時代中期中葉、それ以外の壺・無頸壺は弥生時代中期後葉のものである。

449～454は高杯である。449は、口縁部下に稜をもち、口縁端部を肥厚させ、上に面をなすものである。口縁部外面と口縁下の稜上には刻目を施す。稜上の刻目は小さく斜め気味に施す。調整は、口縁部外面は横ナデで、杯部外面と、口縁部内面から杯部内面は横方向のヘラミガキである。450は内湾した杯部で口縁部上に面をなし、内側にシャープな端部をもつものである。口縁端部外面には貝殻を刺突文を巡らし、その下に2条の凹線を施す。449・450はともに清水編年の - 3 様式に相当する。451は、脚端部上に1条の凹線を巡らす。その上から三角形の透かしをいれるが、未貫通である。透かしの上には段をもつ。清水編年の - 3 様式に相当する。452は残存部上位に1条、脚端部上に6条の凹線を施す。外面調整は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリである。453も同様に凹線を施した後、透かしを入れるが、未貫通である。454は脚端部上に3条の凹線、その上にシャープな鋸歯文を施す。残存部の上端には円形とおもわれる穿孔がある。いずれも清水編年での 様式の範疇で、弥生時代中期後葉のものである。

後期（図102・103、図版66～68・カラー図版4、表45・46）

弥生時代後期の土器には、甕・壺・高杯などがある（図102・103）。大半を甕が占める。

甕はすべて複合口縁系のもの（455～472）である。いずれも口縁帯には平行線文を施す。455・457・463は口縁上下端部の拡張が短いものである。455は外反させた口縁部の上下端部を短くつまんだもので、口縁部内側に沈線状に溝が巡る。口縁帯には4条の平行線文を施す。肩部にはハケ原体による刻目を施す。455は口縁帯が直線的で濱田分類 A直類に相当する。457・463は口縁帯が外反するものである。463は内面のヘラケズリが頸部屈曲部まで及ぶ。頸部外面には刻目を施す。これらは濱田分類 A外類、清水編年 - 1 様式に相当する。456・458・459～462・472は口縁上下端ともやや長く拡張し、口縁帯がやや内傾する。濱田分類 B直類に相当する。456は遺存状態がわるいが、頸部内面は横ヘラミガキ、口縁部内面には貝殻腹縁による連続刺突文を施す。460～462・472は濱田分類 類に近い。これらは清水編年 V - 2 様式に相当する。464～466は口縁上端部が拡張し、口縁帯は内傾気味である。464は頸部が「く」字形に屈曲し、口縁帯は内傾する。シャープなつくりで器壁が薄い。465は口縁下端部が拡張しないもので、器壁が厚い。肩部には板状工具による刺突文を巡らす。濱田分類 B直類に相当する。465・466は清水編年 - 1 様式、464は - 2 様式のものである。467～471は口縁上端が大きく拡張し、口縁帯が直立する。その中でも467～469は口縁下端がわずかに下垂する。469は遺存状態がよい。口縁下端部の拡張は鈍く、口縁

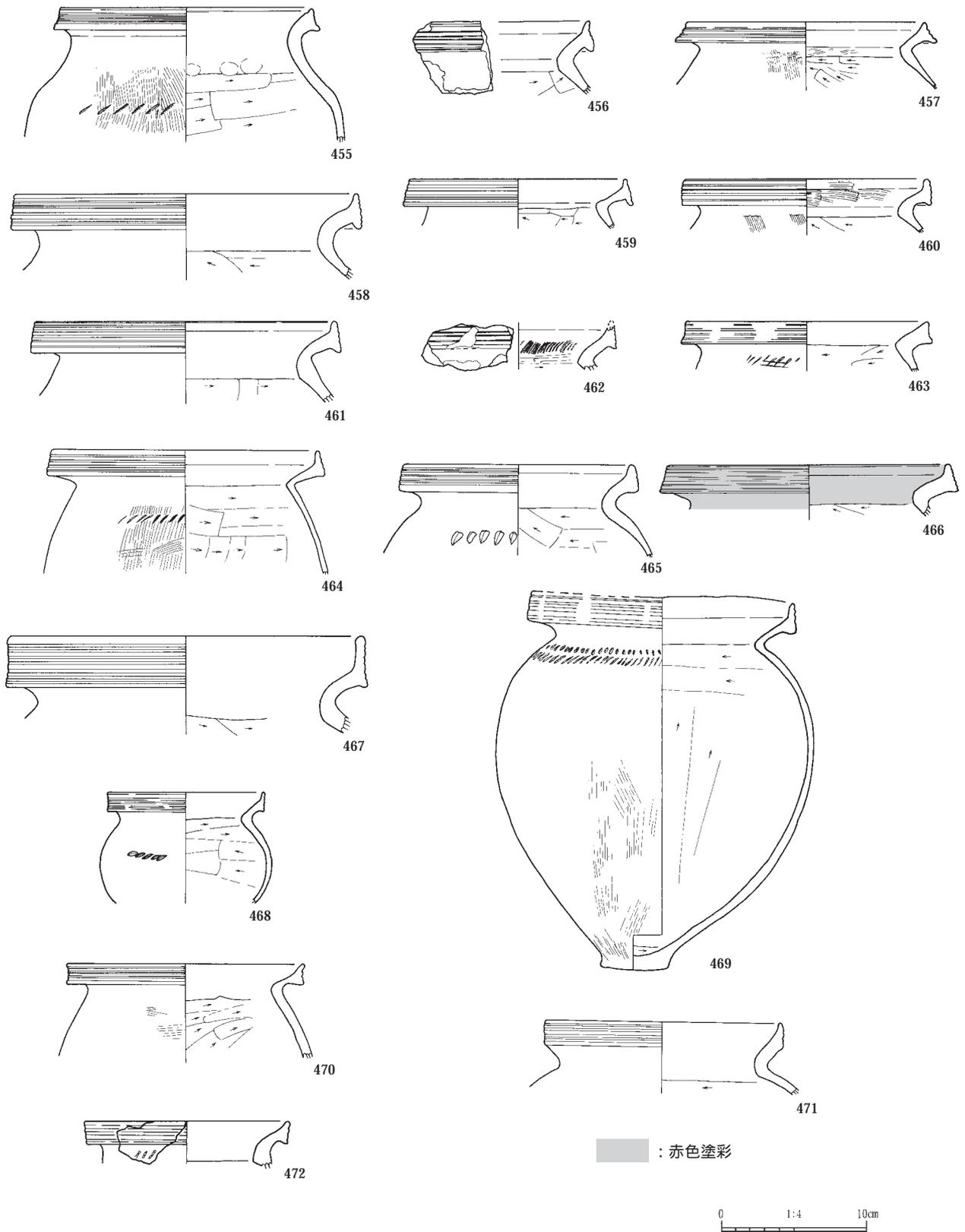


図102 包含層出土弥生土器〔6〕後期〕

帯は直立する。口縁帯には4条の平行線文、肩部には羽状文を施す。体部外面はハケメの後ナデている。これらは濱田分類の A 2 直類に相当する。470は口縁下端がほとんど拡張せず、水平につまみだし、口縁帯が外反する。濱田分類 B 外類に相当する。471は口縁下端が拡張せず、口縁帯

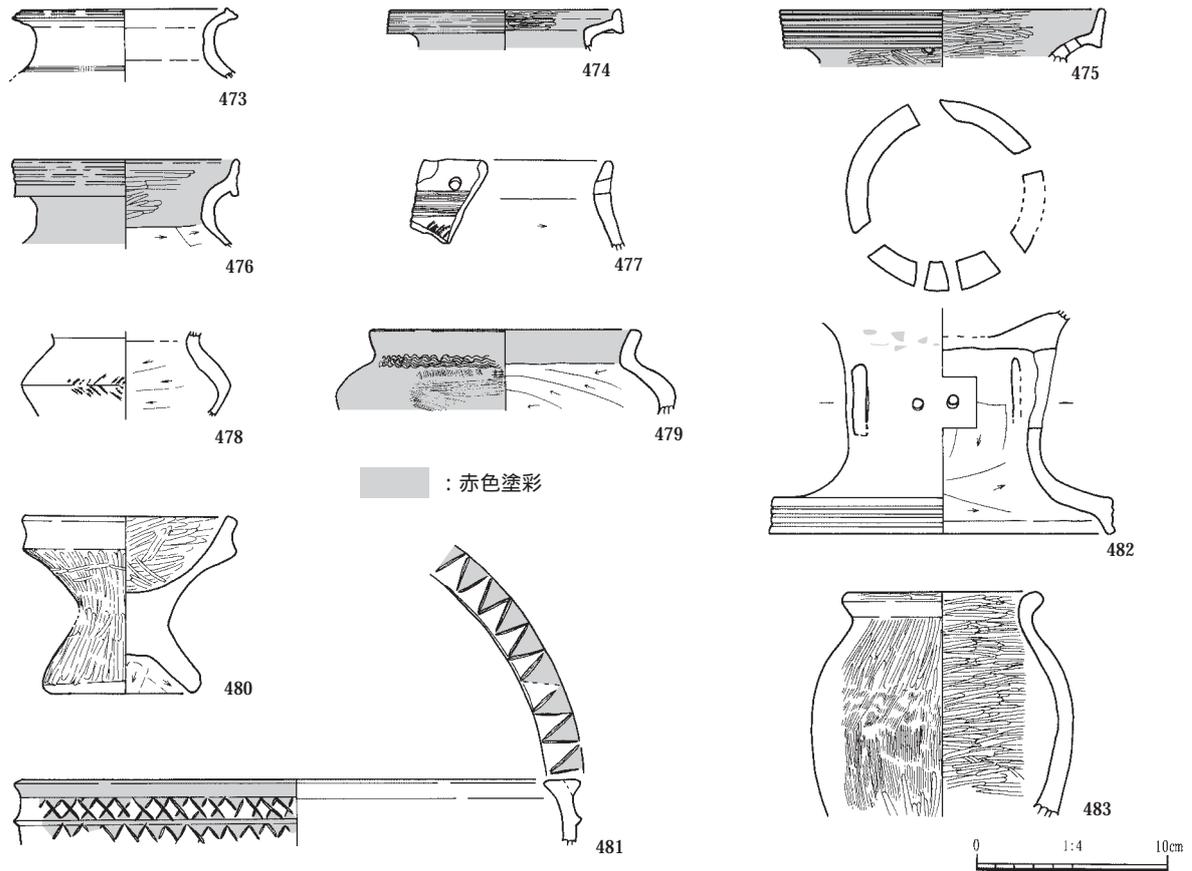


図103 包含層出土弥生土器〔7〕後期〕

は直立する。濱田分類 B直類に相当する。467～471は清水編年での - 2 様式に相当する。

473は外反してひろく単純口縁の壺で、口縁端部には2条の沈線を巡らす。474～476は複合口縁の壺である。いずれも口縁帯に平行線文を施し、赤色塗彩されている。474は、口縁部上下端部とも同程度拡張して、口縁帯が直線的である。濱田分類の A直類に相当する。口縁部内外面ともヘラミガキされる。475は、口縁上端部が大きく拡張し直立し、下端は拡張しない。口縁帯は直線的なもので、濱田分類での B直類に相当する。頸部上に穿孔がある。内外面とも著しくヘラミガキされる。476は、口縁上端が上方に大きく拡張して直立し、下端が短く拡張する。濱田分類の A直類に相当する。内面は、頸部屈曲部から口縁部までヘラミガキされる。473～476は清水編年での - 1 様式のものである。477は無頸壺である。口縁部下に穿孔、その下に8条の平行線文、その下に貝殻腹縁による刺突文を施す。内面はヘラケズリされ、口縁部内外面はナデ調整される。外面は赤色塗彩される。478は無頸壺か脚付長頸壺の体部であろう。479は壺で、胴部が大きく屈曲し、算盤玉状の扁平な器形となるようである。台付のもの可能性がある。頸部外面には波状文を施し、外面と口縁部内面には赤色塗彩する。外面頸部より下はハケメ調整、内面ヘラケズリは頸部屈曲部まで及ぶ。

480は変形の高杯であろう。杯部はナデによって短く外反する。杯部内面と外面脚部は緻密なヘラミガキ調整である。481は台付鉢ないしは大型高杯であろうか。内湾した口縁部で、口縁部は外側に粘土を貼り付け断面「T」字形とし、上端に平坦面をつくる。側面には突帯をつける。口縁上端面には山形文を深く鋭く線刻し、外面側を底辺とする三角形部分を赤色塗彩する。側面は突帯を挟んで、2列の斜格子文を線刻し、その線刻で囲われた菱形部分を残して赤色塗彩する。後期とし

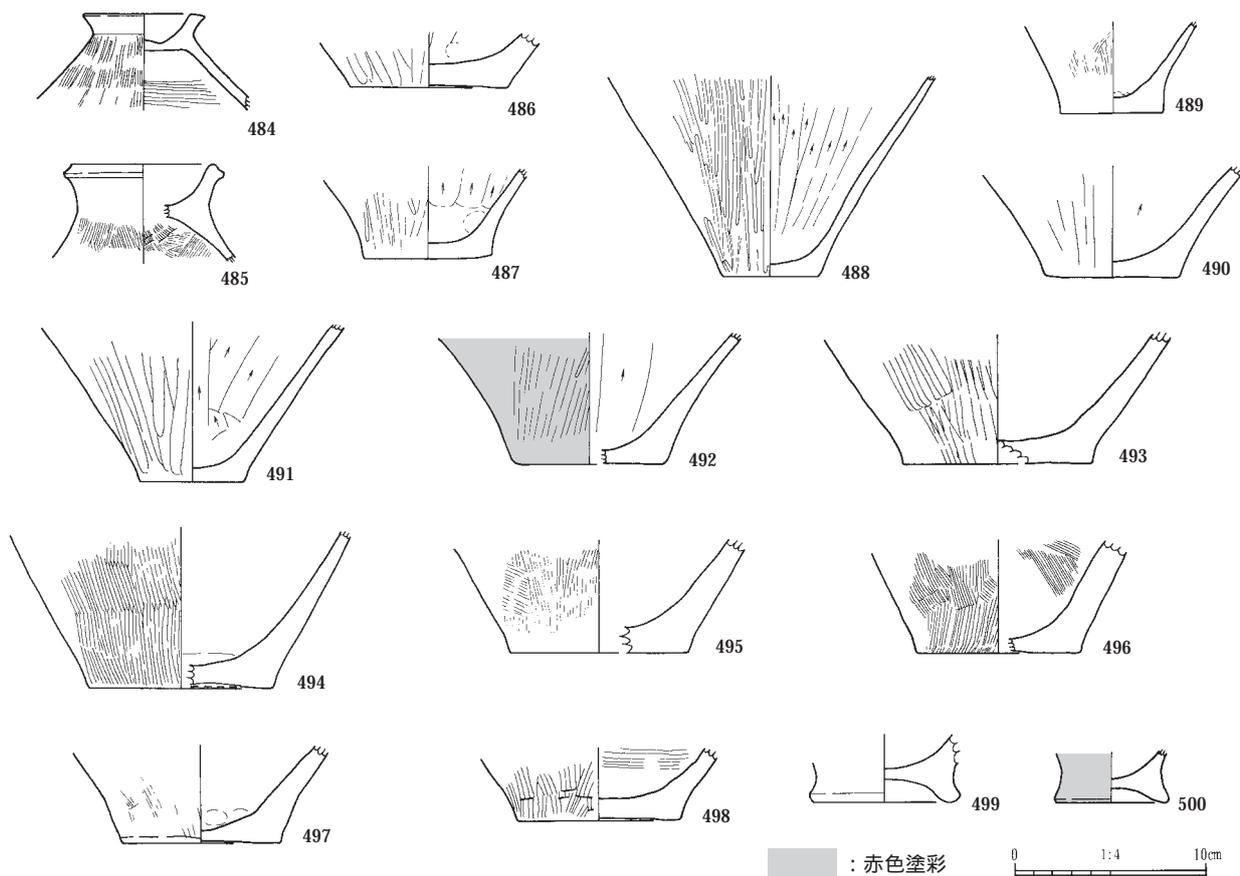


図104 包含層出土弥生土器〔8〕蓋・底部

たが、詳細な時期はわからない。482は台付壺の脚部であろう。器表面の遺存状態がわるい。筒部の4箇所に方形の透かしを貫通させ、さらに2つの円孔を並列させる。脚端部は3条の平行線文を巡らせる。清水編年での - 3 様式のものであろう。483は壺である。器表面の遺存状態はよい。器壁は厚く、短く外反させる口縁部で、端部はそのまま丸く収める。緻密なヘラミガキを内外面に施し、内面は黒色で光沢を帯びている。後期の可能性がある。

蓋・底部（図104、図版68、表46）

484・485は蓋である。486～500は底部である。平底のもの486～498と高台状に上げ底とするもの499・500がある。486～493は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整である。494～498は外面ハケメ、内面ヘラケズリ、またはハケメ調整の平底である。（日置）

3．縄文土器（図105～122、図版70～77、表10・49～56）

概要

包含層から出土した縄文土器は時期幅が大きく早期から晩期にわたる。最古の土器は早期中葉の押型文土器であるが、わずか1点のみの出土である。早期末から前期初頭にかけての土器が大量に出土しており、出土縄文土器の主体を成している。前期、中期の土器は出土量が少なく散発的な様相である。後期は、初頭から後葉まで比較的まとまって出土しており、特に中葉の資料が充実している。また、後期土器にともなうと考えられる粗製土器が大量に出土しているが、有文土器の中で最も出土量のまとまっている中葉に帰属するものが多いと考えている。晩期は前葉、中葉の資料をまったく欠くものの、突帯文土器がいくらか出土している。ただし、これには弥生時代に帰属する

表10 縄文土器出土数組成表

グリッド	C 1	C・D1	C 2	C・D2	C 4	D 1	D 2	D 3	D 4	D 5	D 6	E 1	E 2	E 3	E 4	E 5	E 6	E 7
押型文																		
早末～前初(縄文)	1	1	8			3	24	2		3			45	1		3	2	
早末～前初(条痕文)	7	3	176	1	2	36	99	18	4	6		15	141	26	3	17	1	
西川津式			2			1	3						2	1				
前期			1					1										
中期							1	1										
後期初頭					1					1								
後期前葉																		
後期中葉		5	44		3	4	6		1	1			6	7	1	6	1	3
後期後葉			2		1		1									1		
粗製土器	35	41	579		4	83	167	60	13	23	2	3	31	13	6	18	3	8
突帯文			2		1	1	1	2	1						2	1	1	1
計	43	50	814	1	12	128	302	84	19	34	2	18	225	48	12	46	8	12

グリッド	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	G 1	G1・2	G 2	G 3	G 4	G 5	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 7	H 8
押型文																		
早末～前初(縄文)	4		9	16		11	4	11	33		4	5	8	21	16			
早末～前初(条痕文)	27	25	71	29	1	140	28	196	406	75	33	25	56	384	157	6		
西川津式	1	1	1			2	1	1	4	1			1	4				
前期	1							1	2					2				
中期						2		1	9					1				
後期初頭																		
後期前葉			1			1	1								1			
後期中葉	3		3			8	4	2	33	8				12	4			
後期後葉				1					7	1	2		1	6	2			
粗製土器	13	3	19	13		23	51	30	254	70	40	6	36	118	71	1		2
突帯文				1			1	1			2			1	1			1
計	49	29	104	60	1	187	90	243	748	155	81	36	102	549	252	7	1	2

グリッド	I 1	I 2	I 3	I 4	J 6	J 8	L 7	L 8	M 7	M7・8	M 8	M 9	N 7	N 8	N 9	N11	O 7	O 8
押型文																		
早末～前初(縄文)	7	21	13	2														
早末～前初(条痕文)	35	106	69	14				1				3	1	2		1	1	
西川津式		3		1														
前期																		
中期	1			1														
後期初頭								1		1	1					1		
後期前葉						1												
後期中葉		4	1	1								1		1	1			
後期後葉		2	1														1	1
粗製土器	8	49	27	2				7			2	1	1			1	1	2
突帯文		1			1		1	5	1		3	5	2	1			2	4
計	51	186	111	21	1	1	1	1	13	1	1	10	7	6	2	3	5	7

グリッド	O10	O11	P 8	P10	P11	A区 一括	B区 一括	C区 一括	D区 一括	E区 一括	小計	土坑22	土坑23	土坑24	土坑25	土坑26	総計
押型文						1					1						1
早末～前初(縄文)						3	3	10			294	5			2	2	303
早末～前初(条痕文)			3			27	18	30		1	2526	209		2	38	49	2824
西川津式						2		1			33	7	72		1		113
前期						2	1				11						11
中期						1					18						18
後期初頭						1					7						7
後期前葉											5						5
後期中葉				1		2		1	1		179						179
後期後葉						2					32		1				33
粗製土器		1			1	24	9	21			1996	1					1997
突帯文	1		1		2	3		1		2	57						57
計	1	1	4	1	3	68	31	64	1	3	5159	222	72	3	41	51	5548

新相のものも多く含まれている。

出土量と分布

出土した土器片全点を時期ごとに分類してグリッド単位で計数し、出土量と分布の傾向を示した(表10、図105~107)。早期末~前期初頭としたものは、胎土に繊維を混入した縄文地ないしは条痕地の土器で、繊維混入の認められないものは粗製土器としてカウントしている可能性がある。また、前期初頭の西川津式としたものは施文などから明確に分離できたもののみをカウントしているため、早期末~前期初頭の条痕文としてカウントしたもののなかにも西川津式土器が含まれているだろう。後期の有文土器のうち、縄文のみを施文し、時期が判明するような特徴的な文様をもたないものは最も出土量のまとまっている後期中葉としてカウントしたが、後期初頭や前葉のものが含まれている可能性もある。粗製土器としてカウントした資料には、先の早期末~前期初頭の土器を含む

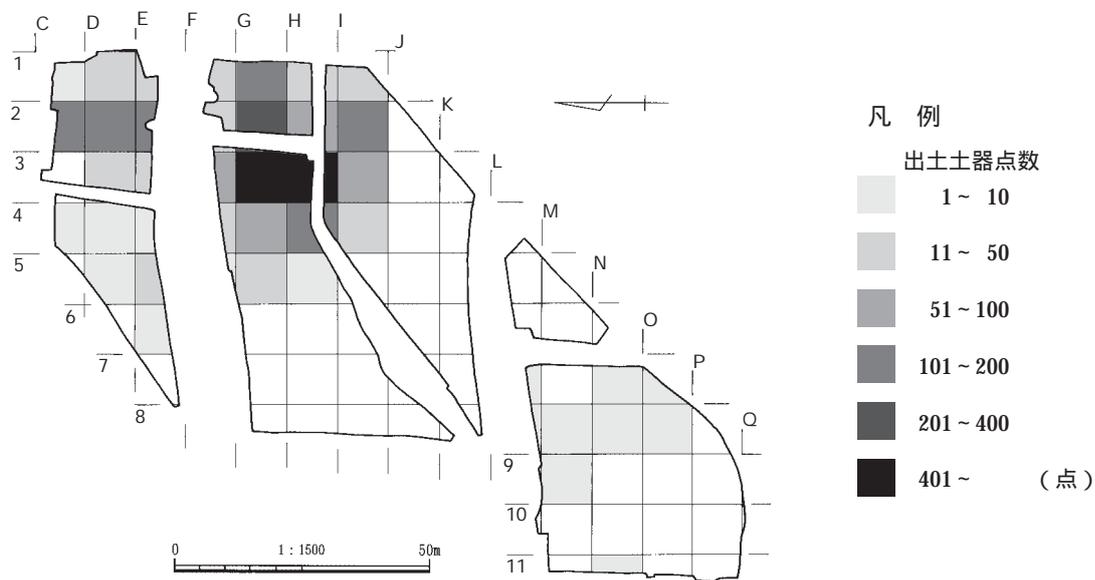


図105 縄文土器グリッド別出土量模式図〔1〕早期末~前期初頭土器〕

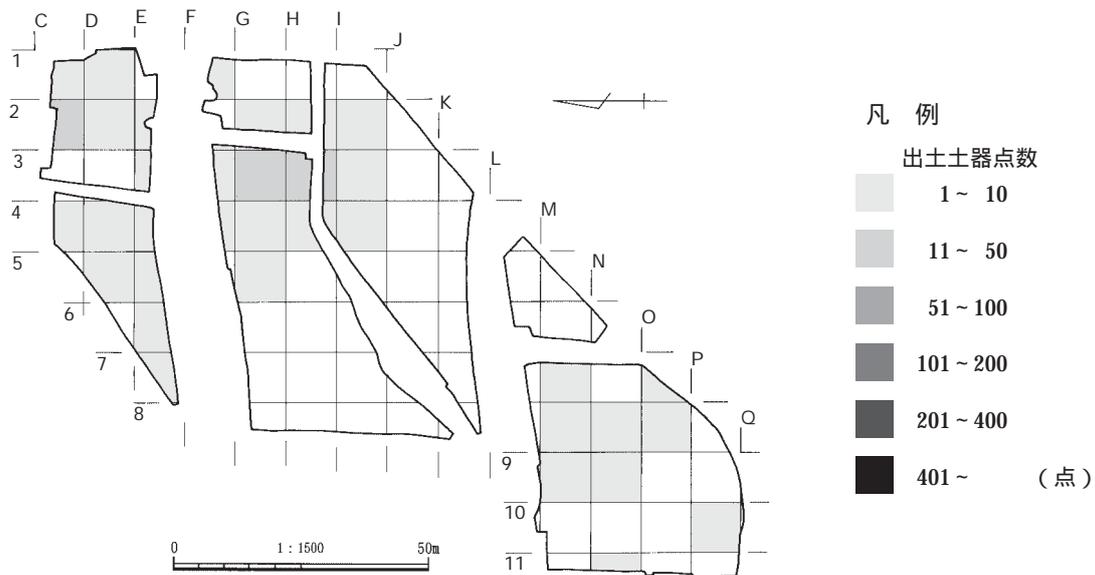


図106 縄文土器グリッド別出土量模式図〔2〕後期有文土器〕

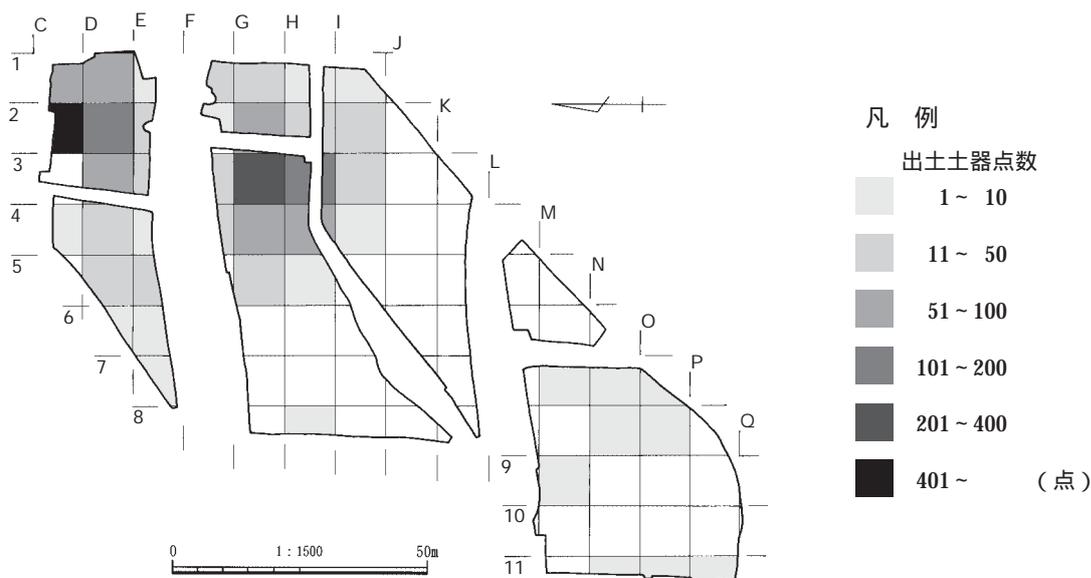


図107 縄文土器グリッド別出土量模式図〔3〕粗製土器〕

可能性があるほか、後期の有文土器の体部片や、突帯文土器の体部片も含んでいる可能性が極めて高いため、実際よりは数が大きくなっていると思われる。突帯文土器は口縁部片でしか判断できていないため、実際よりは少ない数となっているだろう。こうしたノイズがあるものの、傾向をつかむことはできるだろう。出土量は、早期末～前期初頭の土器が最も多く、縄文地、条痕地、西川津式すべてを合計すると3240点となり、縄文土器全体のほぼ6割を占める。次いで、粗製土器が多く、全体の36%を占めている。

グリッドごとの出土量から土器の平面的な分布を見てみると、A区東部、B区東部、C区北東部がいずれの時期とも分布の中心となっていることが分かる。これ以外の部分では出土量が極めて少ない。もう少し詳しく分布のあり方を見るために、出土量の多い早期末～前期初頭の土器、後期土器、粗製土器それぞれの出土量をグリッドごとで階級分けして表した分布模式図を示した（図105～107）。いずれも、一見すると類似した分布のあり方を示しており、C2グリッドを中心とする一帯と、G3・G4グリッドを中心とする一帯の2つの範囲で遺物の集中出土が見られる。後期土器と粗製土器の分布のあり方は非常に近似しており、このことから両者が共伴するものである可能性は高いといえよう。後期土器、粗製土器の分布と、早期末～前期初頭土器の分布を少し詳しく比較すると、分布傾向に違いがあることが分かる。最も大きな違いは、先の二つの遺物集中域で見られ、C2グリッドでは粗製土器が主体となるのに対し、G3・G4グリッドでは早期末～前期初頭土器が主体となっている。ほかのグリッドでも両者の出土量を比較していくと、早期末～前期初頭土器はG3・G4グリッドを中心にB区東部やC区北東部にまとまった遺物集中域があるほか、A区の東部でもまとまりをもち、一方の粗製土器はC2・D2グリッドに集中域をもつほか、G3・G4グリッドでもある程度まとまった量が出土していることが分かる。両者は完全に排他的な分布を示すわけではないが、いくつかのグリッドでは早期末～前期初頭土器が多量に出土しているにもかかわらず、粗製土器の出土量が少ない場合も見られる。こうしたことから、大まかな傾向として、早期末～前期初頭の土器と後期に帰属すると考えられる粗製土器は分布域が異なっていると言えるだろう。二次的な移動が大きいことを割り引いても、本来的に両者の遺物分布域が異なってい

た可能性が高い。後期中葉土器が集中する第2調査地も含め、遺跡内で活動の中心となった場が時期によって異なっていた可能性も考えうるだろう。

早期中葉（図108、図版71、表49）

押型文土器が1点のみ出土している。501は山形の押型文が施文された深鉢の底部付近の破片である。

早期末～前期初頭（図108～115、図版70～74、表49～53）

この時期に帰属すると考えられるものが本遺跡出土縄文土器の主体をなし、遺構内出土のものも含めると合計3240点出土している。早期末～前期初頭に帰属すると判断した資料は、その特徴から大きく二大別できる。胎土に繊維を混入していることを最も大きな特徴とし、地文に縄文や条痕文を施し、口縁を中心に隆帯を貼り付けて加飾するものを中心とする、いわゆる「福呂式」・「長山馬籠式」（小林2000）ないしは「長山式」（井上1991・1996）の土器群と、口縁部肥厚帯や細隆帯の貼り付けと刺突文や押し引き文の施文で特徴付けられる西川津式土器の二者である。繊維混入の隆帯文土器は縄文地のものと条痕地のものとを分類して報告するが、同一個体の土器に縄文、条痕両者が重ねて施される場合や、部位を違えて施される場合が多く見られるため、厳密に区分できていない可能性がある。後述するが、両者は、地文に違いは見られるものの、その他の多くの特徴が一致するため、基本的には同一の土器群として捉えたほうがよいと思われる。

< 隆帯文土器（縄文地） >

繊維混入の隆帯文土器のうち、縄文地のものは破片で303点出土している。しかし、これは単純に残された破片のうち縄文の観察できたものをカウントした数字なので、縄文地土器の同一個体片であっても条痕やナデが施されていた部位の破片はカウントできていない。したがって、実際はこれより破片数が多くなると思われる。これらは、いずれも外面に縄文を施文し、内面は条痕ないしはナデで調整する。大半が隆帯を口縁付近に貼り付けるが、隆帯をもたないものも含まれる。胎土にはいずれも繊維が含まれるが、混入量にはばらつきがあり、きわめて多く含むものも見られる一方で、ほとんど観察できないものもある。これらの破片の中から、口縁部片や、隆帯の残る破片を中心に掲載した（図108・109、502～529）。器種はすべて深鉢形土器と思われる。調整は、いずれも外面に縄文が施される。縄文はR L単節縄文が多数を占め、ほかにL Rのものや無節のものも少数見られる。撚りは緩いものが多く、節の大きさは大小まちまちである。大半は器面上に浅く施されている。内面の調整は、貝殻条痕や複数種の植物質工具によると思われる条痕が施されるほか、ナデで仕上げるものも多い。条痕工具は基本的には1個体に対しては1種類のものを使っているようだが、条痕後にナデを加えているものが非常に多く、現状ではナデしか観察できないものも条痕調整が行われていた場合があるだろう。隆帯は多くが口縁付近に平行隆帯として貼り付けられる。隆帯の貼り付け位置は、大半が口縁端か、端部からわずかに下がった位置である。ほかに、複数条の横走隆帯をもつ個体や、縦位の垂下隆帯となるものもあるほか、隆帯をもたないものも存在する。隆帯は外面に縄文を施文した後に貼り付けている。隆帯は強く押しつけて貼り付けられていないようで、断面形が丸型のものが多く、貼り付けの接点は小さく簡単に剥落してしまいそうなものがほとんどである。隆帯上には大半が様々な工具の刺突や押し引きでキザミを施している。キザミに使用される工具には、半裁竹管（状工具）、二枚貝の腹縁や背面、棒状や板状の工具などが見られる。また、同様の工具を用いて、口縁上端部にキザミを施すものも見られる。以下、特徴的な個体につ

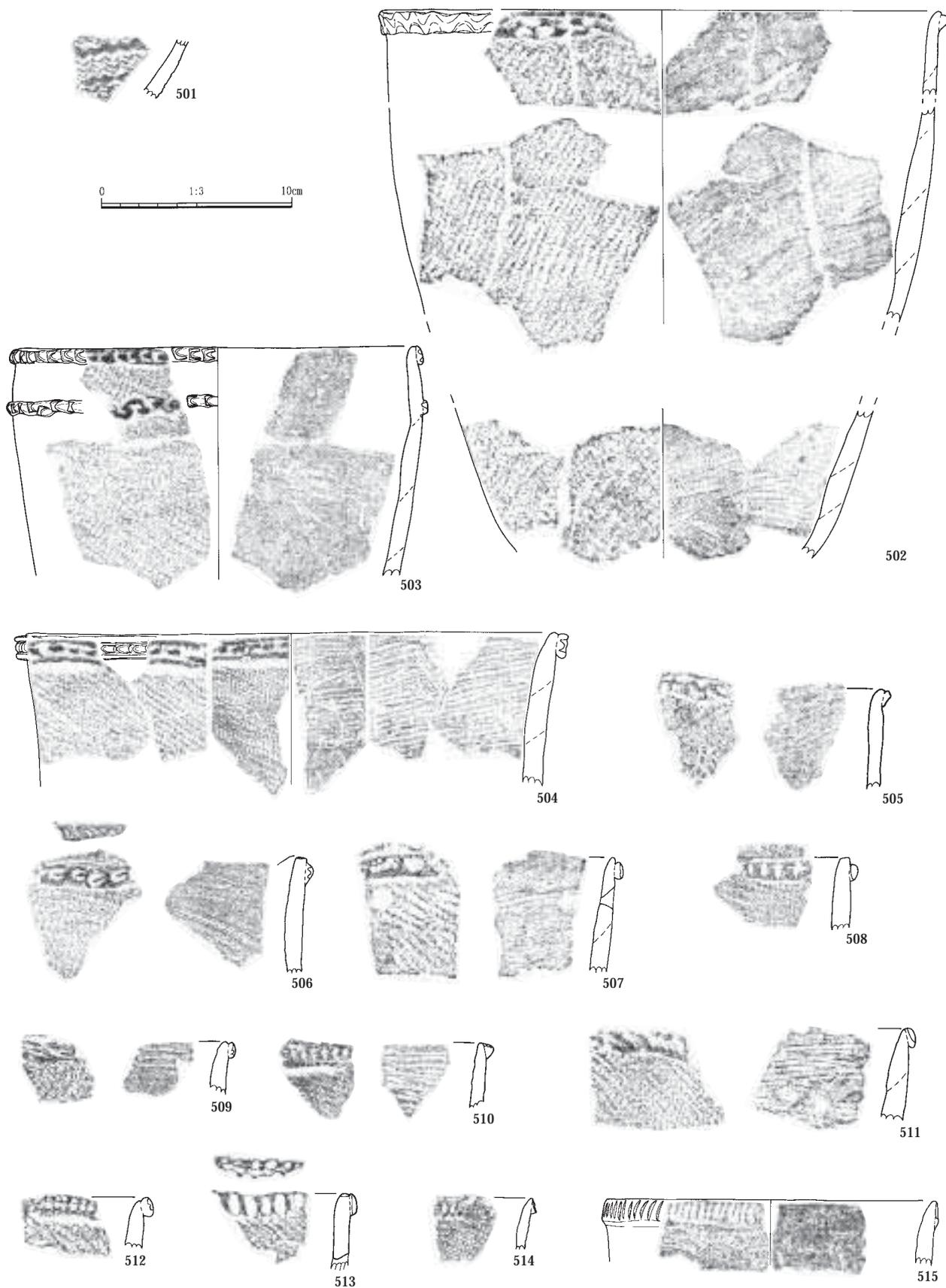


図108 包含層出土縄文土器〔1〕[早期末～前期初頭]

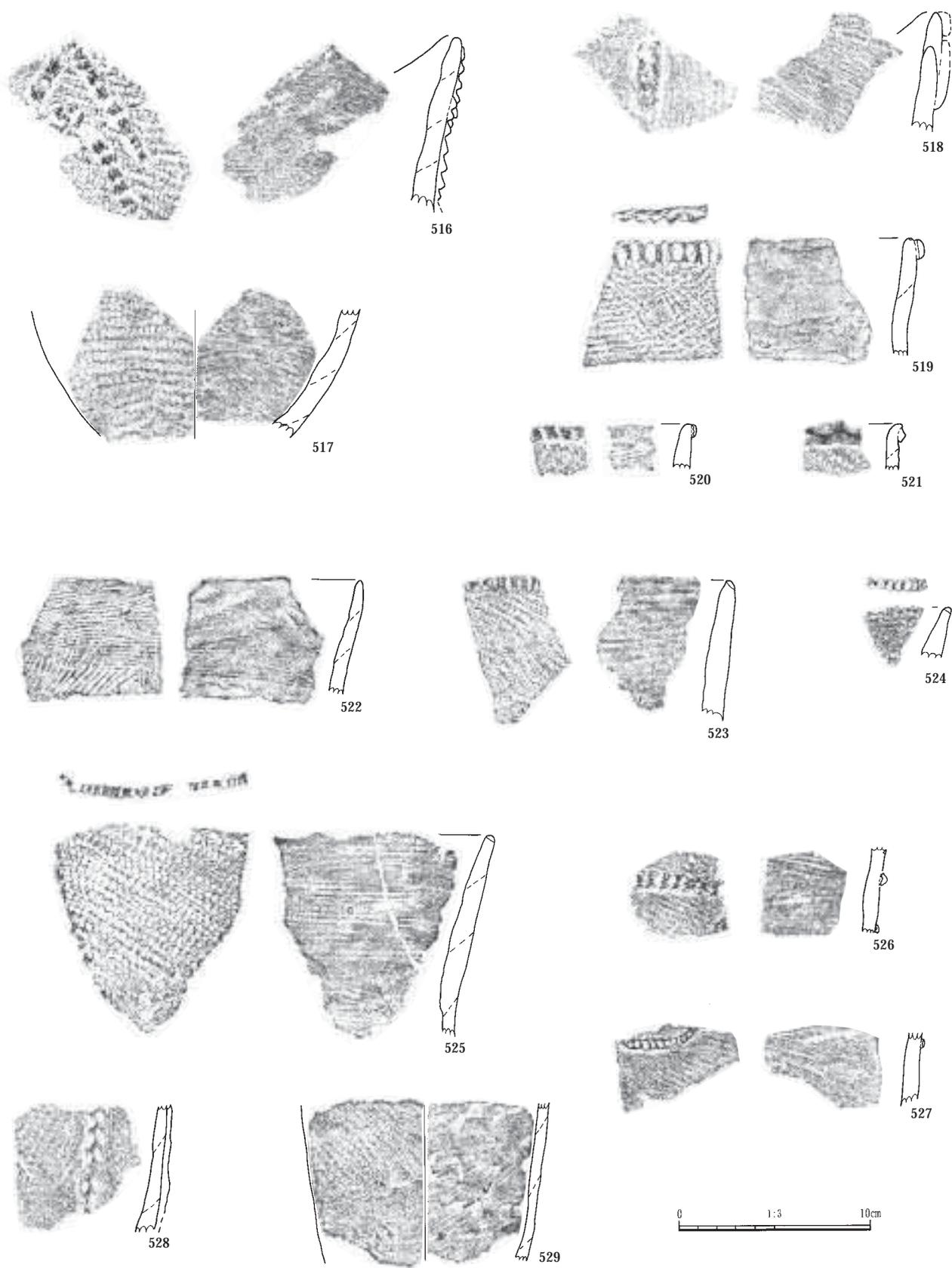


図109 包含層出土縄文土器〔2〕[早期末～前期初頭]

いて記述を加える。502は図上復元ながら全体の器形を想定できるもの。底部に向けてすぼまる砲弾形を呈している。隆帯は粘土をひねりながら貼り付けている。503や504も口径が復元できている。503は502や504に比べれば小型で、2条の平行隆帯をもつ。504は縄文施文の隆帯文土器のなかでは、繊維の混入量が少なく、焼成が良好で、遺存状態もよかった。また、外面の縄文も深くしっかりと施されている。514は明らかに小型の器形となるもの。隆帯の貼り付け方や成形の仕方、キザミの施し方などが第2調査区出土の25の土器に極めて類似しており、これがそのまま小型化したかのような土器である。515は小型の深鉢で、隆帯が肥厚帯状に低く広く貼り付けられている。隆帯のあり方が異質であるが、繊維が混入されること、外面に縄文が施文されることから、この一群に含まれるものとして捉えた。516・517は同一個体と思われる。やや小型で、波状口縁をもち、波頂部から2つの山形隆帯が垂下する。518も波状口縁で、口縁に沿う隆帯と、波頂部から垂下する隆帯が見られる。522～525は隆帯をもたない口縁部片。522以外には口唇部にキザミが施される。526～529は胴部片。529は小型の深鉢である。608も縄文地の小型深鉢（図113）。

<隆帯文土器（条痕地）>

条痕地のものは破片数にして2824点出土している。外面の調整が条痕によってなされる以外は、縄文地のものとほぼ同じ特徴をもつ。これらの破片の中から、口縁部片や、隆帯の残る破片を中心に掲載した（図110～114、530～621）。器種はすべて深鉢形土器である。調整は、貝殻条痕や複数種の植物質工具によると思われる条痕、ナデを内外に組み合わせて行う。条痕工具や調整は外面と内面で一致しない場合も多い。隆帯は多くが口縁付近に平行隆帯として貼り付けられる。隆帯は口縁端付近に貼り付けられるものが多いが、その位置は比較的バラエティーに富み、口縁端から下がった位置に貼り付けるもの、口縁端に貼り付けるもの、口唇上に乗せるように貼り付けるものなどが見られる。ほかに、縄文地のものと同じく、複数の横走隆帯をもつ個体や、垂下隆帯をもつものもあるほか、隆帯のないものもある。隆帯の断面形は縄文地のものに比せば多様性が高く、貼り付けの状態も、接点の小さいもののほかに、比較的しっかりと密着させているものも見られる。縄文地のものと同様に隆帯上にキザミを施すものが多く、キザミに使用される工具も縄文地のものと共通し、半裁竹管（状工具）、二枚貝の腹縁や背面、棒状や板状の工具などが見られる。また、口縁上端部にも同様の工具でキザミを施すものも見られる。530～552は隆帯の貼り付け位置が口縁端からわずかに下がるもの。530は口縁端付近の平行隆帯とそこから派生する垂下隆帯をもつ。538・550～552は小型深鉢。550は口縁端とその下に横走する平行隆帯をもつ。551は隆帯上と隆帯の上下に半裁竹管の刺突文列が施される。553～576は口縁端に隆帯を貼り付けるもの。553は小型深鉢。559はやや小型のもので、隆帯は粘土をひねりながら押圧して貼り付けている。554も同様の隆帯をもつ。570の隆帯は、粘土紐貼り付けの起点と終点の部分と思われ、粘土紐の両端部分を上下に重ねて収束させている。572も同様に粘土紐の端部が重なるが、一方がそのまま斜め方向に垂下していく。573・574は波状口縁で、口縁端に隆帯がつき、波頂部から垂下する隆帯がつく。575は平口縁で、口縁端に平行隆帯がつくほか、↑形に口縁から垂下する隆帯がある。577～581は口唇部に乗せるように隆帯を貼り付けているもの。いずれも隆帯の断面形は丸く、貼り付けの接点が極めて小さい。582～592・618は隆帯を口縁端にしっかりと密着させて貼り付けているもの。582は口径の復元ができた。隆帯貼り付け後に口縁端面にナデが加えられており、隆帯の継ぎ目が見られない。隆帯上は貝殻腹縁によるキザミ、外面には貝殻条痕が施され、顕著な円弧状をなす部分が見られる。

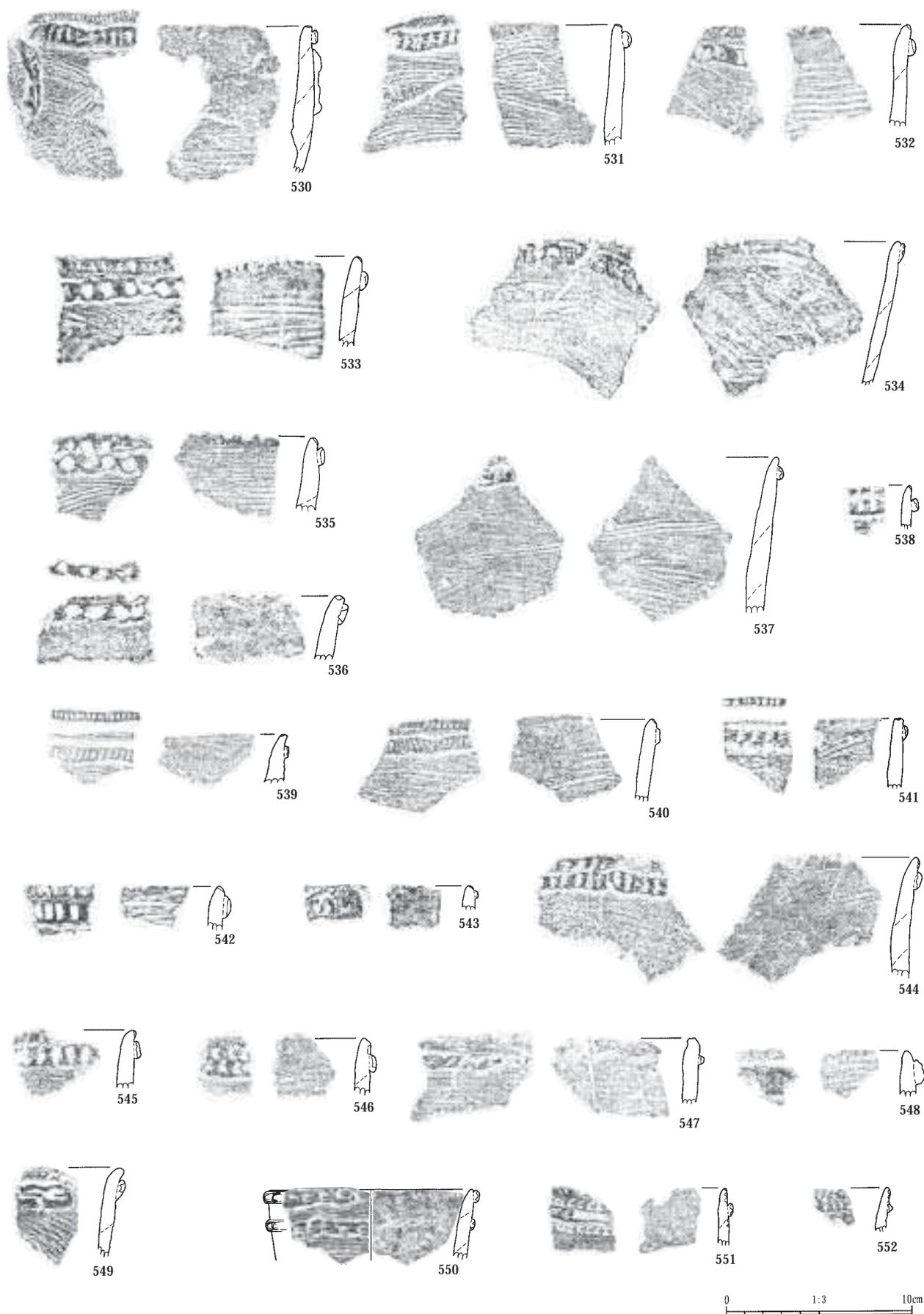


図110 包含層出土縄文土器(3) [早期末 ~ 前期初頭]



図111 包含層出土縄文土器(4) [早期末～前期初頭]

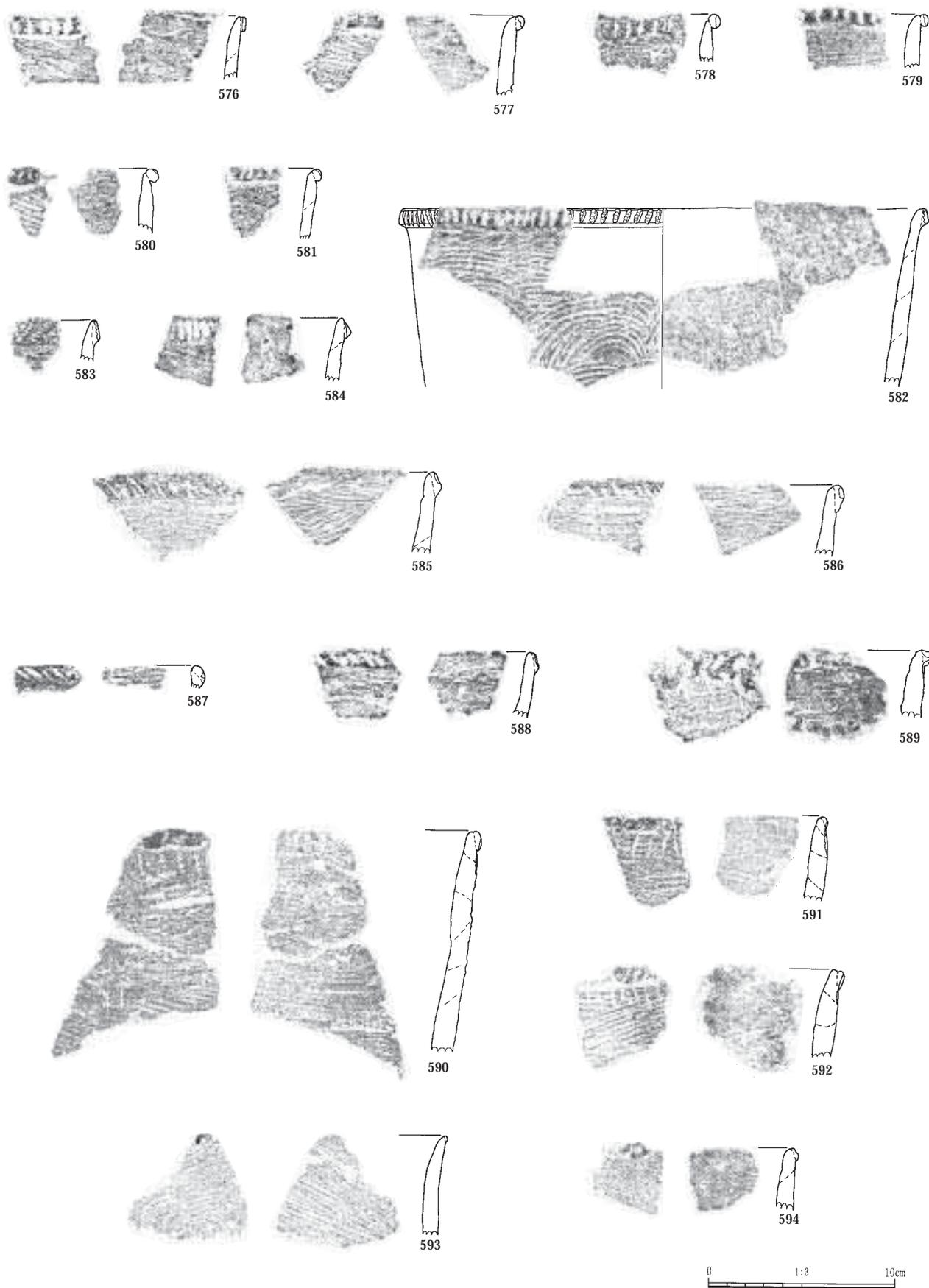


図112 包含層出土縄文土器〔5〕[早期末～前期初頭]

583・584は隆帯が断面三角形に整えられるもの。特に583は隆帯がやや幅広となるので、後述の西川津式の一群に含まれる可能性もある。585～592は隆帯が指でしっかりと押圧されて貼り付けられている。587は口縁上に積み上げるように粘土紐が貼り付けられ、隆帯状に突出しない。590～592はいずれも隆帯上から隆帯の下にかけて貝殻腹縁の連続刺突が施される。粘土接合のあり方が特殊で、いずれも口縁付近のみ外傾接合で積み上げている。593はきわめて細い隆帯が見られる。594も細い隆帯が貼り付けられる。595～609は口縁に隆帯をもたないもの。このうち、595～597には胴部に隆帯が見られる。595は無キザミの細い隆帯が不整方向につけられている。596は横走隆帯、597は斜位に垂下する隆帯がつく。いずれも口縁端にキザミが施される。598～609には隆帯が見られない。598～604は口縁端にキザミが施される。径復元のできた598は小型深鉢。605～609は口縁にキザミをもたないもの。607は口縁がやや外反する器形をなし、外面が全面ナデ、内面は植物質工具による条痕調整後ナデが施される。609は小型品で、外面に刺突文列をもつ。610～616・619～621は隆帯やキザミが施される胴部片。617は上端を欠くので胴部片か口縁片か判然としないが、口縁片618に隆帯の形態や施文が類似する。

<西川津式土器>

西川津式土器は破片数で、包含層中から33点、遺構内のものも含めて合計113点が出土した。前述のように、明確な特徴をもつ部位以外は条痕地の隆帯文土器と区別がつかないため、実際の破片数はこれよりもかなり多いものと思われる。622～627は西川津式A類。口縁部に肥厚帯を形成し、肥厚帯上や胴部に刺突文を施す。調整は条痕ないしはナデで、条痕工具は貝殻が主体となる。胎土に繊維を混入するものは少ない。622は粘土帯の貼り付けによる肥厚帯を形成しないが、口縁端より下がった位置に細く低い三角形の隆帯を貼り付けた後、口縁から隆帯にかけて貝殻腹縁(?)によるキザミを施す。この加飾の結果、口縁部にキザミの施された肥厚帯があるように見える。623は断面三角形の隆帯の上下に貝殻腹縁による連続刺突を施すもの。羽島下層 式に文様構成が類似する。625は肥厚帯上に縄文が施される。626は肥厚帯の中央に横走する沈線が入り、これを隔てて2列の貝殻腹縁刺突文列が施される。外面は貝殻と植物質工具を併用する条痕で、内面はナデで仕上げられる。胎土に繊維が多く混入されている。ほかの西川津式A類資料と異なる点が多いが、肥厚帯が形成されていることを重視してこれに含めておく。630～632は西川津式B類と思われるもの。630はキザミの施された細隆帯が複数条横走する。631は外面にR L 縄文が施されているが、細隆帯をもつこと、胎土や焼成の状態が西川津式土器の一群に類似することからこれに含めた。ただし、縄文地の隆帯文土器のバリエーションである可能性も高い。632は屈曲する胴部片。屈曲部にキザミが施される。633～635はいずれも胎土や焼成、色調が類似する。細隆帯と押し引き文が施される点や、634・635は内傾することなどから、西川津式C類の可能性もある。

<その他の条痕文土器・底部>

636・637は条痕地文の胴部片。636は丸底の砲弾形を呈す。637は大型の深鉢になるとと思われる。638～644は早期末～前期初頭土器の底部。638は非常に小型の深鉢底部。尖底に近い丸底。639～644は底がやや平たくなる丸底。内外に条痕ないしはナデが見られる。644は底部から胴部にかけて、若干の立ち上がりを見せる。

前期(図116、図版74、表53・54)

西川津式土器を除いた、前期土器は少なく、羽島下層 式に属するものや、彦崎Z 2 式のもの

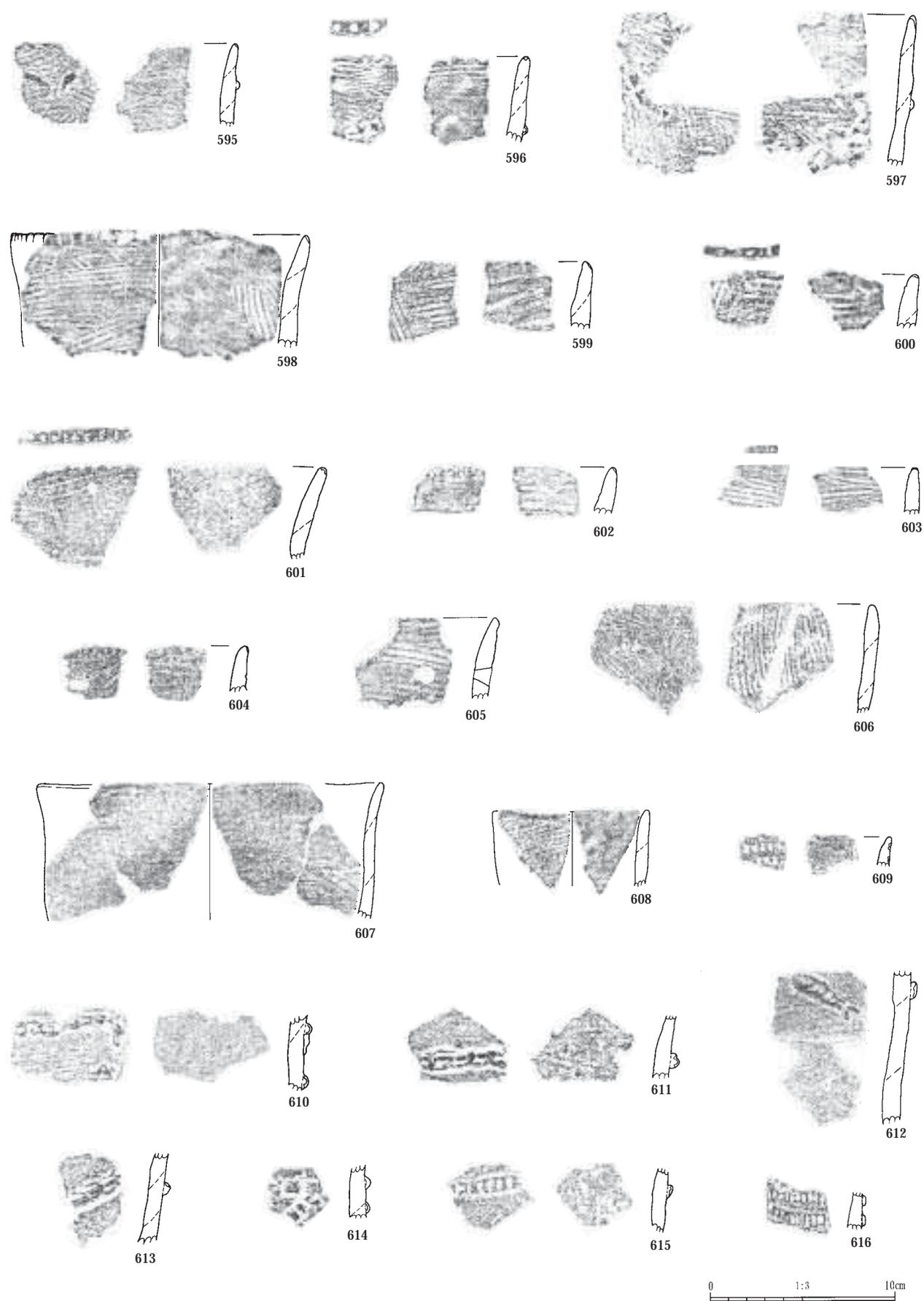


図113 包含層出土縄文土器〔6〕 早期末～前期初頭〕

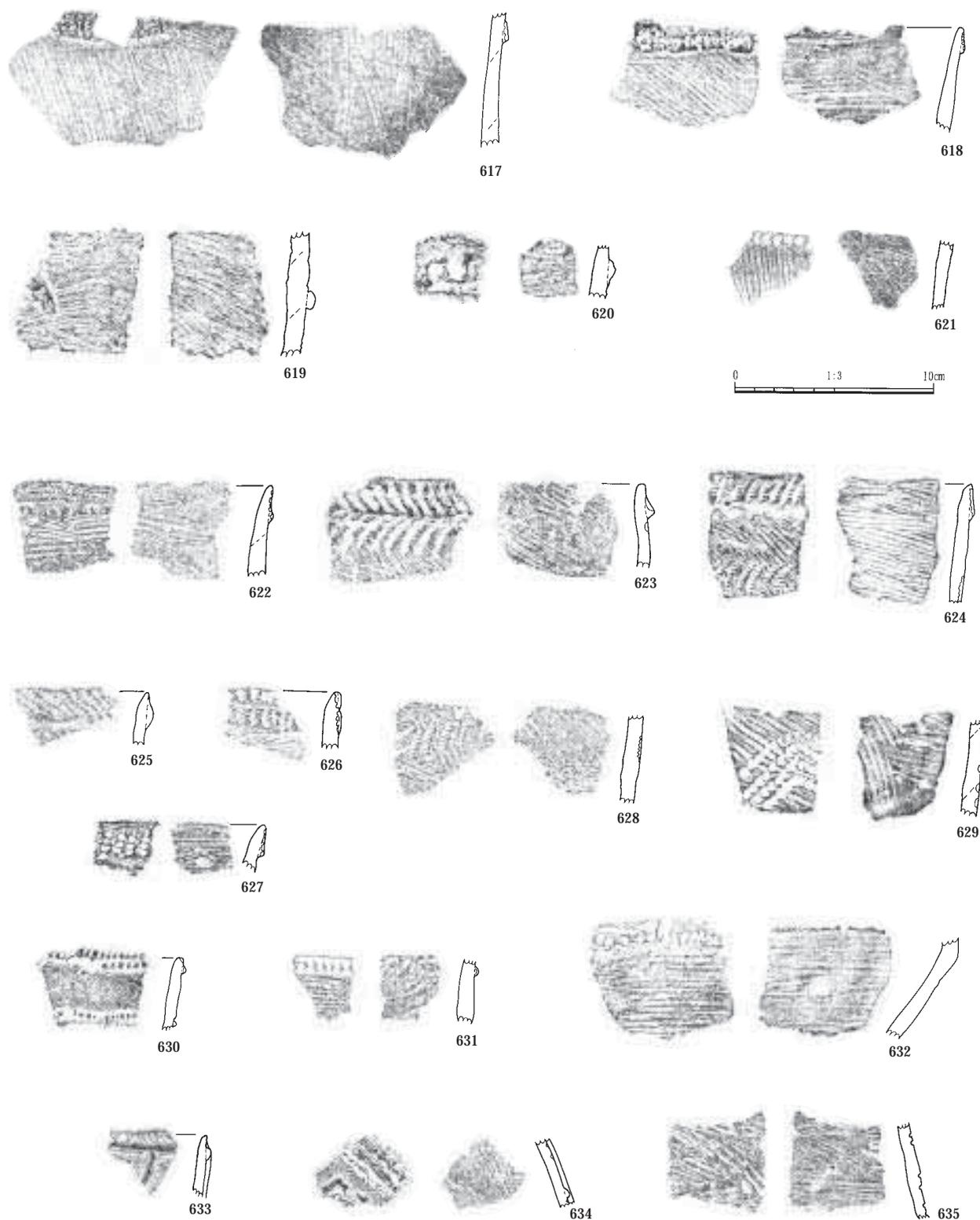


図114 包含層出土縄文土器〔7〕[早期末～前期初頭]

わずかに見られるのみである。破片数は全部で11点である。645～647は断面三角形の突帯の上下に爪形文列を施した口縁部片、648も爪形文列の施される胴部片で、羽島下層 式と考えられる資料である。649・650は刺突文が施されるもので、型式不明のもの。649は貝殻背面で押し引き状の刺突文列が施される口縁部片。650は幅広の粘土帯を口縁に貼り付け、貝殻腹縁で刺突を施すもの。いずれも、西川津式に含まれる可能性がある。651は彦崎Z2式。

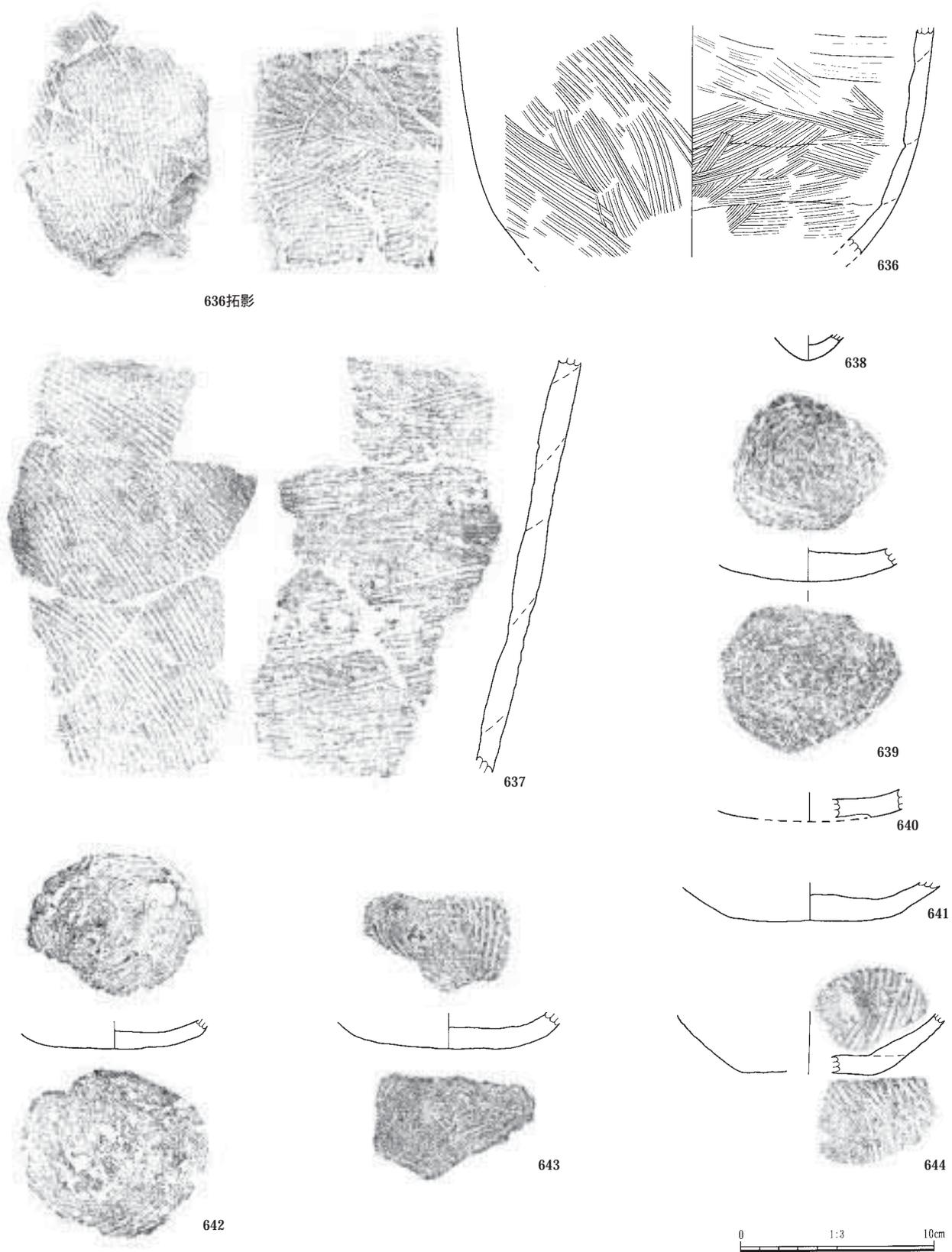


図115 包含層出土縄文土器(8)【早期末～前期初頭】

中期(図116、図版74、表54)

中期土器は全部で18点の破片が出土した。652は縄文地で貼り付け口縁をもつ波子式土器。653は縄文地に沈線が施される船元式土器。654は撚糸文が施される平底の底部で、里木式にあたる。

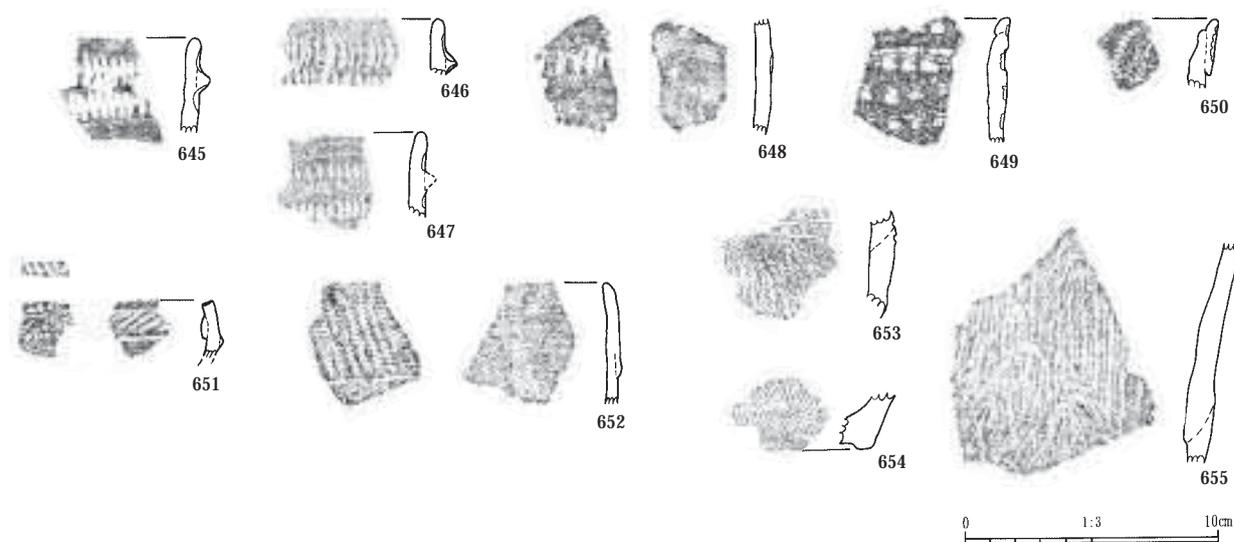


図116 包含層出土縄文土器〔9〕前期・中期〕

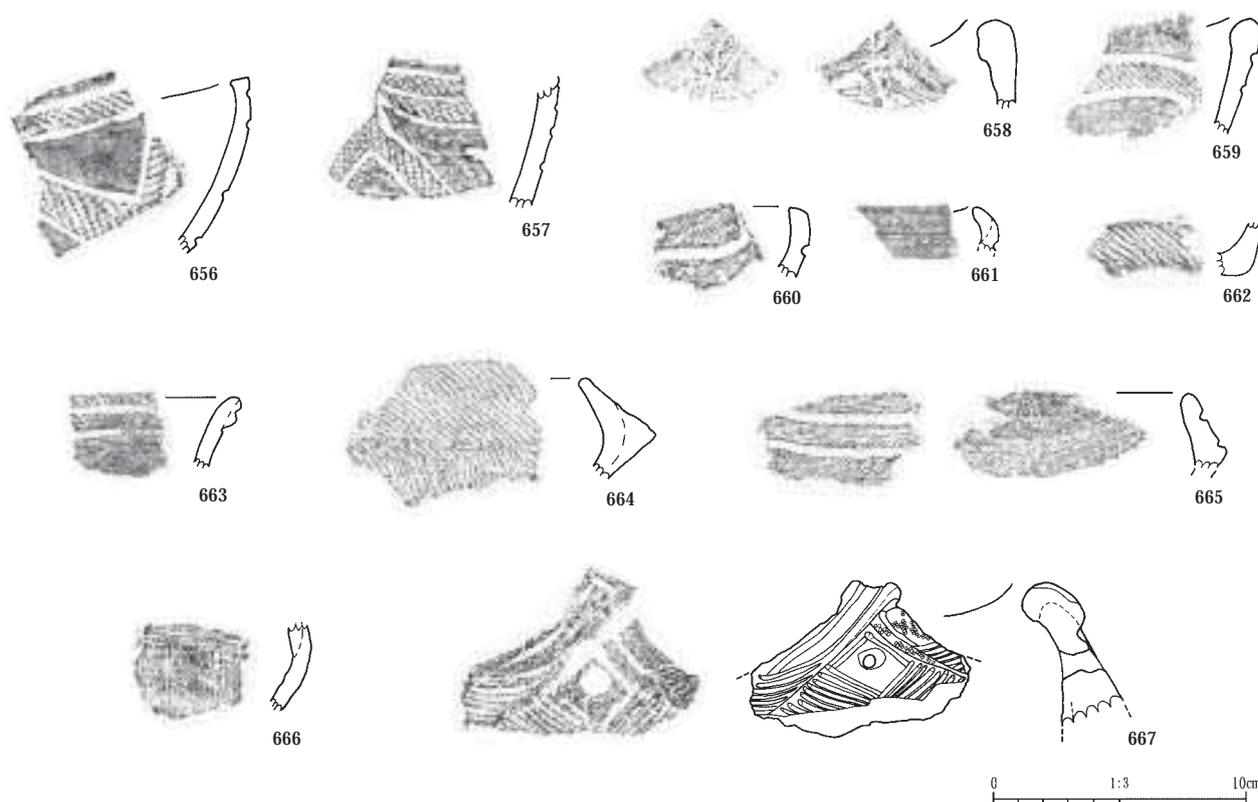


図117 包含層出土縄文土器〔10〕後期初頭～前葉〕

655は無節縄文が施されることから船元式 式と思われる。

後期初頭～前葉（図117、図版75、表54）

中津式または福田K2式に帰属すると思われる磨り消し縄文土器の破片は7点出土しており、すべて掲載した。656は浅鉢形土器。波状口縁をなし口縁端は面取りされる。657は横走る3本沈線の縄文帯と、そこから垂下する2本沈線の楕円文で飾られる。658は波状口縁の波頂部。659は波状口縁で端部は玉縁状を呈する。660は上端が面取りされる波状口縁。661は丁寧なミガキが施されている。破片下端に沈線が見られる。662は底部で、破片上端に横走る沈線が見られる。後期前葉

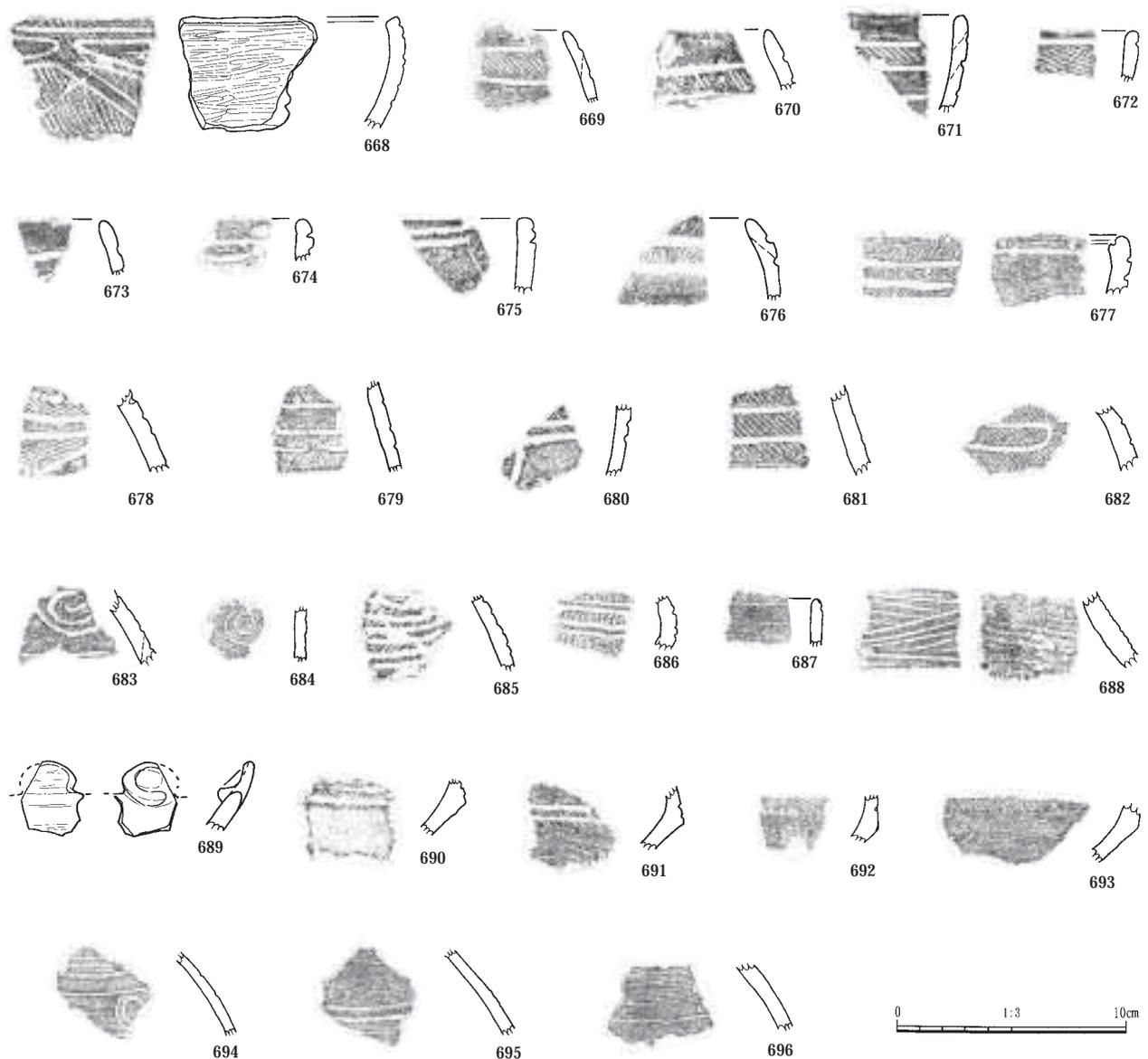


図118 包含層出土縄文土器〔11〕後期中葉〕

の縁帯文土器と思われるものは5点出土し、すべて掲載した。663は口縁端に肥厚帯を形成し、沈線と縄文を施すもの。664は内側に屈曲する口縁で、外面に無節縄文を施す。665も664と同様の器形となる口縁で、外面に沈線、内外に細密条痕が施される。666は条線が施される胴部片。667は口縁端に隆帯が貼り付けられる波状口縁の波頂部で、外面は縄文と沈線で加飾される。縁帯文系の土器と思われるが、非在地系の搬入土器の可能性もある。

後期中葉（図118・119、図版75、表54・55）

後期中葉の土器は比較的まとまった量が出土しており、有文土器は破片数にして179点が出土している。このうち、いくらかは後期初頭や前葉のものが含まれていると思われるが、大勢に影響があるほどの割合ではないと思われる。出土した資料は、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」（千葉2001）の段階と、新相の彦崎K2式の段階の2時期に分けられる。厳密に両者を区別しきれない部分が多いが、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」の段階のものが中心になる。668～686は沈線と充填縄文で施文されるもの。明確なモチーフをもつ区画文を構成するものも多く見られる。縄文の撚りはR Lのものが多い。676には赤色顔料の付着が見られる。687は口縁端にキザミが施さ

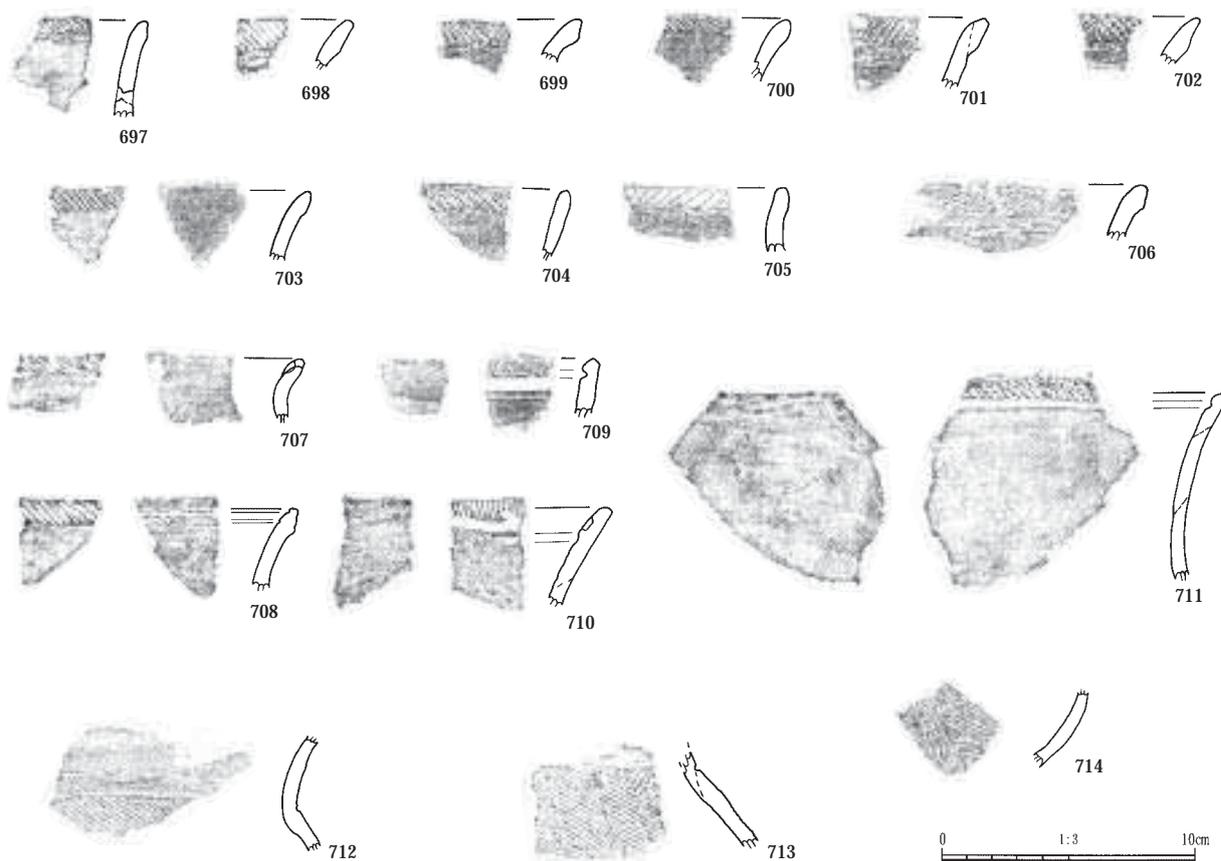


図119 包含層出土縄文土器〔12Ⅱ後期中葉〕

れ、口縁下には巻貝による擬縄文が施される。彦崎K 2 新段階のものであろう。688は外面に矢羽根状沈線が施される。これも彦崎K 2 式併行のものであろう。689～693は浅鉢形土器。689は渦巻形の突起がつけられた口縁部片。690～693は屈曲部の破片で、いずれも屈曲部に沈線や縄文が施文される。694～696は注口土器で、すべて同一個体の可能性が高い。丁寧なミガキで調整され、沈線で渦巻きや横走る多条線が施される。697～714は口縁端部と胴部に縄文を施すのみで、文様モチーフが構成されないもの。697～711は口縁部片。697～707は外面に縄文が施文される。口縁部が肥厚帯状に段をなすものと（697～703・706）、段をなさずに端部を丸く収まるもの（704・705・707）がある。前者が古相のもの可能性が高く、後者が新相のもの可能性が高い。707は内面にも刺突が施される。708～711は内面に沈線と縄文が施されるもの。708・709は口縁外面にも縄文が施されるが、710・711は外面は無文である。口縁部が肥厚帯状の段をなす708が古相のもの、ほかは新相のものであろう。712～714は胴部片。いずれも後期中葉以外のもの可能性もあるがここに一括しておく。712・713は頸部屈曲部を含む破片。713・714は羽状縄文が施されている。

後期後葉（図120、図版75・76、表55）

凹線文土器群を後期後葉とした。破片数にして包含層から32点、遺構内のものも含めると33点が出土している。715～721は口縁内面に横走る沈線を施し、沈線の上側に斜めのキザミを施すもの。口縁端部が面取りされ、断面が箱型になるものがほとんどである。720・721は外面に凹線が施されるが、ほかは無文である。これらはいわゆる「馬取式」にあたる土器である。722～726は外面に複数条の凹線を施すもの。722～724は口縁、725・726は体部。726は胴部屈曲部で、上半には凹線が施されるが、下半は無文である。727～729は口縁が屈曲して立ち上がる浅鉢。727は口縁端と屈曲

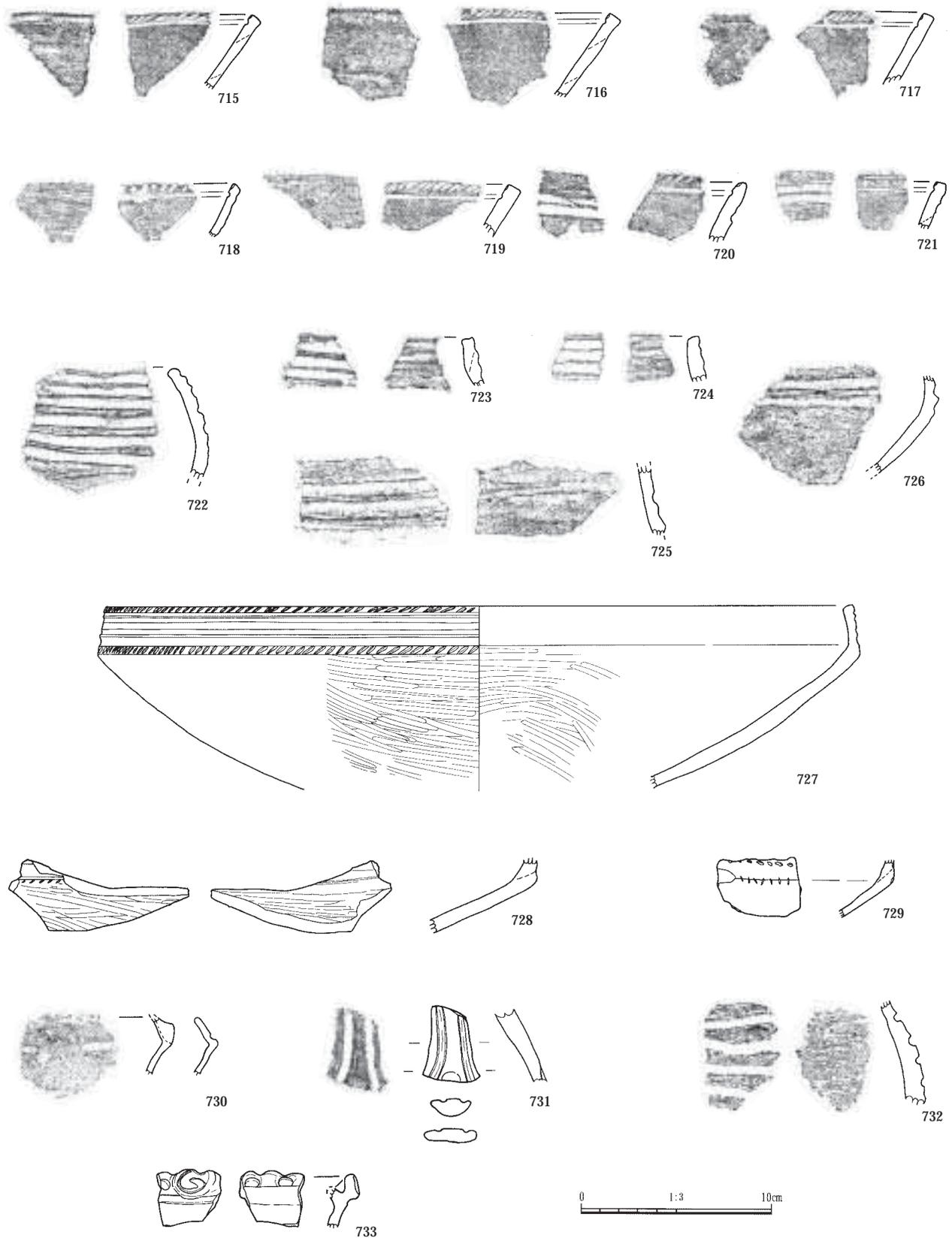


図120 包含層出土縄文土器〔13〕後期後葉ほか〕

部に斜めのキザミ文列が入り、その間に凹線が4条施される。内外面ともミガキが丁寧に施される精製品。728も727に類似した文様構成になるとと思われる。729は屈曲部とその上にキザミが施される。凹線が確認できていないので、中葉のものの可能性もある。730は注口土器の口縁部と思われる。

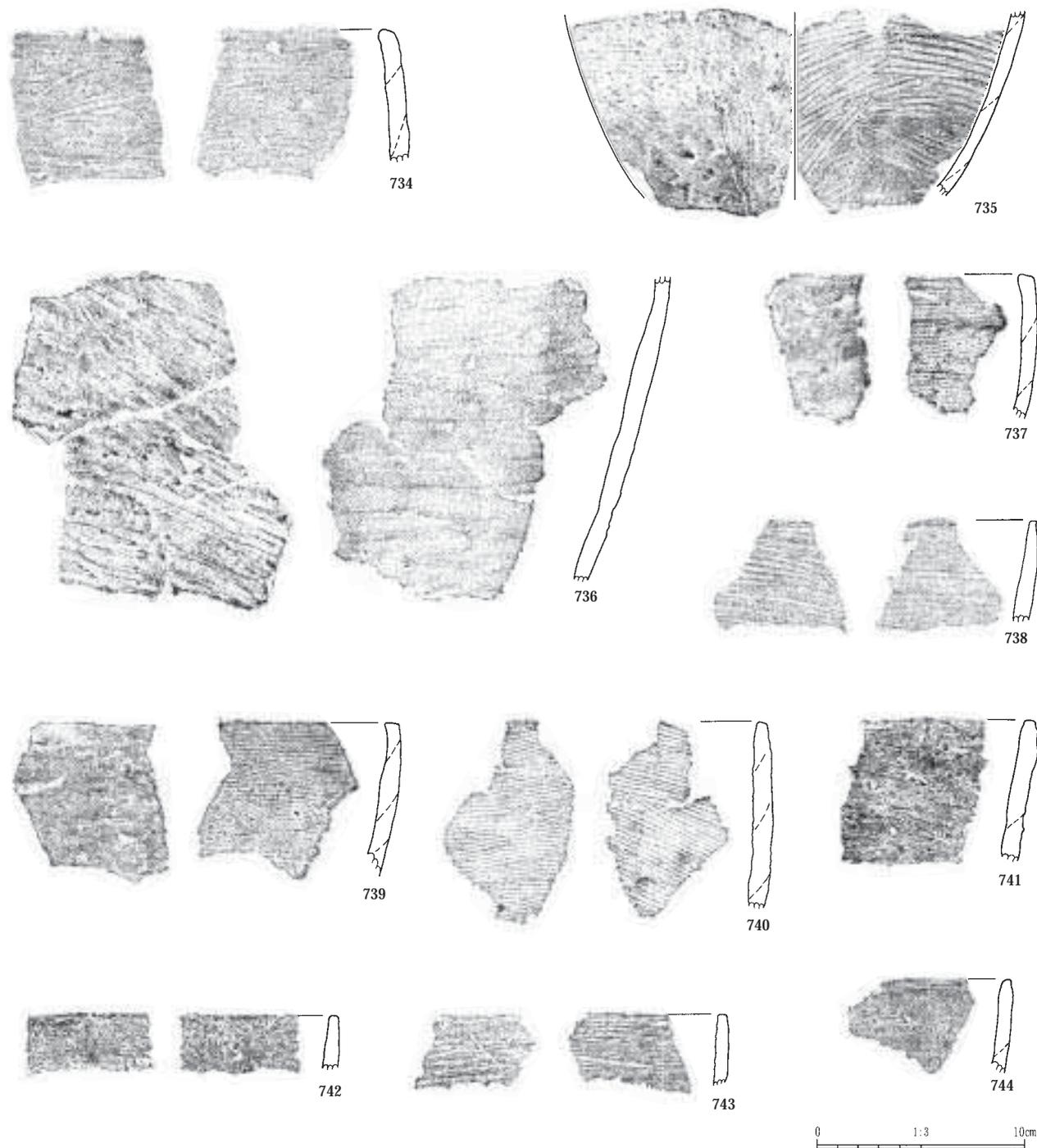


図121 包含層出土縄文土器〔14Ⅰ粗製土器〕

る。これらの凹線文土器はいずれも元住吉山 式期のもので、いわゆる「馬取式」の特徴を備えた土器群といえる。

時期不明のもの（図120、図版75・76、表55・56）

731は橋状把手と思われる破片。凹線と凹点が施される。胎土や焼成、色調は凹線文土器に近似するが、凹線文段階には橋状把手は一般的でないと思われるため、あるいは後期前葉のものであるうか。732は外面に非常に深い沈線を施すもの。沈線は押し引き状に深く削り取っているようである。外面はナデ、内面はケズリで調整される。後期中葉のものであるうか。733は径が小さい口縁で、壺形や注口形の器形をなす土器かと思われる。外面には渦巻形を粘土の貼り付けと沈線で表現

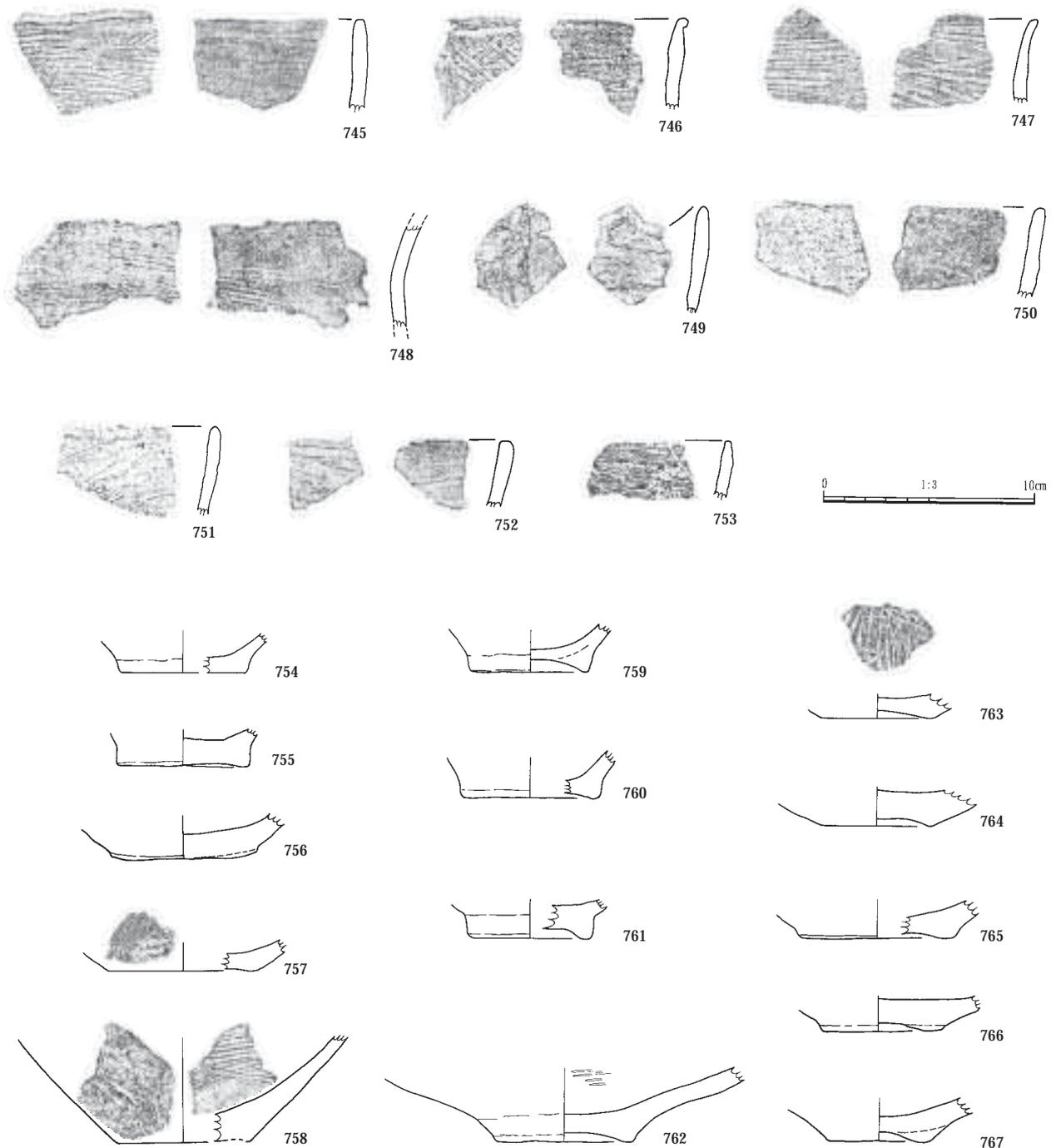


図122 包含層出土縄文土器〔15〕粗製土器・底部〕

する突起と円孔の入る瘤状突起がつくられ、内面にも円孔が施される。内外面ともナデで丁寧に調整される。

粗製土器・底部（図121・122、図版76・77、表56）

粗製土器として分類したものは合計1997点出土している。小片が多く、遺存状態の良好な個体は少なかった。そのうち、口縁部片や残りのよい体部片を掲載した（734～753）。調整は、条痕、ケズリ状調整、ナデ、ミガキなどが内外に組み合わせて施される。概して、内面のほうが平滑に仕上がる調整が選ばれることが多いようである。754～767は後期土器の底部である。754～758は平底、759～767は凹み底。

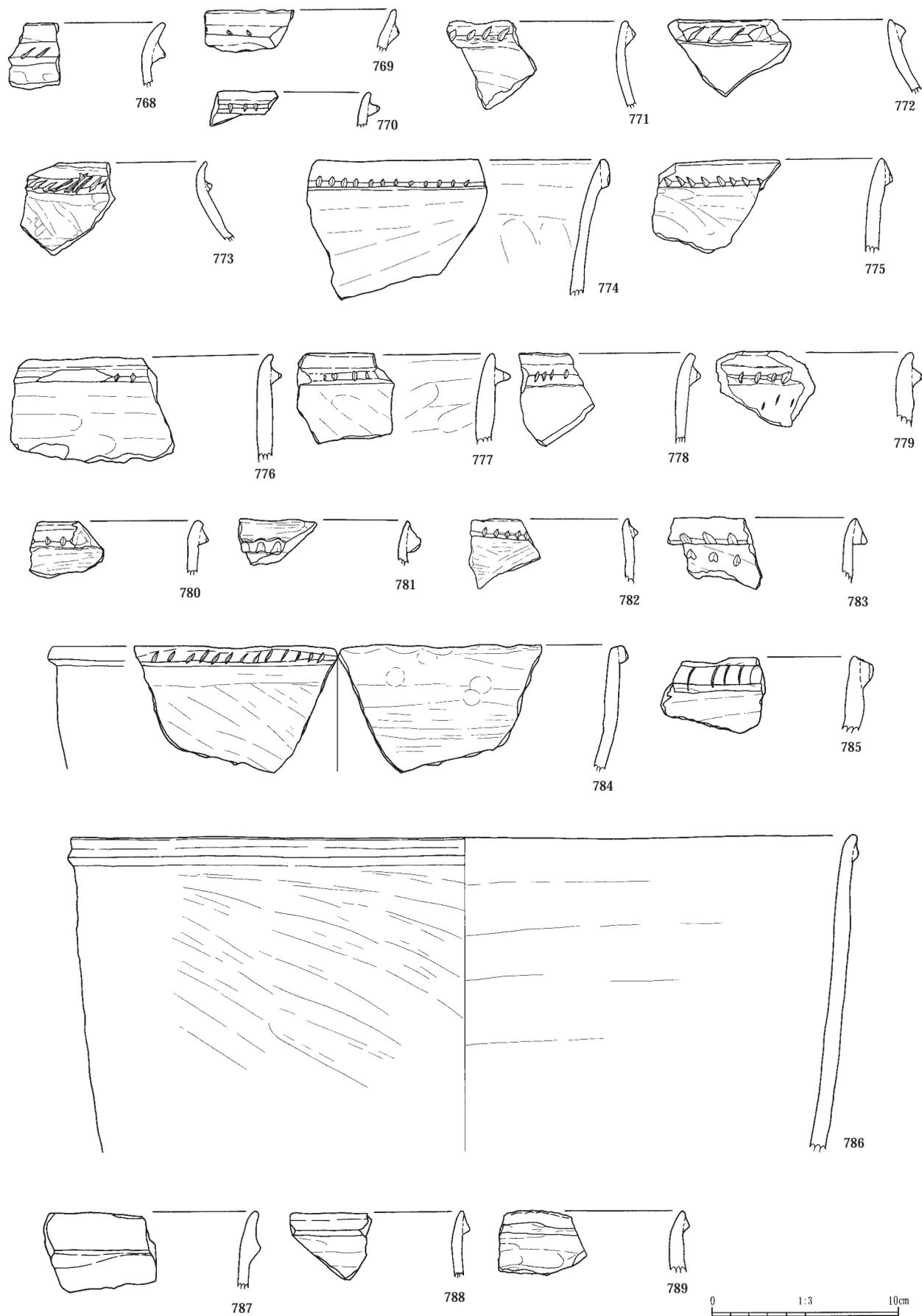


図123 包含層出土突帯文土器(1)

突帯文土器(図123・124、図版78、表56・57)

突帯文土器は包含層から57点出土している。768～785は刻目突帯をもつ深鉢。768～772は屈曲形の深鉢で、突帯は口縁端部から下がった位置をめぐる。口縁は、768～771が外反し、772は内傾している。773は突帯より上方で口縁端部を外側に屈曲させており、器形からいわゆる浅鉢変容壺と思われるが、刻目突帯をめぐるため、深鉢変容壺の特徴も兼備していると捉えられる資料である。774・775は屈曲形の深鉢で、突帯が口縁端部に接してめぐる。口縁は緩やかに外反する。776～781は砲弾形の深鉢で、口縁部が突帯付近でわずかに外反する。このため一部屈曲形が含まれている可能性もある。突帯は口縁端より下がった位置をめぐる。779の外面には突帯にキザミを施す際についたと見られる線状の傷痕が見られる。781の突帯には棒状工具を下方から押圧してキザミがつけられる。782は砲弾形の深鉢で、突帯は口縁端部からわずかに下位をめぐる。783～785は砲弾形で、突帯は口縁端部に接してめぐる。783の外表面は突帯上のキザミの施文時に同時についたキザミが見られる。785は半裁竹管状の工具で非常に細かいキザミを施している。786～799は無刻目突帯文土器の深鉢で、器形はいずれも砲弾形である。786～790・793・794は口縁部が突帯付近でわずかに外反するもので、一部屈曲形の器形を含む可能性がある。突帯は口縁端部から下がった位置をめぐる。793・794は口縁端部が突帯の上で外反する。796～798は突帯が口縁端部から下がった位置をめぐる。797・798は口縁上端が面取りされている。791・792・795・799は突帯が口縁端部に接してめぐる。791はいわゆる垂れ下がりの突帯であるが、突帯の中央部を強くなでており、断面形は弧状を呈する。口縁端部が受け口状になっている。

これらは、口縁端の処理の仕方、刻目の形態、器面調整からみて、濱田編年の「突帯文 期(古)」

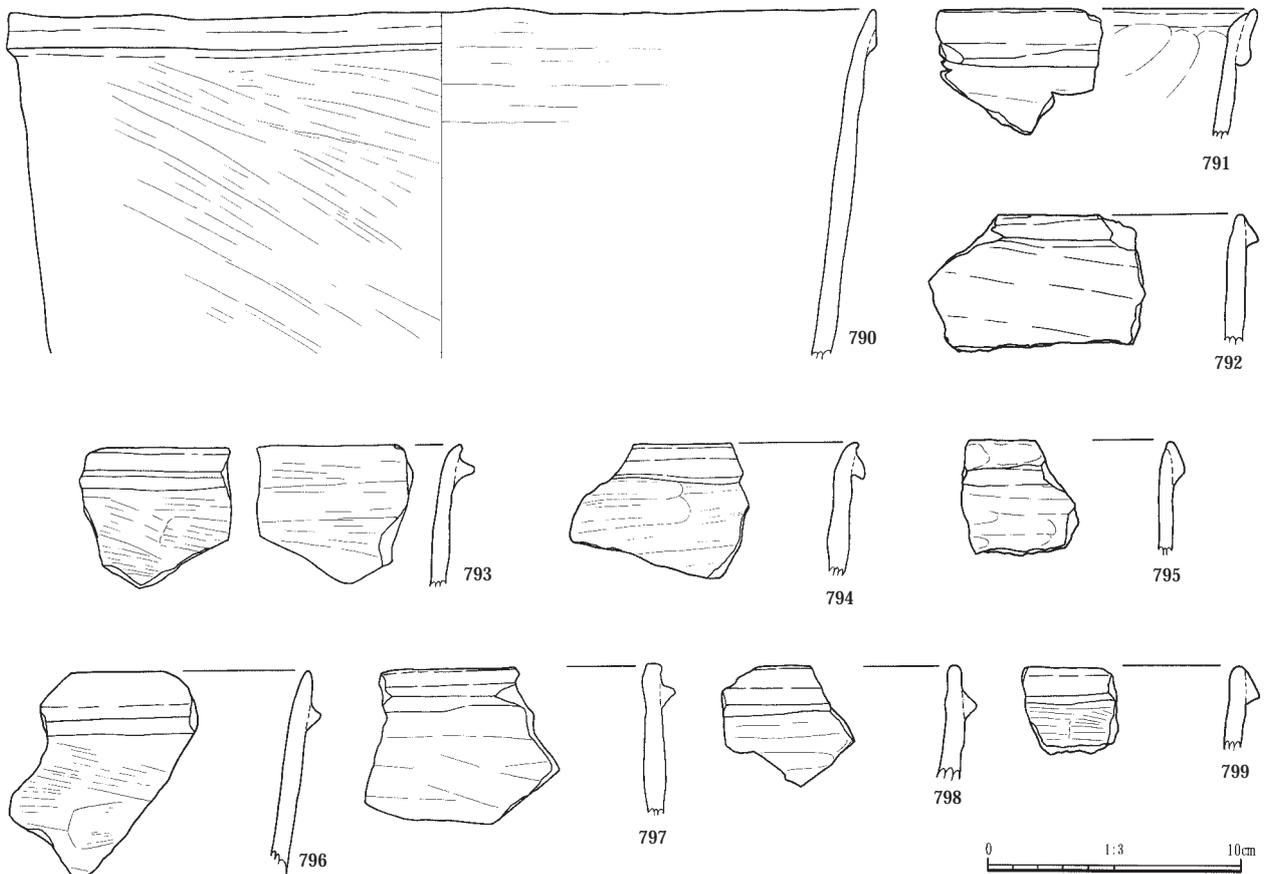


図124 包含層出土突帯文土器(2)

(濱田1999) から弥生前期中葉にかけてのものと思われる。

(北)

4. 石器 (図125～152、図版79、表11～13・59・60)

概要

石器は包含層から5885点、遺構内のものも含めると6010点出土している。縄文時代から弥生時代にかけてのものと思われる。後述するが、遺跡内での分布や石器の形態、石材構成から考えて、縄文時代に帰属するものが主体となると思われる。表に器種・石材別の組成を示した(表11)。器種の内訳は、剥片・碎片が5344点で全体の89%を占め、石核・ブランクが94点で約2%、残りが石器器種で約9%となる。石器器種は楔形石器が186点、石鏃が148点出土し、この2器種が組成上の主体となるほか、スクレイパーも多く57点が出土している。石材は黒曜石が主体で約93%を占め、ほかに硬質安山岩が約6%の割合を占めるほか、その他の石材が約1%ある。いくつかの資料で蛍光X線分析による石材産地推定を行ったところ、黒曜石は隠岐島久見産および隠岐島箕浦海岸産、硬質安山岩は香川産サヌカイトの可能性が高いとの結果が出ている(第6章第6節参照)。黒曜石のうち隠岐久見産とされたものの肉眼観察上の特徴は、漆黒色のもの、やや透明度の高い黒色のもの、やや青灰色がかかるもので、隠岐箕浦海岸産とされたものはやや白みがかかり表面が梨肌状を呈するものであった。分析していないほかの資料では、前者の特徴をもつものが圧倒的多数を占め、後者はわずしか見られない。肉眼観察による特徴差でしかないので確実ではないが、本遺跡の黒曜石は久見産が中心をなす可能性が高い。硬質安山岩は分析を行っていないものも含めて肉眼観察では違いは認められない。

分布

石器の分布の概要を表すために、グリッドごとに器種・石材別の組成を示した(表12・13)。遺構内出土の石器組成もあわせて掲載している。ただし、遺構内出土のものでも遺構に伴わないと判断したもの(第1遺構面の遺構内出土など包含層の巻上げや混入の可能性の高いもの)はそのグリッドの包含層の石器数に加算している。また、グリッドごとに出土量を階級分けして表した分布模式図も示している(図125～127)。これらを見ると、広い範囲に石器の分布が認められる。量的なまとまりをある程度もつのはA区、B区東部、C区北東部、E区である。なかでも、C2・D2・D3グリッドを中心とするA区東部と、G3・H3・I2グリッドを中心とするB区東部からC区

表11 石器石材別組成表

器種 石材	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	石匙	楔形石器	楔形石器削片	石剣	石鏃	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	碎片	石核	ブランク	原石	打製石斧	磨製石斧	石胞丁	不明磨製石器	石錘	敲石	磨石	砥石	計
黒曜石	109	14	52		169	6		1	50	36	2869	2206	68	22	1									5603
硬質安山岩	39	4	5	2	16	1	1	1	4		211	55	2			1								342
粗粒安山岩																2	1			31	10	3		47
頁岩											2					1			1					4
細粒花崗岩																		1					2	3
水晶					1									2										3
粘板岩																		1					1	2
瑪瑙											1				1									2
緑色片岩																	2							2
蛇紋岩																	1							1
ホルンフェルス																				1				1
計	148	18	57	2	186	7	1	2	54	36	3083	2261	70	24	2	4	4	2	1	32	10	3	3	6010

第5章 第3 調査地の調査

表12 グリッド別石器組成表(1)

グリッド	石材	AH	AHBk	S	TS	PE	PESp	Pt	Dr	RF	UF	Fl	Ch	Cr	Bk	RM	CAx	PAx	Si	PS	SW	HS	GS	WS	計	
C1	黒曜石					1				1		8													10	
	硬質安山岩								1																	1
C1・D1	黒曜石	2		1		2				3		31														39
	硬質安山岩											2														2
C2	黒曜石	3	1	6		11					4	154	143	3	2											327
	硬質安山岩	2		1								15	1	1												20
C4	黒曜石					1						9	5													15
	硬質安山岩											1														1
D1	黒曜石					2				1		28	36													67
	硬質安山岩										4	5														9
D2	黒曜石	5	2	4		9				1	2	240	93													356
	硬質安山岩	3										15														18
D3	粗粒安山岩																					1				1
	黒曜石	3		4		1				1	2	57	15													83
D3・E3	硬質安山岩	3	1	1						2		7	1													15
	黒曜石	2		1		2				2	1	53	79	1												141
D4	硬質安山岩	1										8	4													13
	緑色片岩																		1							1
D4	黒曜石					1						8	5													14
	ホルンフェルス																					1				1
D5	黒曜石			1								3	3									1				7
	硬質安山岩					2						7	1													10
D6	黒曜石											1														1
	粗粒安山岩																					1				1
D8	黒曜石			1								12	10													24
	硬質安山岩	6		2		6				2	1	147	118	3	2											287
E1	粗粒安山岩	3				1						8	1					1								14
	頁岩											1											1			2
E2	黒曜石	1										10	4													15
	硬質安山岩										1															1
E3	黒曜石					1						6	4													11
	粗粒安山岩																		1							1
E4	黒曜石	2		2							1	22	29	1												57
	硬質安山岩			2								4														6
E5	黒曜石	1										6	10													17
	硬質安山岩										1	14	1													16
E6	粗粒安山岩					1						2														3
	黒曜石																					1				1
F1	黒曜石								1			21	35													57
	硬質安山岩					2						2	3	2												9
F2	黒曜石	2	1			1						18	27	1												50
	粗粒安山岩																						4			4
F3	黒曜石					1						3														4
	硬質安山岩																									1
F4	粗粒安山岩					1																	1			1
	黒曜石	3																								3
G1	硬質安山岩	3				6				2	2	105	83	6	3											210
	黒曜石											1														1
G1・G2	黒曜石		1	1																						2
	硬質安山岩	2	1	1		1				1	1	48	44	6	1											106
G2	粗粒安山岩											2										5				2
	黒曜石	11	1	4		7	1			1	2	124	199	10	1											5
G3	硬質安山岩	3		1		1						11														361
	粗粒安山岩																						10	1		16
G4	黒曜石	1		1		2						56	21	4												13
	硬質安山岩					1						1														85
G5	粗粒安山岩																									2
	黒曜石	1										9	3													2
G8	黒曜石											1														13
	硬質安山岩											1														1
H1	黒曜石									1		17	7													25
	硬質安山岩												1													1
H2	黒曜石		1			1						23		1												26
	硬質安山岩																									1
H3	黒曜石	7	2	3		7				3	5	205	132	10	3											377
	硬質安山岩	1										3														4
H4	粗粒安山岩																						2			2
	黒曜石	1				2					1	78	69	5	1											157
H5	硬質安山岩											5	1													6
	黒曜石	1		1		1						9	30													42
H7	硬質安山岩														1											1
	黒曜石											1														1
H8	黒曜石											1														2
	硬質安山岩	3				2					4		80	40	1											130
I1	粗粒安山岩											4														4
	黒曜石	1										9														10
I1・I2	黒曜石	8		2		9				2	1	453	818		2											1295
	硬質安山岩	1										22	33													56
I2	黒曜石	2		1		6				2	1	71	13													96
	硬質安山岩			1		2						40														43
J8	黒曜石	1		1		2						5														9
	硬質安山岩	1										2														3
L5	黒曜石										1	2														3
	硬質安山岩					1																				1
L6	黒曜石											2	1	1												5
	硬質安山岩	1										1														1
L7	黒曜石																									1
	硬質安山岩					1						1														1
L7・L8	黒曜石																									1
	硬質安山岩	1										1														2

表13 グリッド別石器組成表(2)

グリッド	石材	AH	AHBk	S	TS	PE	PESp	Pt	Dr	RF	UF	F1	Ch	Cr	Bk	RM	CAx	PAX	Si	PS	SW	HS	GS	WS	計	
L8	黒曜石											1													1	
	硬質安山岩	1																								1
L10	黒曜石											1														1
	水晶														1											1
M6	黒曜石					3					1	5	1													10
	硬質安山岩					1																				1
M7	黒曜石	3				3				3		55	4													68
	硬質安山岩	3			1	3						29														36
	瑪瑙											1														1
	粗粒安山岩																						1			1
M8	黒曜石	2				1	1					24		1									1			29
	硬質安山岩									1		3														4
	細粒花崗岩																			1					1	2
	粘板岩																			1						1
M8・M9	黒曜石	1																								1
	黒曜石											1														1
M9	硬質安山岩											1														1
	黒曜石	2				6						18														27
	硬質安山岩	2										1														3
	細粒花崗岩																							1		1
M10	水晶					1																				1
	黒曜石			1		2						9														12
	硬質安山岩											2														2
	頁岩																				1					1
	蛇紋岩																		1							1
M10・N10	黒曜石	1				2	1					2														6
	硬質安山岩	1										3														4
N6	黒曜石											1			1											2
	黒曜石	6				3					1	22														32
N7	硬質安山岩	1		1								2														4
	瑪瑙																1									1
N8	黒曜石	3		2		4						16	1	2												28
	硬質安山岩	2				1						12														15
	緑色片岩																			1						1
N9	黒曜石	1				3						2								1						6
	硬質安山岩											4														1
N10	黒曜石	1		1		5				1		4														12
	硬質安山岩	1				1				1		3														6
	水晶															1										1
N11	黒曜石					1						2														3
	黒曜石	2				2						6	1	1												12
O7	硬質安山岩	1				3						1														5
	黒曜石	1				4				1		14				1										21
O8	硬質安山岩								1			2														3
	黒曜石											1														1
O10	黒曜石											5														5
	黒曜石											1														1
O11	頁岩											4														5
	硬質安山岩					1					1	2														3
	粗粒安山岩																							1		4
P8	黒曜石											3														4
	黒曜石										1	3														4
P9	黒曜石											1	1	1												3
	硬質安山岩											1														10
P10	黒曜石	1				1	1				1	6														10
	黒曜石					2	1			1		10			1											15
	硬質安山岩	2				2						4	1										1			10
P11	粗粒安山岩																									1
	黒曜石											1							1							1
Q10	黒曜石											1														1
	黒曜石	6	1	6		13					6	3	158	46	1	4	1									245
	硬質安山岩	1	1									12	6							1						20
A区一括	頁岩																									1
	黒曜石	3	1	1		7	1			3	2	80	35	3												136
	硬質安山岩	2										4	1													7
B区一括	粗粒安山岩																						1			1
	黒曜石	3		1		8					5	115	13	2												147
	硬質安山岩											1														1
C区一括	粗粒安山岩																						1			1
	黒曜石					1				1		18				1										22
	硬質安山岩	3										5														8
D区一括	粗粒安山岩																						1			1
	黒曜石	1				1						3														5
E区一括	粗粒安山岩																						2	1		3
	粘板岩																									1
堅穴住居4	粗粒安山岩																								1	1
	粗粒安山岩																									1
堅穴住居6	粗粒安山岩																									1
	粗粒安山岩																									1
土坑22	黒曜石					1						60	21	1												83
	硬質安山岩											3														3
	粗粒安山岩																							2		2
土坑24	黒曜石											1														1
土坑25	黒曜石	1										3	1													5
土坑26	黒曜石				2		2					1	17	1												22
	硬質安山岩	1																								1
土坑28	黒曜石											1														1
計		148	18	57	2	186	7	1	2	54	36	3083	2261	70	24	2	4	4	2	1	32	10	3	3	6010	

凡例 器種略号

AH: 石鎌 AHBk: 石鎌未製品 S: スクレイパー TS: 石匙 PE: 楔形石器 PESp: 楔形石器削片 Pt: 石剣 Dr: 石錘 RF: 加工痕のある剥片 UF: 使用痕のある剥片 F1: 剥片 Ch: 碎片 Cr: 石核 Bk: ブランク RM: 原石 CAx: 打製石斧 PAX: 磨製石斧 Si: 石庖丁 PS: 不明磨製石器 SW: 石錘 HS: 敲石 GS: 磨石 WS: 砥石

第5章 第3調査地の調査

北東部にかけてが特に出土量が多く、大きく見て2箇所の石器の集中分布域がある（注：ただしI2グリッド出土石器のうち841点は竪穴住居6の検出・掘り下げ時の排土をフルイにかけて回収したものである。これらは遺構に流入した包含層遺物と判断して加算した。したがって、他のグリッドと回収率が大きく異なっているため単純にこの数字では比較できない。手掘りでの回収は510点である）。この分布の状況は、縄文土器の分布状況（表10、図105～107）と一致することから、2つの石器集中域の石器の大半は縄文時代のものと考えられ、特に土器の出土量のまとまる早期末～前期初頭や後期のものが中心となる可能性が高い。この二つの時期の土器分布と比較すると、石器分布のあり方は早期末～前期初頭土器の分布のあり方に近い。もちろん、早期末～前期初頭土器と後期土器および粗製土器は排他的な分布とはならないので明瞭には区別できないが、石器の出土量をグリッド単位で見えていくと、早期末～前期初頭土器の出土量にほぼ比例する場合が多い。E区は縄文土器の出土が極めて少ない一方で、弥

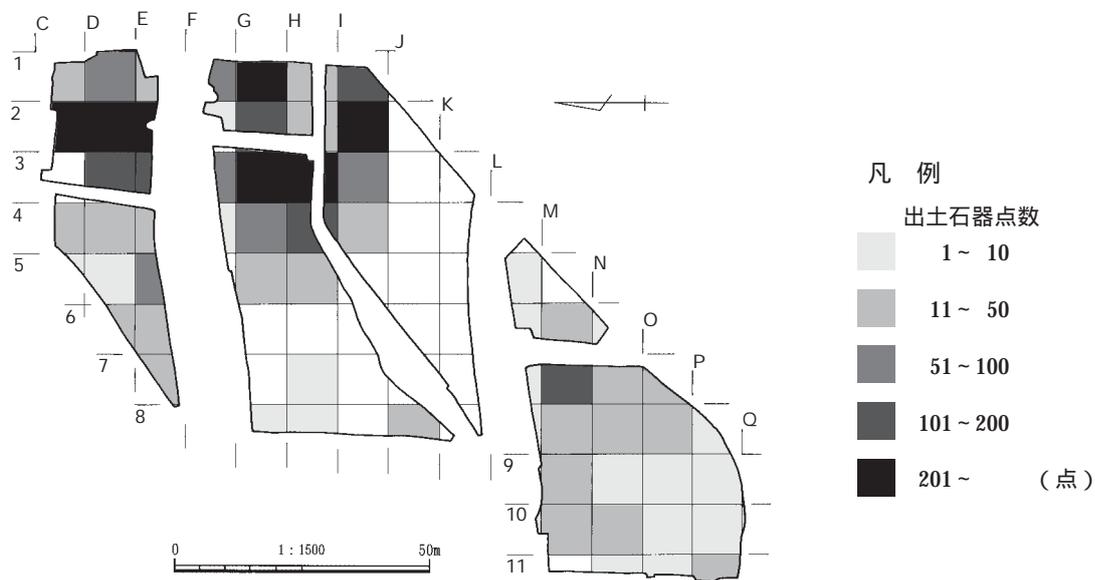


図125 石器グリッド別出土量模式図〔1〕出土石器全点〕

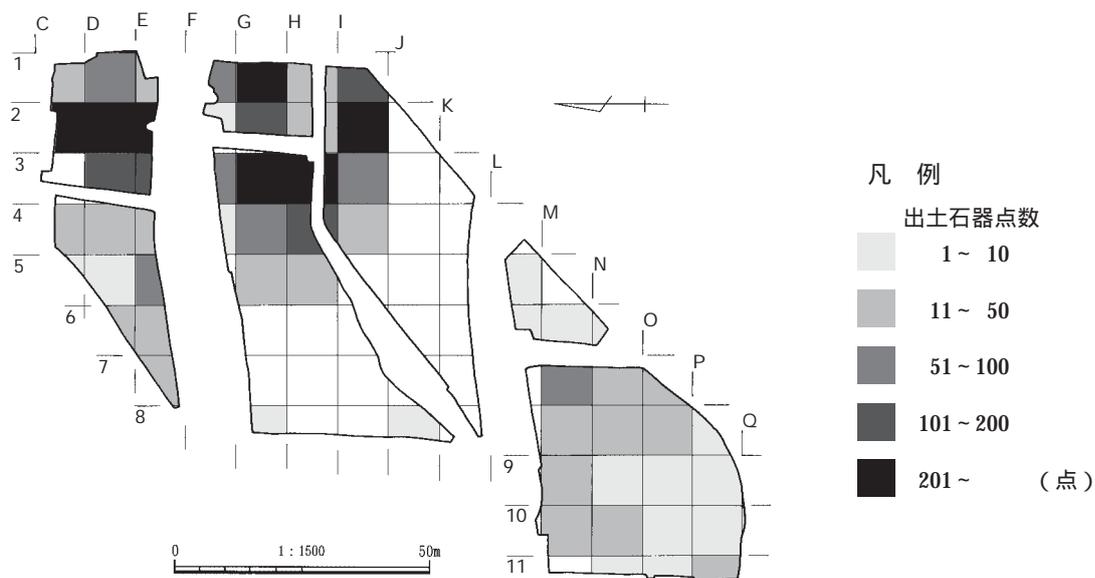


図126 石器グリッド別出土量模式図〔2〕黒曜石製石器〕

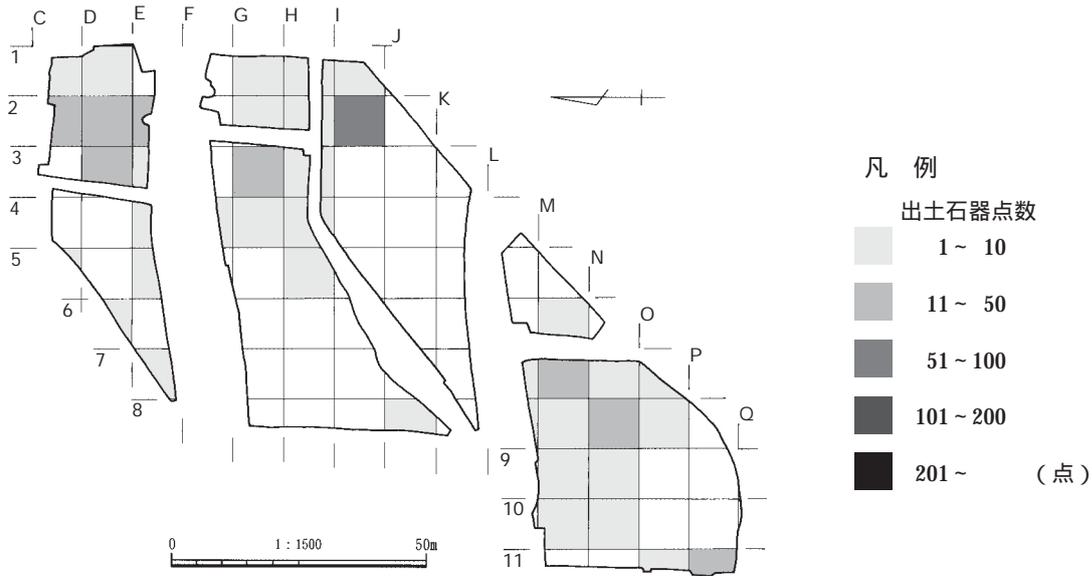


図127 石器グリッド別出土量模式図〔3〕安山岩製石器〕

生時代の遺構が集中し、包含層からも弥生土器が多量に出土していることから、石器も弥生時代に帰属するものが多い可能性が高い。また、E区は石器の絶対量が少ないにもかかわらず硬質安山岩が多く出土しており、E区出土石器全体の4分の1ほどが硬質安山岩で占められる。他の区域では黒曜石がほぼ同じ比率で主体を占め、硬質安山岩の分布も偏りは見られない。石器器種別の分布も、A・B・C区とD・E区で異なっており、後者では出土量に比して器種（石鏃・楔形石器）の比率が高い。石材構成や器種構成の差も帰属する時代の違いを反映している可能性が高いだろう。

石鏃（図128～133、表59）

全部で148点出土している。A～C区で108点、D・E区で40点出土しており、前述のように後者では全体の出土量に比べて組成率が高い。黒曜石製が109点、硬質安山岩製が39点で、石器全体の石材組成率に比して硬質安山岩の割合が高い。特に、D・E区では硬質安山岩製が多く、18点出土している（D・E区出土石鏃の45%が安山岩製。また、D・E区出土安山岩製石鏃が安山岩石鏃全体に占める割合は46%となる）。

118点を掲載した。S30～S113が黒曜石製である。平面形と基部形態で分類した。量的に主体をなすのは抉りの深い凹基式である。平基式や抉りの浅い凹基式はE区出土のものが目立つ。S30～S40は長さが短く平面形が正三角形に近い、平基式ないしはきわめて浅い凹基式のもの。すべてE区出土。S34～S40は長さが短く正三角形に近い、やや浅い凹基式のもの。E区出土が多く4点ある。S41～S43は幅広で抉りが極めて深いブーメラン形のもの。A・B区出土。S44～S58は長さがやや長く、抉りの深い凹基のもの。ほとんどがA～C区出土で、E区出土は3点のみである。S59～S61は深い凹基で、先端をすぼめて尖らせるもの。S62～S64は基部中央に部分的に深い抉りを入れるタイプ。S65～S69は長さが長く、浅い凹基のもの。E区のもの2点ある。S70～S78は長さが長く、やや浅い凹基のもの。S79～S94は長さが長く、抉りの深い凹基式。ほとんどがA～C区出土で、E区出土は3点のみ。S95～S101は細長い平面形をなすもので、抉りのやや浅いものと深いものがある。E区出土は1点のみ。S102～S104は木葉形の凸基式のもの。いずれも

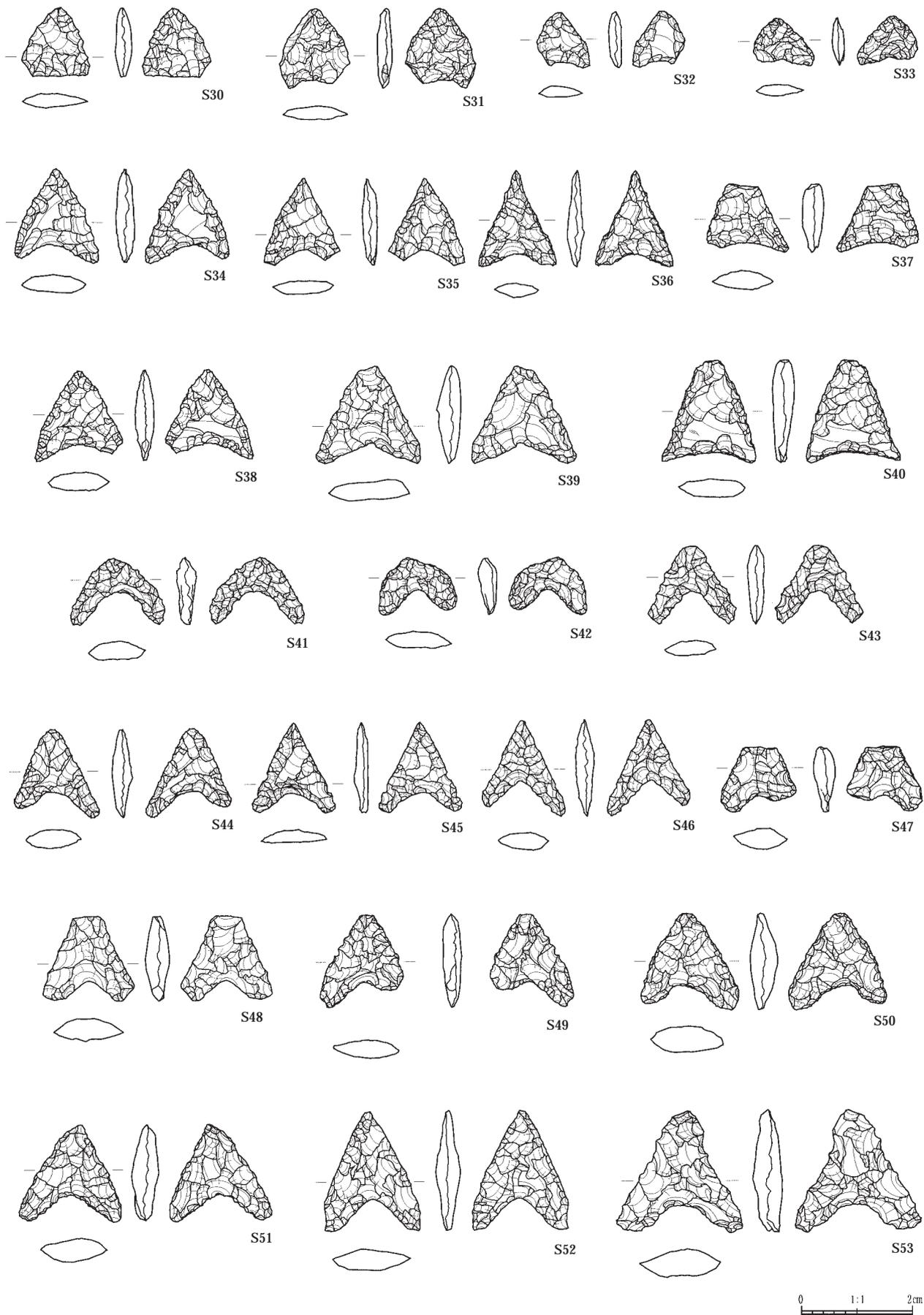


図128 包含層出土土器〔1〕石鏃

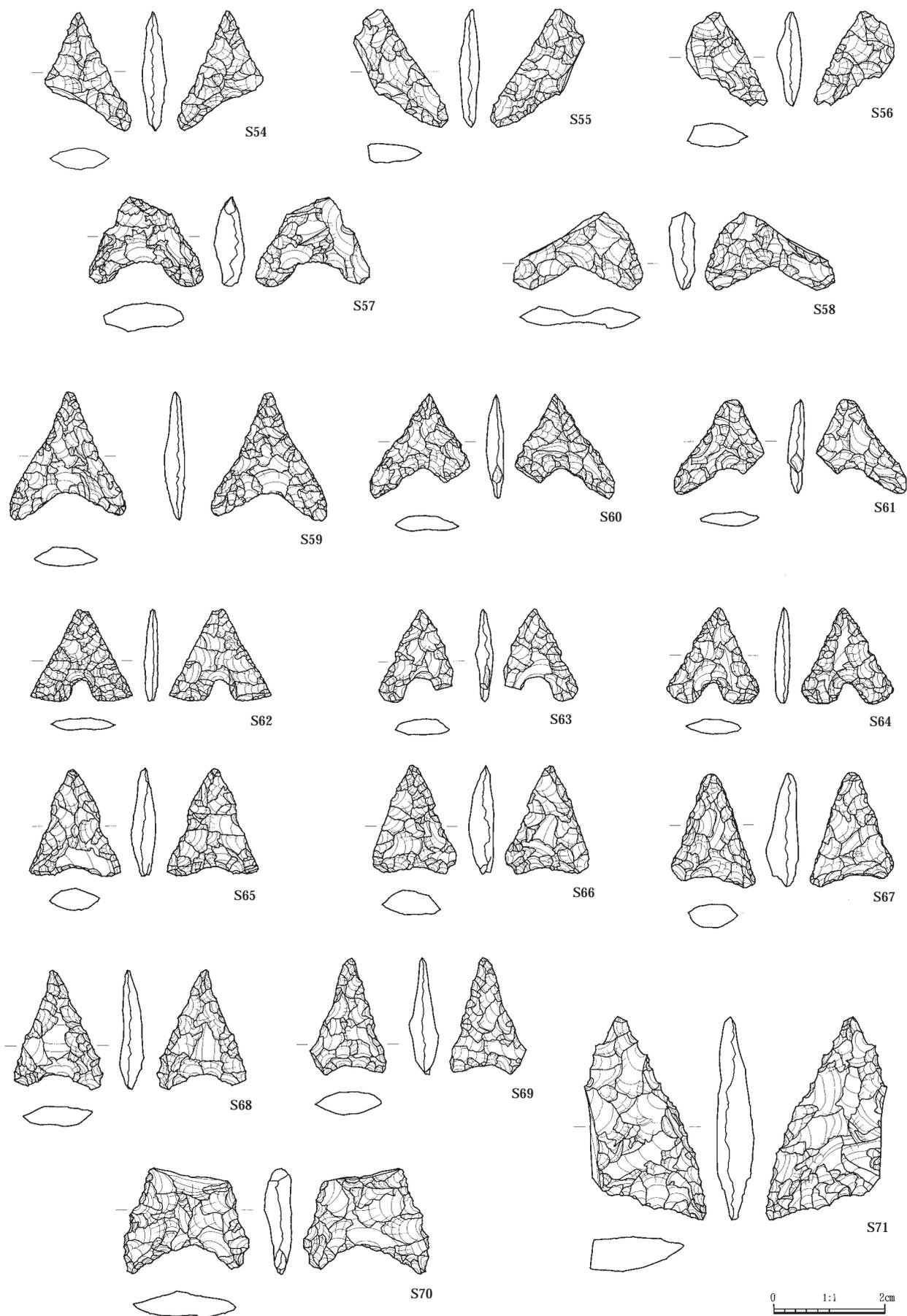


図129 包含層出土土器〔2〕石鏃

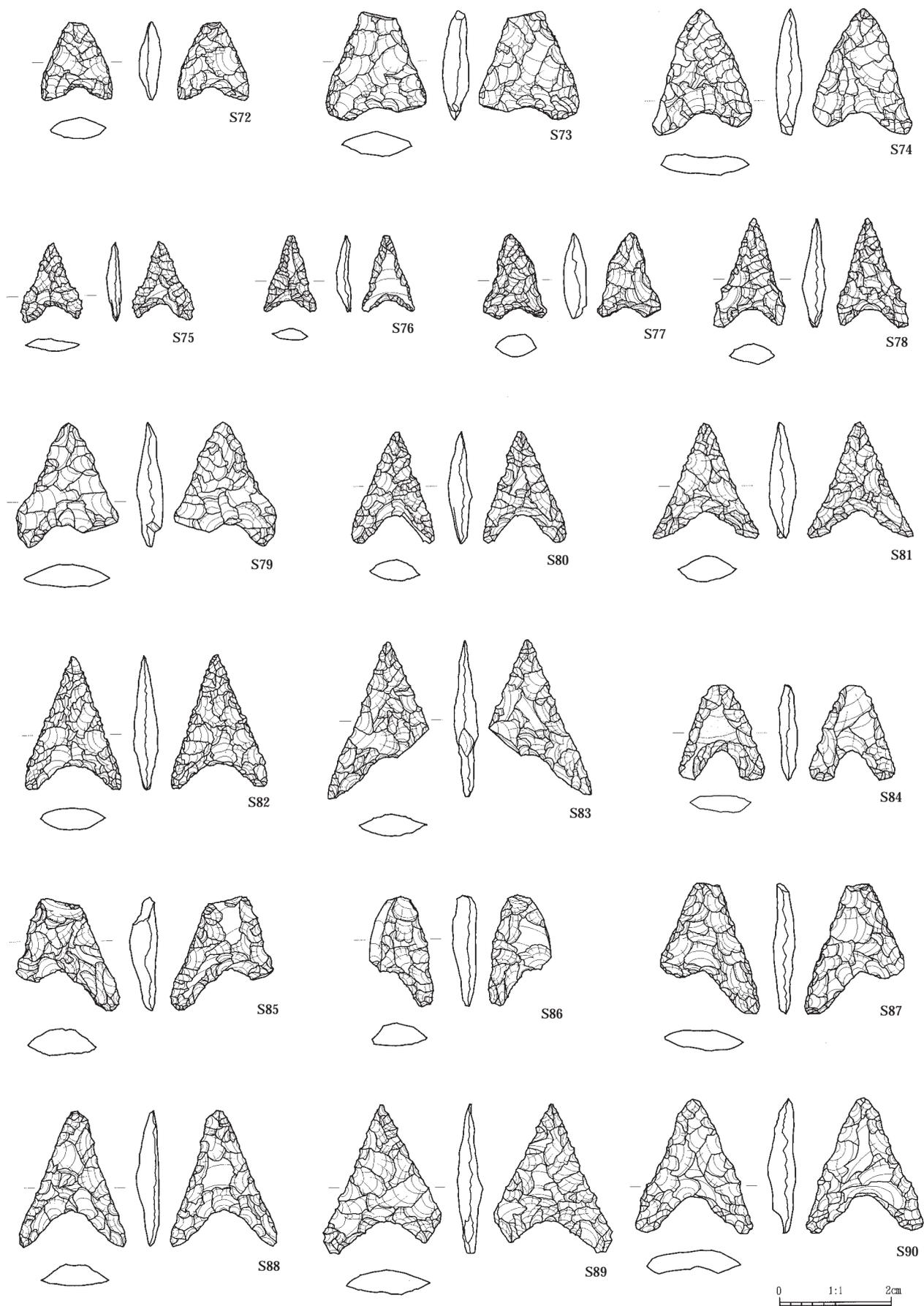


図130 包含層出土土器〔3〕石鏃]

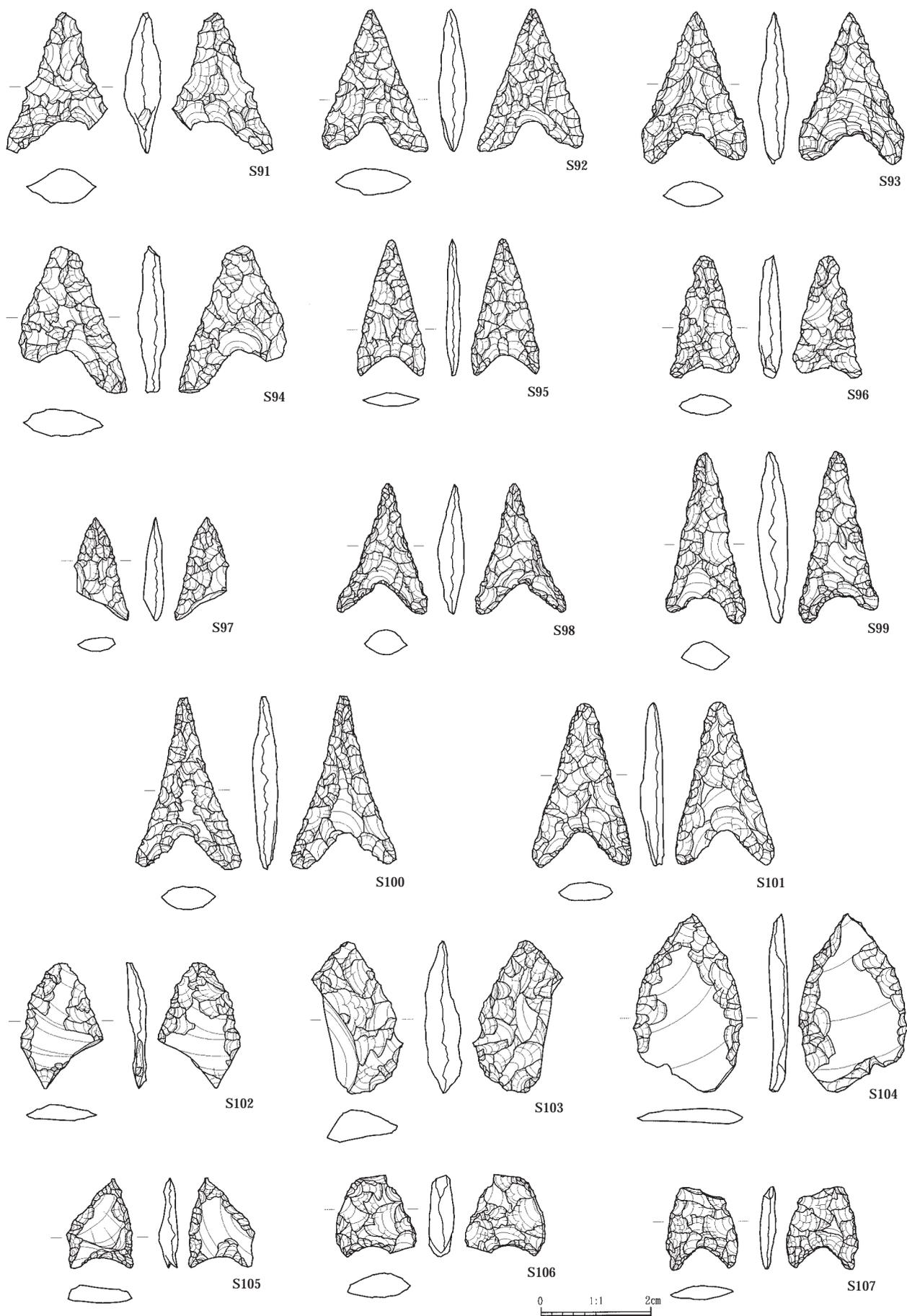


図131 包含層出土土器〔4〕石鏃

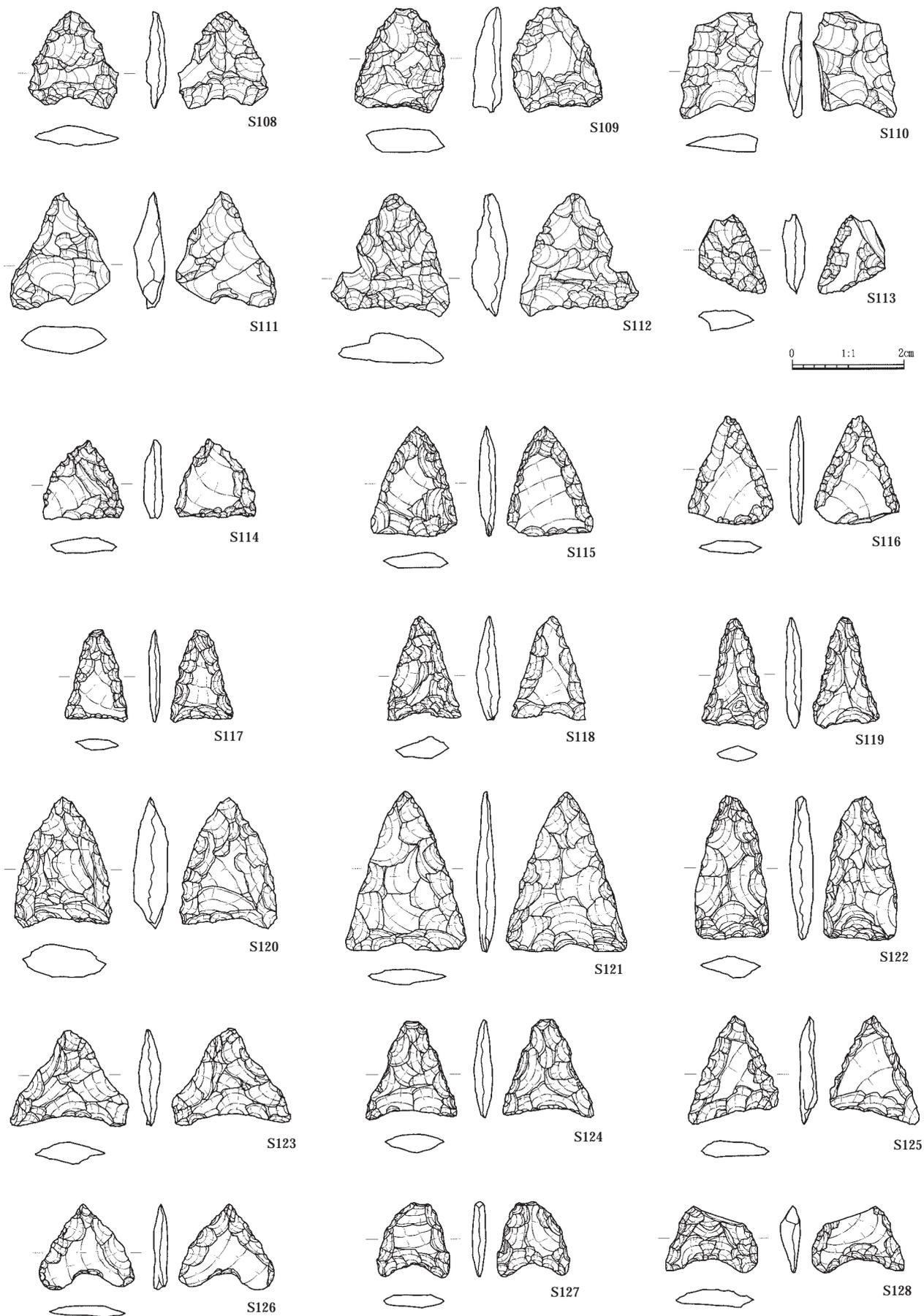


図132 包含層出土土器〔5〕石鏃

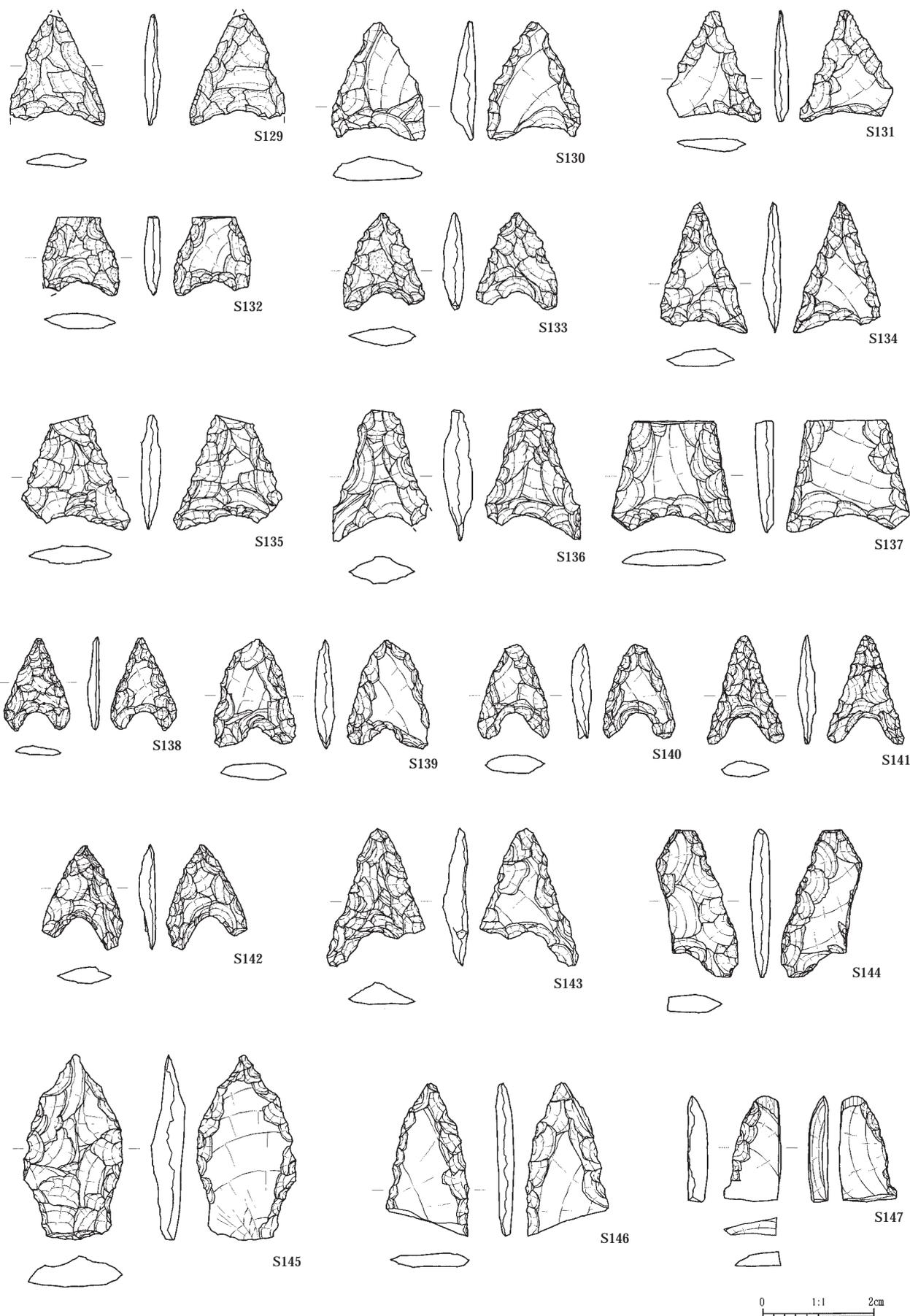


図133 包含層出土土器〔6〕石鏃

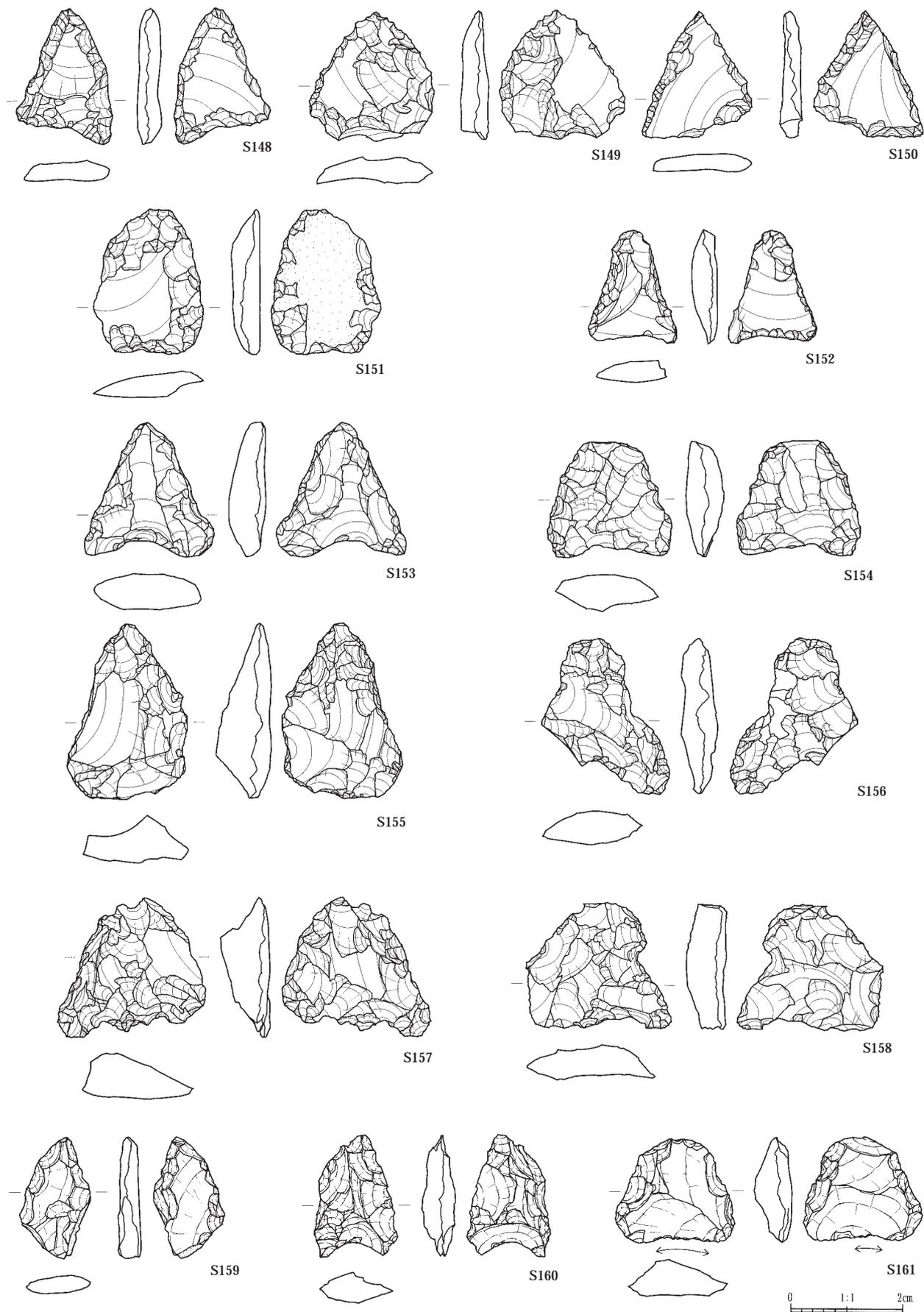


図134 包含層出土土器〔7〕石鏃未製品〕

A区出土。S105～S113は未製品の可能性があるものや欠損品である。

S114～S147が硬質安山岩製である。平基式や浅い凹基式が主体となる。前述のようにD・E区出土の割合が多い。特に平基式、浅い凹基式は大半がD・E区出土のものである。S114～S122は平基式のもの。6点がD・E区出土。S123～S137が浅い凹基式で、11点がD・E区出土。S138～S144は深い抉りの凹基式。いずれもA～C区出土。S145は有茎鏃ないしは木葉形鏃の未製品。S146・S147は欠損し形態不明。S147は先端が磨かれている。

石鏃未製品（図134、表59）

全部で18点出土している。黒曜石製が14点、硬質安山岩製が4点である。S148～S158が黒曜石製、S159～S161が安山岩製。調整が進行したものは素材形態が分からないが、薄手の剥片を素材として周辺から調整を加えるものが多い。S153は両極打撃痕がみられ、周縁もつぶれている。両極打法で調整を行ったか、楔形石器を素材としているかのいずれかと思われる。

スクレイパー・石匙（図135～137、表60）

スクレイパーは57点（黒曜石製52点、安山岩製5点）、石匙は2点（安山岩製）出土している。スクレイパーを22点、石匙を2点掲載した。S162～S180は黒曜石製スクレイパー。S162～S169は大型の剥片を素材とするもの。S168以外にはすべて原礫面の付着が見られる。S162は分厚い縦長剥片を素材とするもの。S163・S165は外面に原礫面を大きく残す横長剥片背面の打面側に刃部を作出する。S166・S167も横長剥片素材。S167は素材主剥離面に刃部を作出する。S168は素材両面に調整を加えて刃部を作出する。調整は素材主剥離面側が顕著である。S170は切断剥片を素材とする。刃部は素材主剥離面に作られる。S171は両面に調整を著しく加えて成形する。S172は打面が原礫面の剥片の腹面に細かい調整を加えたもの。S174～S178は小型の剥片を素材とする小型スクレイパー。主剥離面側に調整を加えて刃部を作るものが多い。S179・S180は楔形石器を素材としている。S181・S182は安山岩製の石匙。ともに剥片素材で、S181は調整が比較的奥まで入るが、S182は調整がほぼ周縁に限られる。S181は蛍光X線による石材産地推定を行っており、香川産サヌカイトの可能性が高いと判定された（第6章第6節参照）。S183～S185は安山岩製。いずれも剥片素材である。

楔形石器（図138～141、表60）

両極打撃痕の見られる石器を楔形石器として分類した。この中には、両極打法を用いて剥片作出を行う石核と、石器そのものに機能が付された可能性の強い狭義の楔形石器の二者が含まれている。いずれかを判定できない資料も多いので、ここでは一括して報告する。全部で186点出土している。石材は黒曜石が主体となり、黒曜石製が169点、硬質安山岩製が16点である。S186～S230は黒曜石製。S186～S193は大型で、剥離痕が大きいので石核として機能した可能性が強いと思われる。S194～S204も比較的大型で、やや大きい剥離痕もいくらかみられるので、石核として機能したのもあると思われるが、狭義の楔形石器とは厳密には区別できないものが多い。S205～S228は小型のもので、狭義の楔形石器の可能性が高いものである。周縁に著しい潰れをもつものが多く、側面に剪断面が見られるものも多い。使用方向の転移を行う例がほとんどである。S229は楔形石器削片。明確に楔形石器削片と分かるものをほかに6点カウントしたが、実際にはこれよりはるかに多いだろう。S230は側面が剥離して形成された鋭い縁辺を刃部として使用したもの。S231～S233は硬質安山岩製のもの。

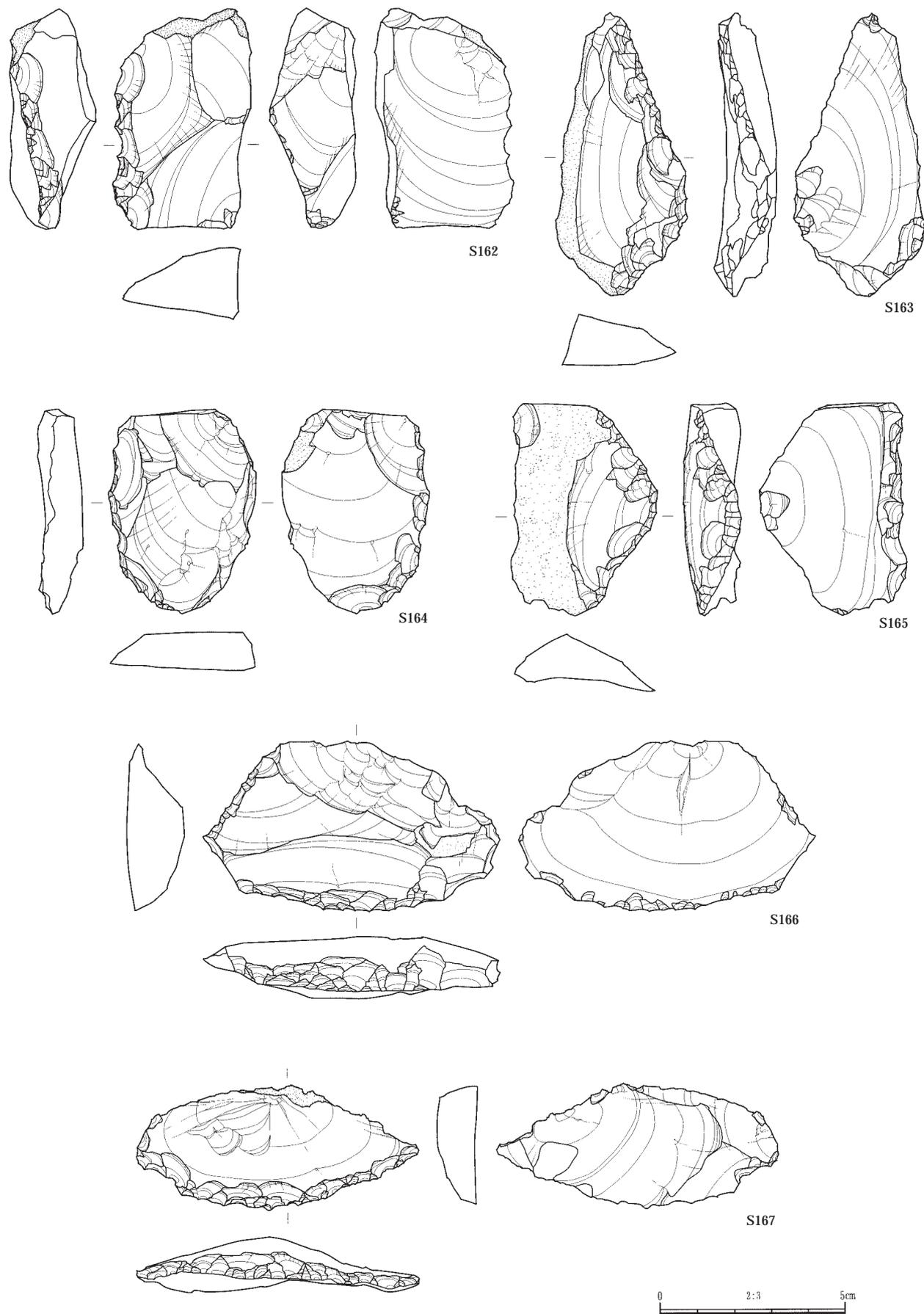


図135 包含層出土土器〔8〕スクレイパー〕



図136 包含層出土土器(9) [スクレイパー]

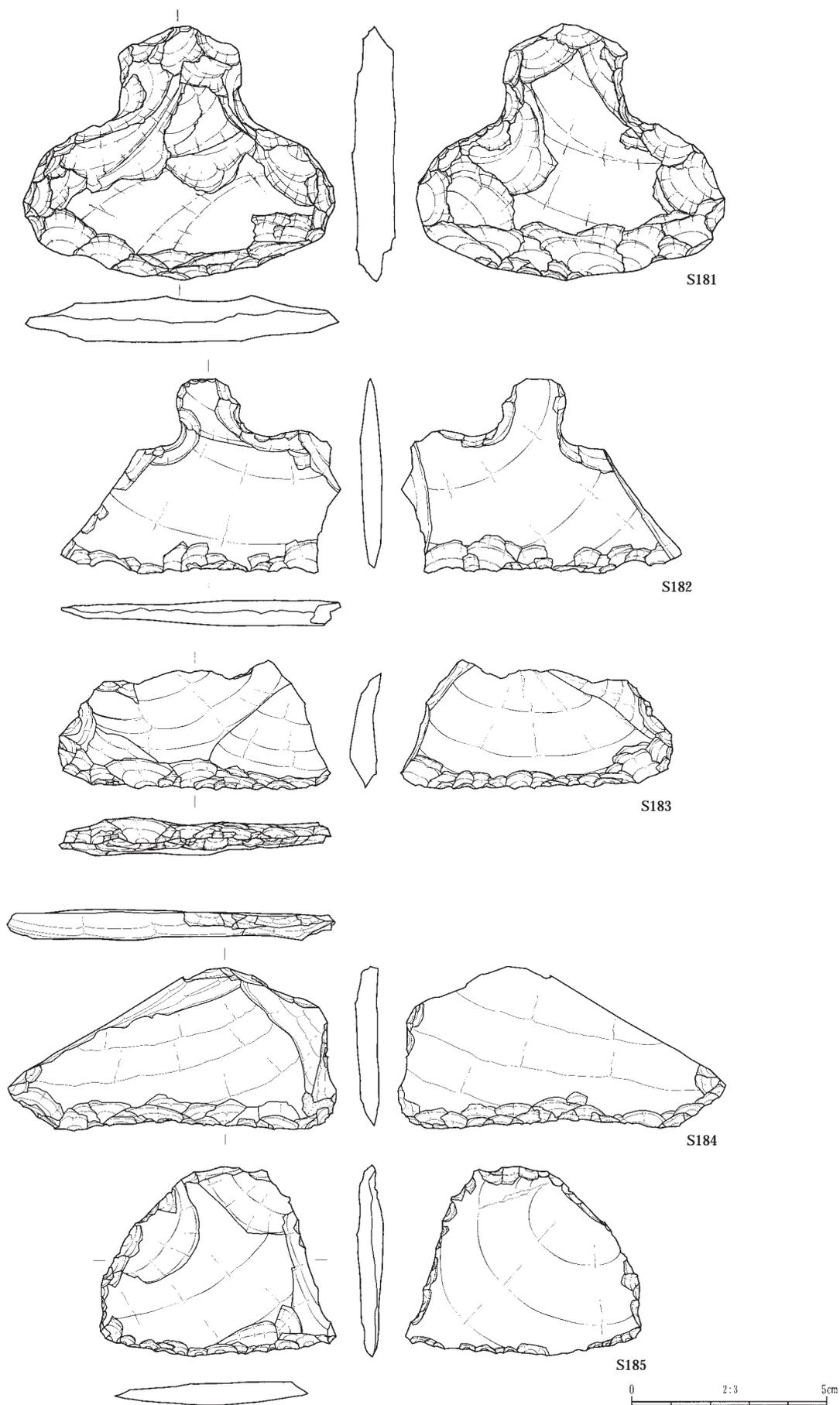


図137 包含層出土土器(10) [スクレイパー]

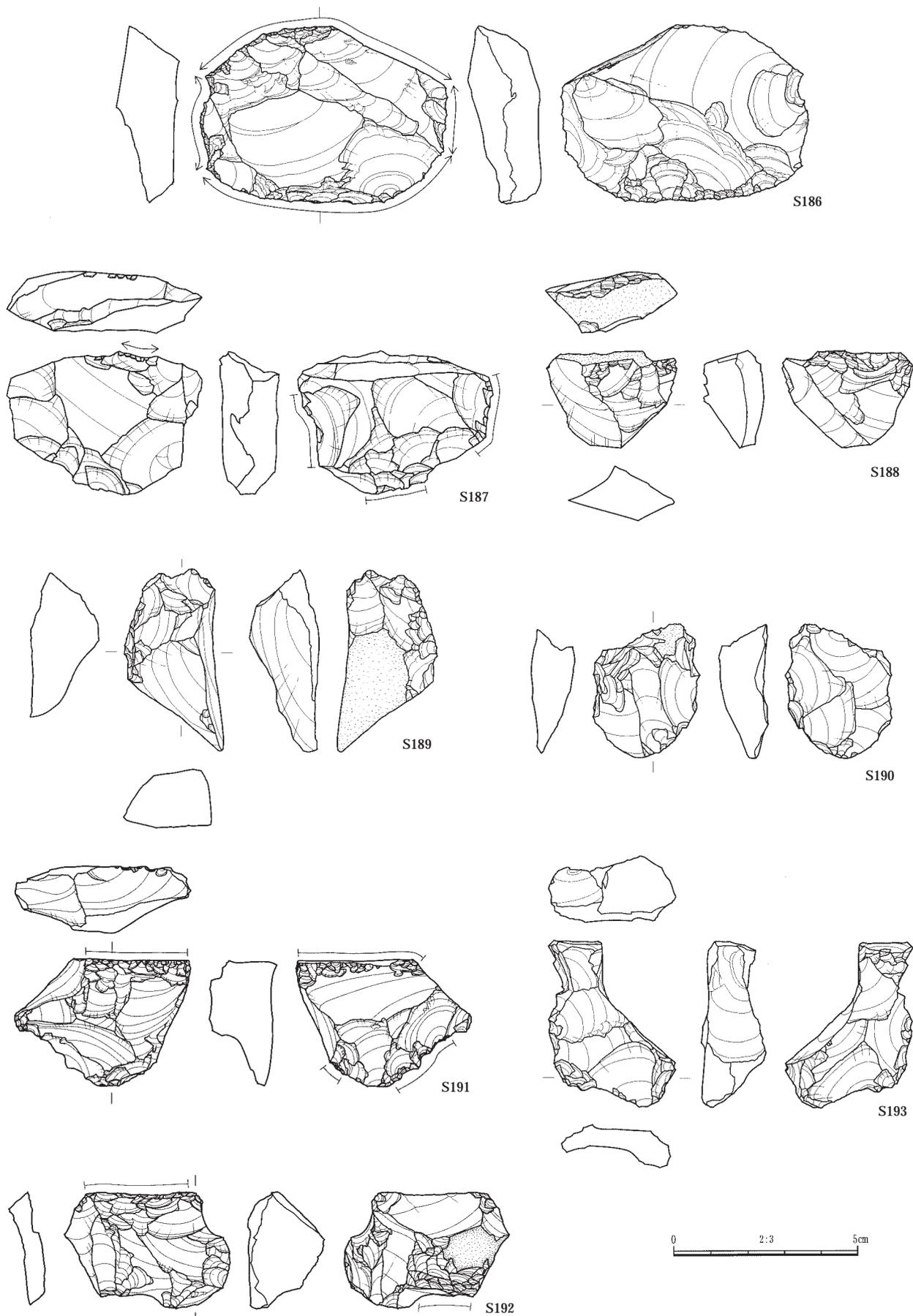


図138 包含層出土土器〔11〕楔形石器〕

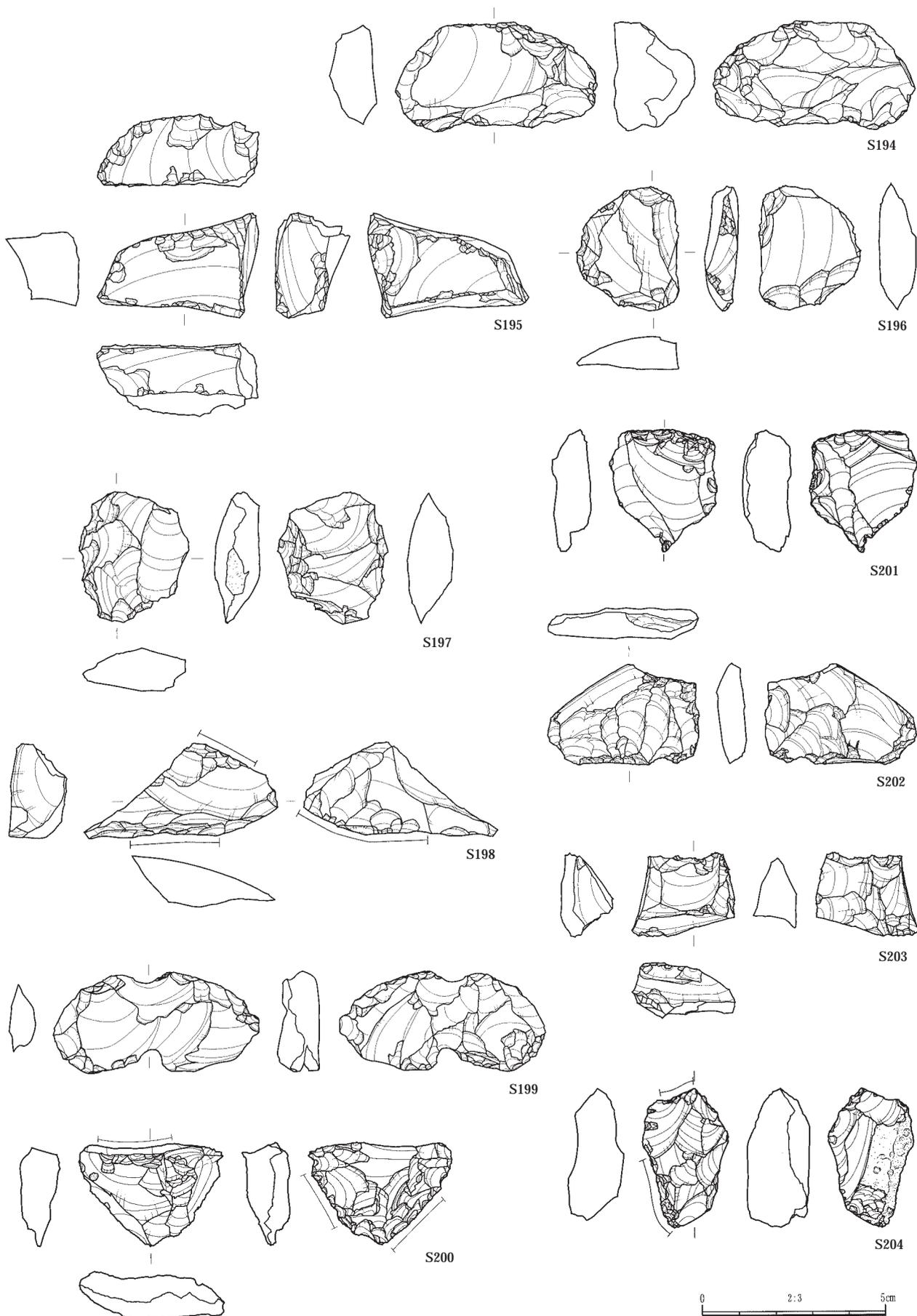


図139 包含層出土土器〔12〕楔形石器〕

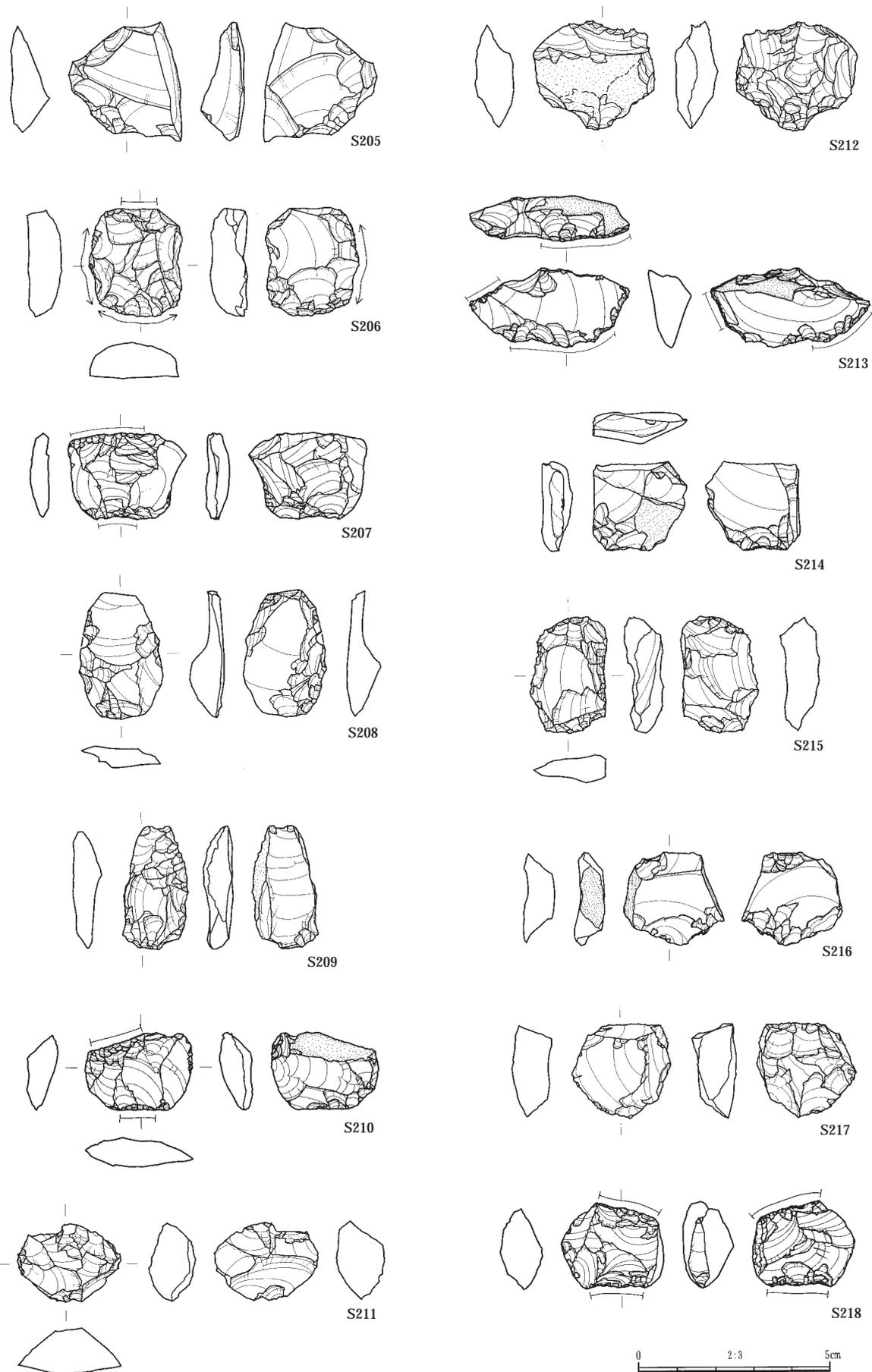


図140 包含層出土土器〔13〕楔形石器〕

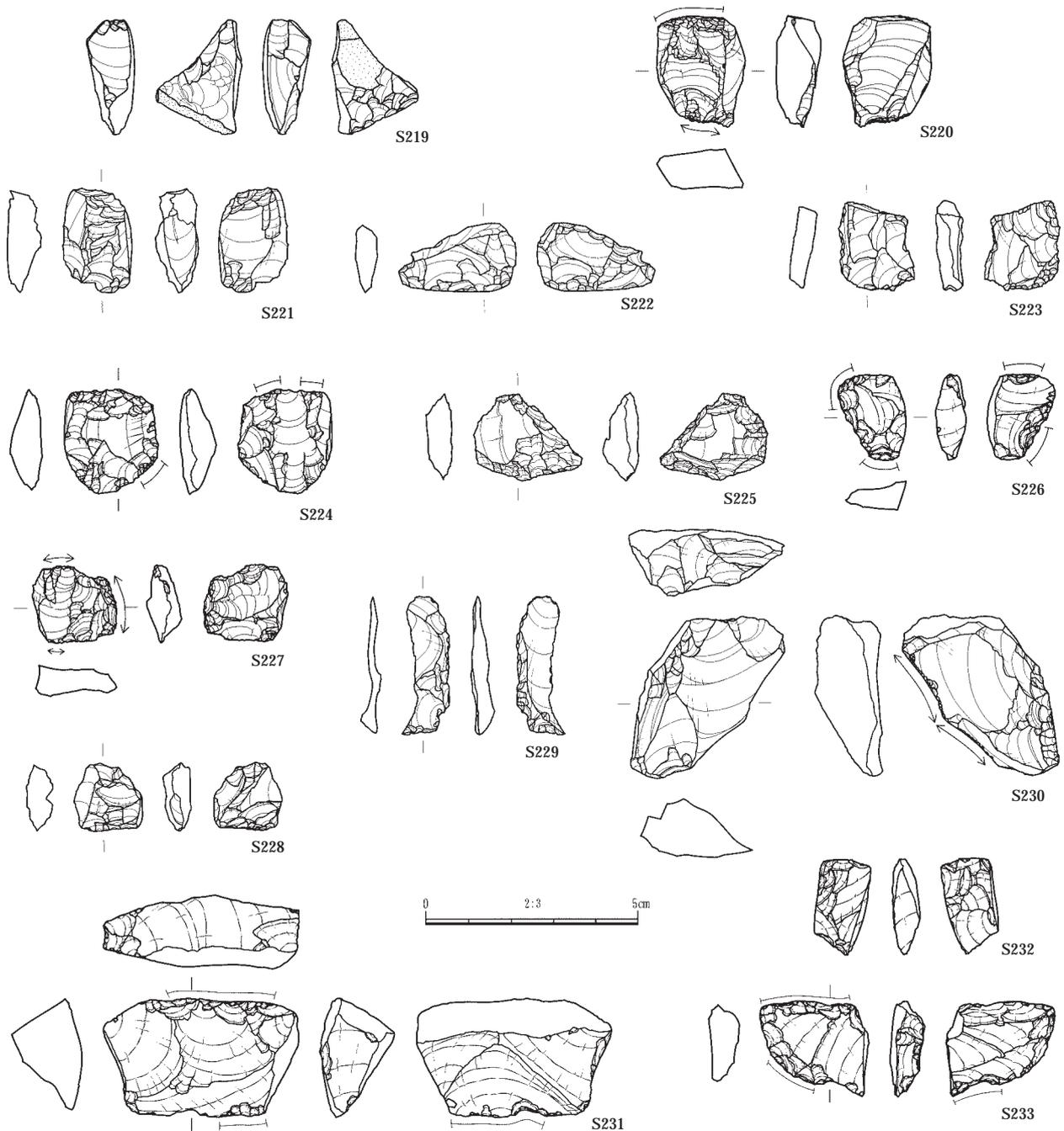


図141 包含層出土土器〔14〕楔形石器〕

その他の器種（図142、表60）

S 234は硬質安山岩製の局部磨製の石剣。弥生時代に属するものであろう。E区出土。剥片素材で、周縁を打剥して調整している。その後基部側を中心に研磨が加えられる。基端部は刃部状に面が作られている。蛍光X線による石材産地推定の結果、香川産サヌカイトと判定されている（第6章第6節参照）。S 235は安山岩製の石錐。S 236は黒曜石製の石錐で未製品の可能性もある。S 237は加工痕のある剥片。背面に大きく原礫面を残す大型の剥片に刃部状の調整をわずかに加えたもの。重さ144 gで、黒曜石製石器のなかで最も重い。素材として利用するのに十分な大きさがある。S 238・S 239は縦長の石刃状剥片を素材とする、使用痕、加工痕のある剥片。S 239の素材剥片は比較的整った石核からの作出が考えられる。

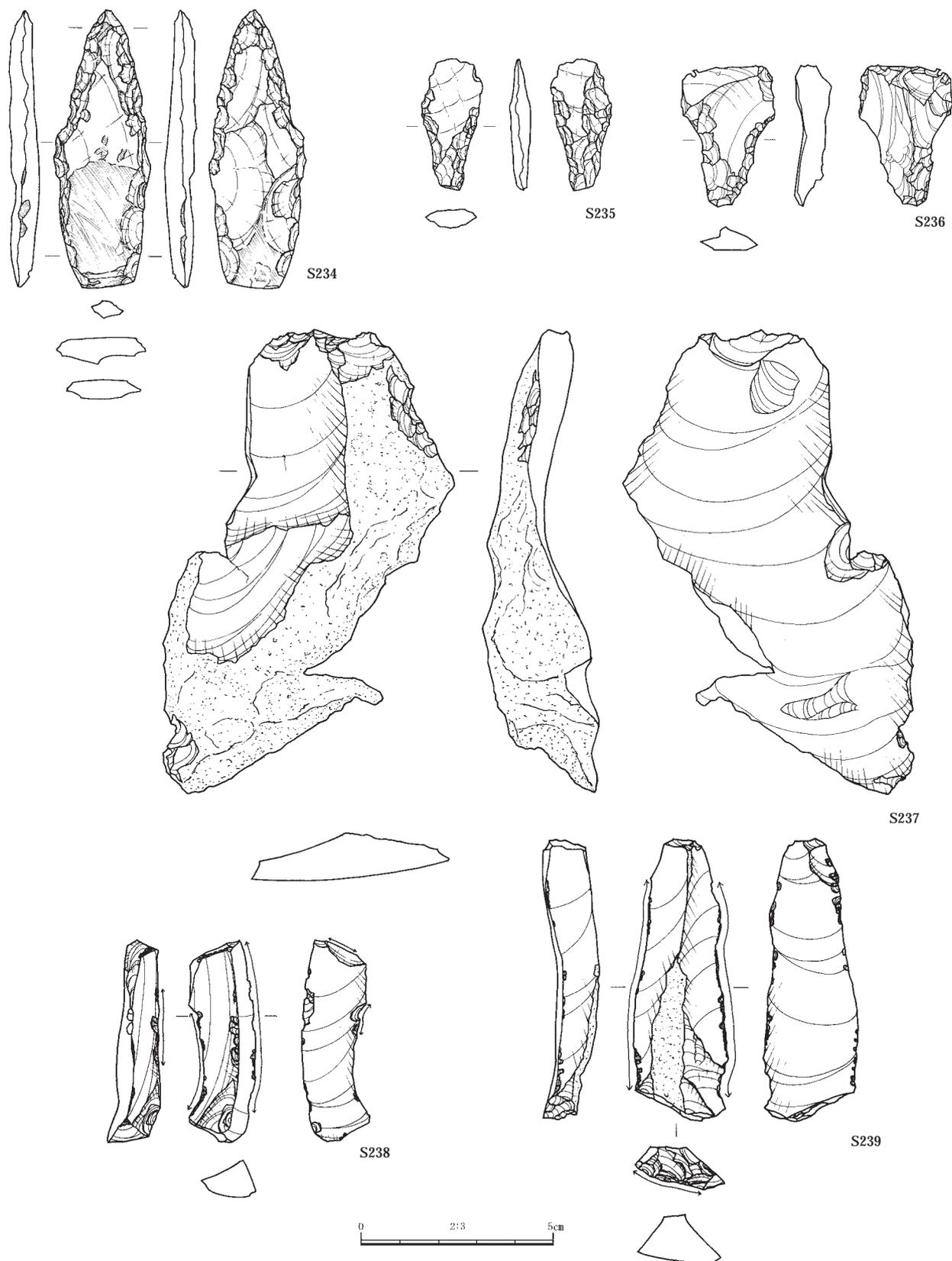


図142 包含層出土土器〔15〕その他の器種〕

石核（図143～図145、表60）

70点が出土している。68点が黒曜石、2点が硬質安山岩である。破片のものや小型のもの以外で、代表的な剥離技術が見られるものを16点掲載した。いずれも不定形な剥片を作出するもので、打面

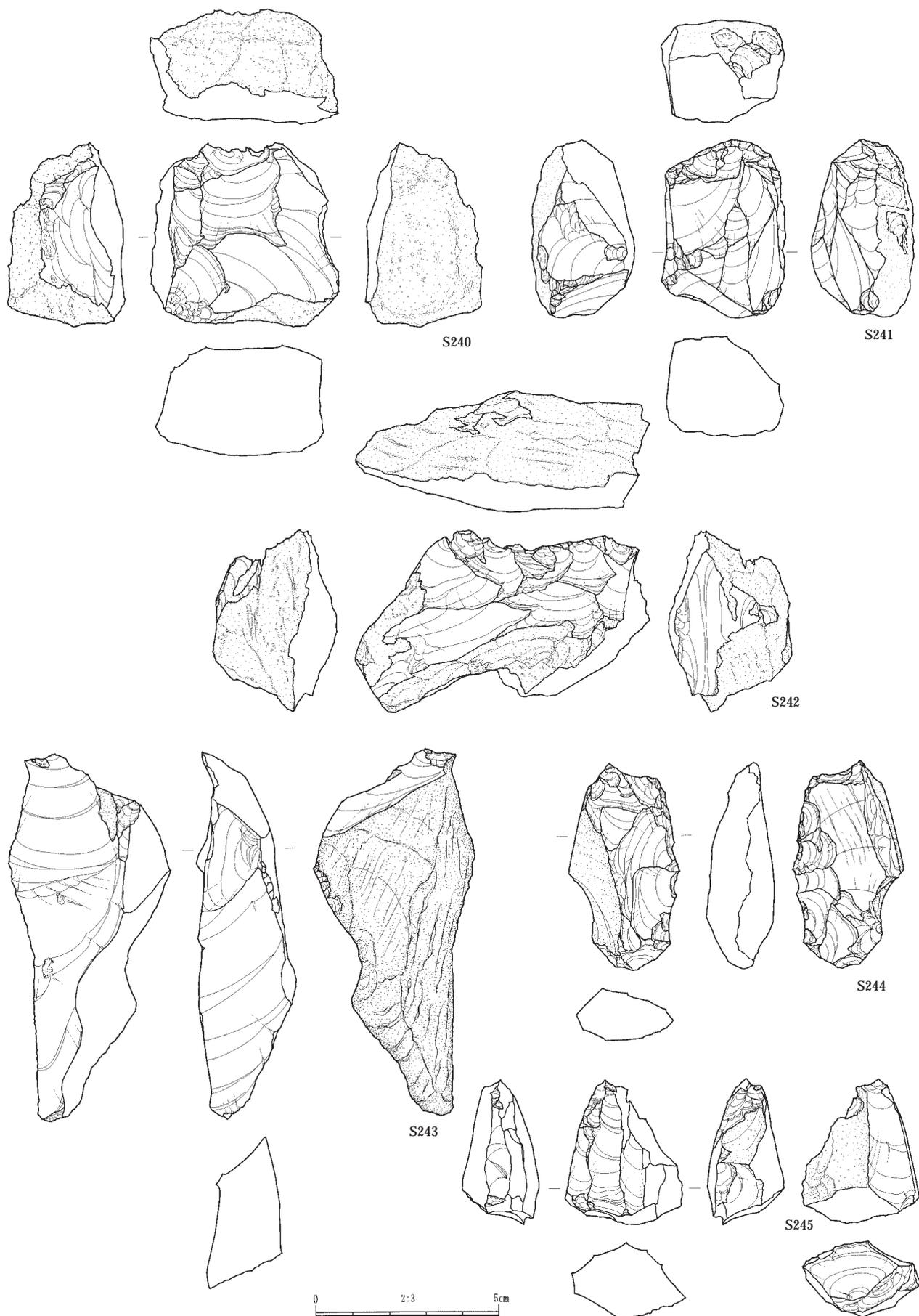


図143 包含層出土土器(16)〔石核〕

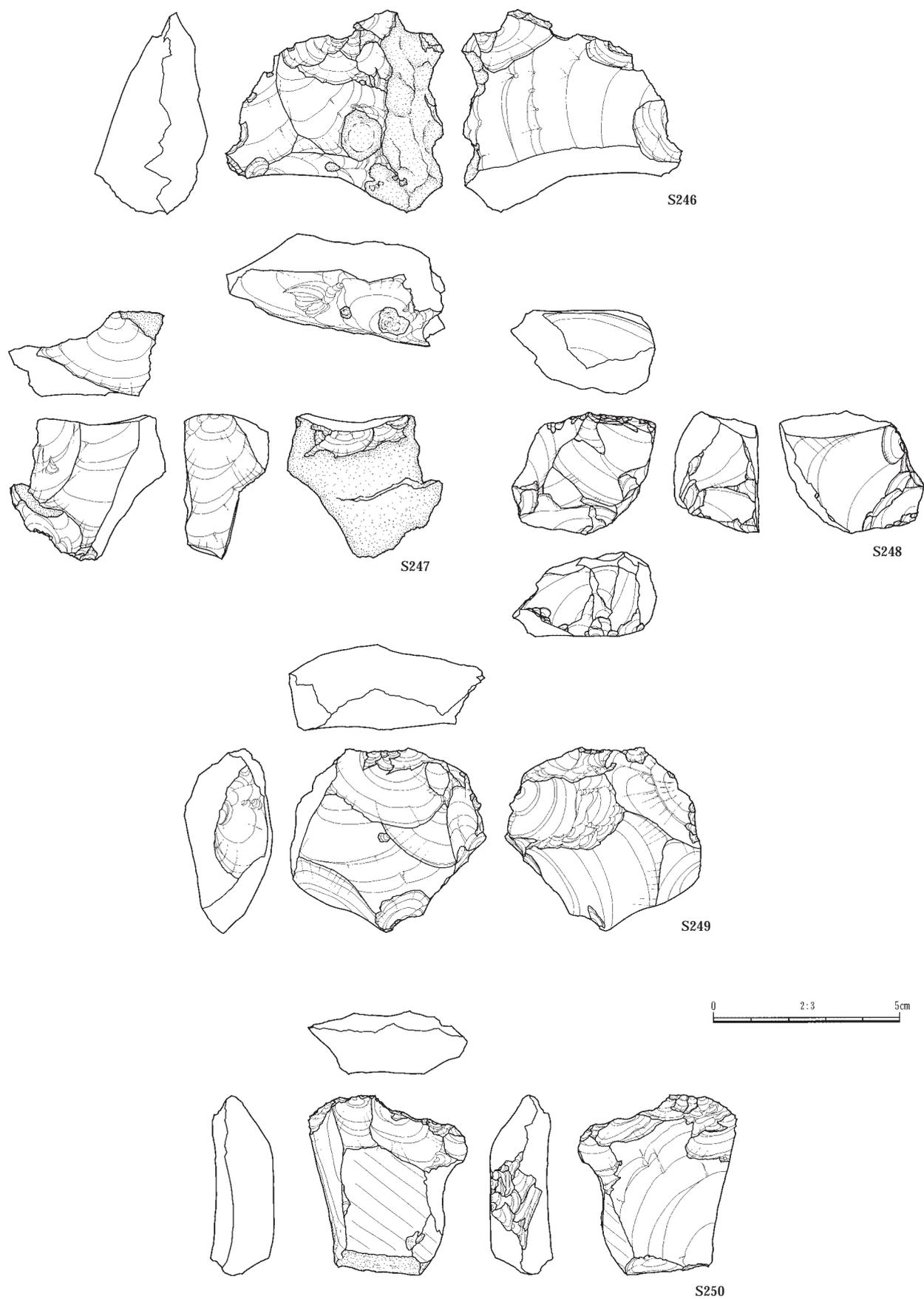


図144 包含層出土土器(17)石核]

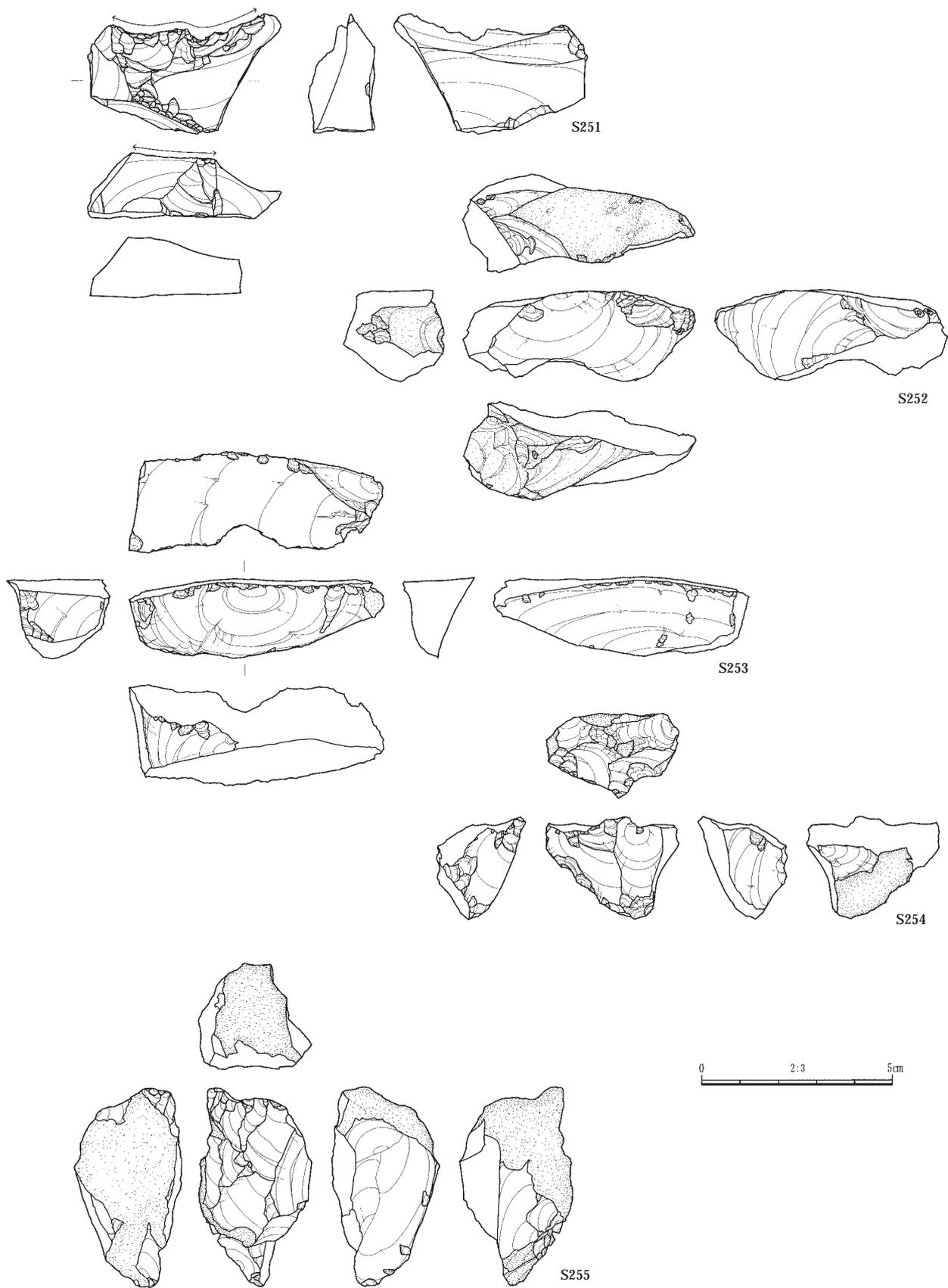


図145 包含層出土土器 18 [石核]

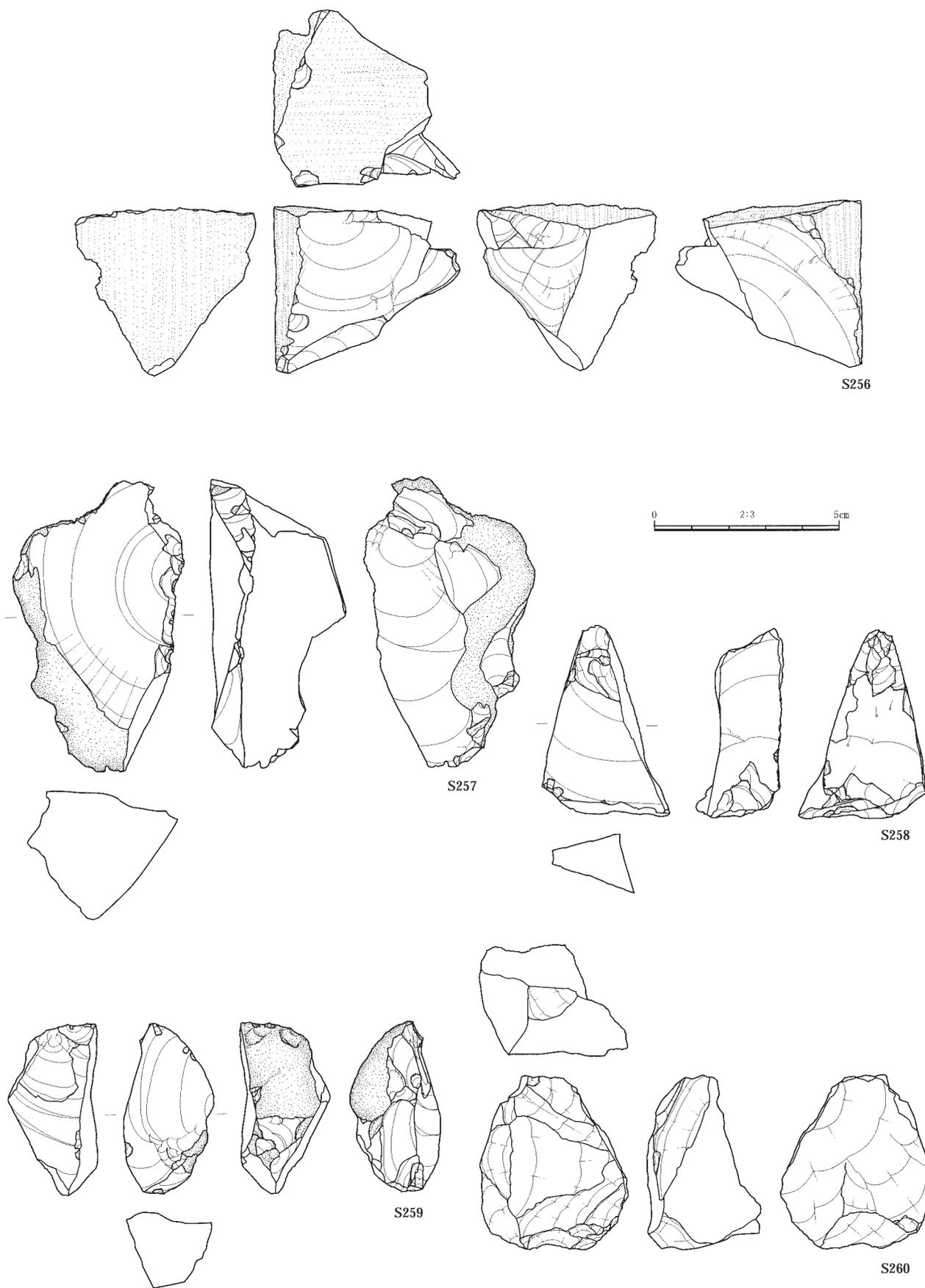


図146 包含層出土土器(19) [ブランク]

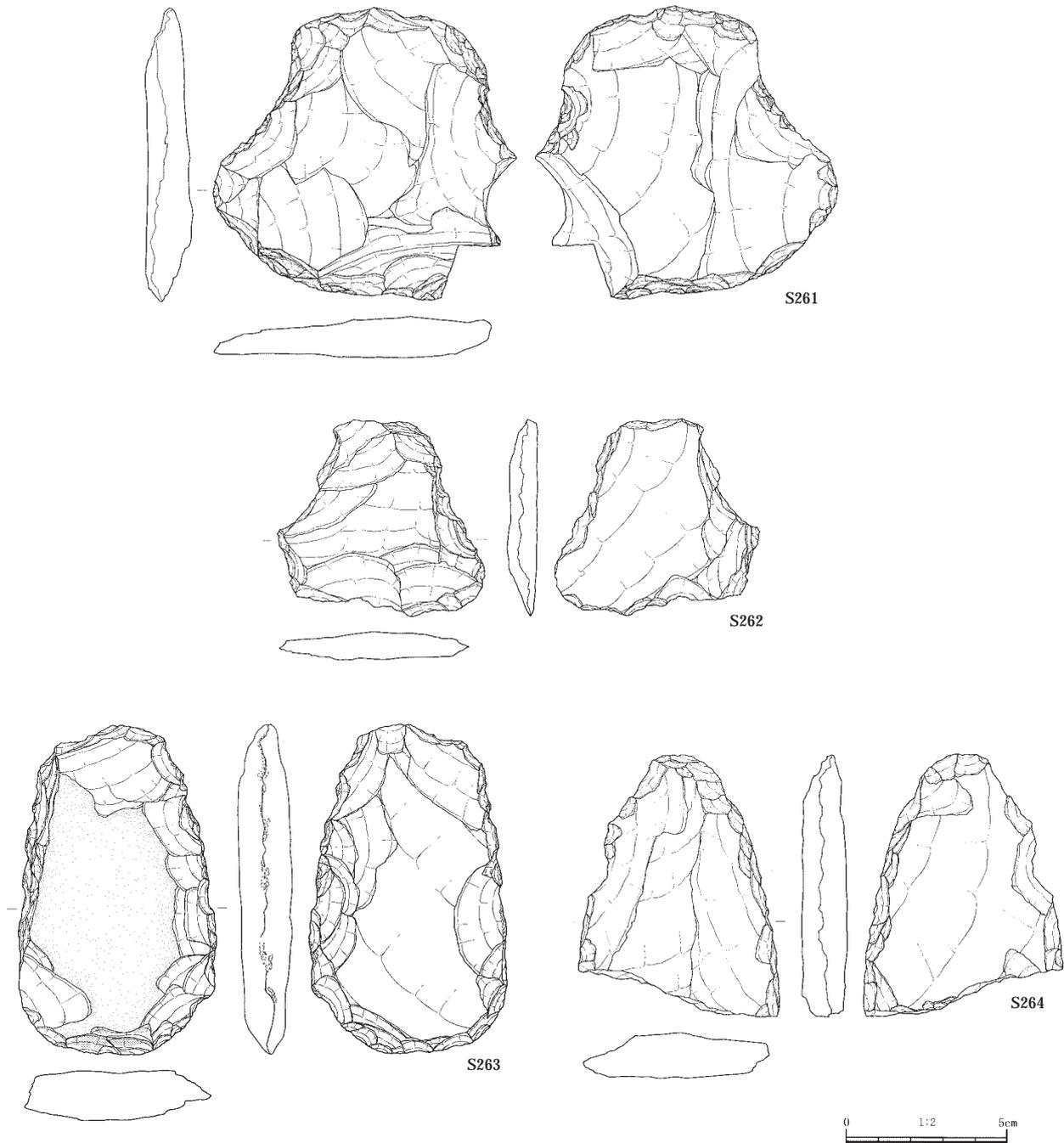


図147 包含層出土土器(20Ⅰ打製石斧]

転移や作業面転移を行うものが多い。S240は分割礫からわずかに剥片を作出した段階で剥離が終了している。作業面以外には原礫面を残す。S241は打面に潰れが著しく見られる。両極打撃が加えられていた可能性もある。S242はほぼ原礫のままの状態から剥片剥離を始めたものと思われる。作出された剥片はさほど多くないようである。S243は分割礫から1枚だけ剥片を作出したもの。S244は一側縁を両面から打剥するもの。S245は縦長剥片が連続して剥離される。S246は周縁から数枚小型の剥片を剥離したもの。S247は小口で縦長剥片が作出されている。S248は打面転移を繰り返すサイコロ形のもの。S249は表裏とも周縁から求心状に剥離がなされる。S250は一側縁から2、3枚剥片が取られる。打面再生が行われている。S251も一側縁から剥離がなされる。打面

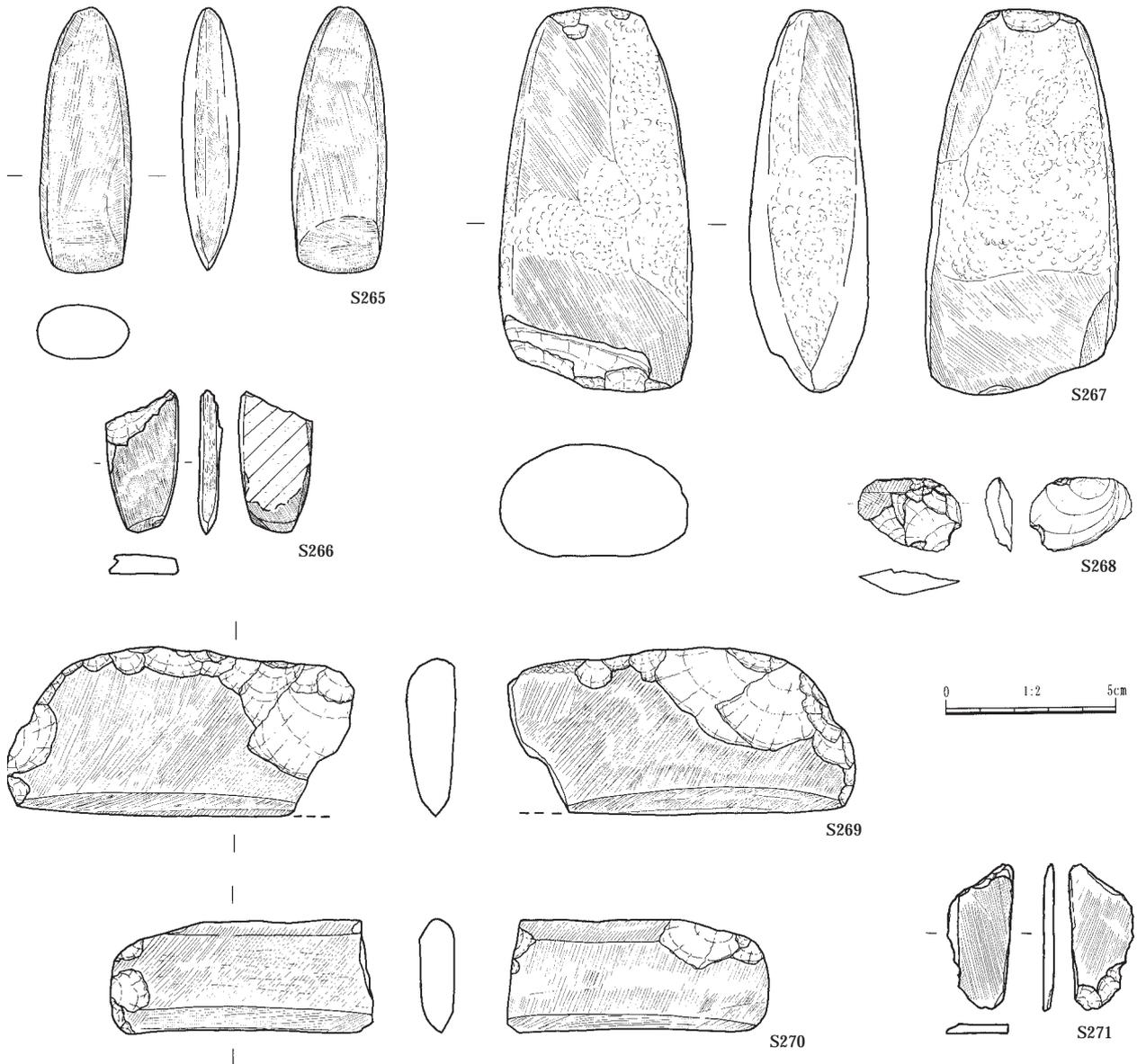


図148 包含層出土土器〔21〕磨製石器〕

と作業面のなす稜と下底面の稜に微細剥離痕が見られる。S 252・S 253はそれぞれ側面に1枚の剥離痕が残る。S 254は最終打面に打面調整が見られる。S 255は分割礫の一面で剥離がなされる。ブランク(図146、表60)

24点出土している。黒曜石が22点、水晶が2点ある。S 256～S 259は黒曜石、S 260は水晶。打製石斧(図147、表60)

4点が出土。S 261は硬質安山岩製。S 262は黒色頁岩製。S 263・S 264は粗粒安山岩製である。磨製石器(図148、表60)

S 265は小型の両刃石斧で、緑色片岩製。刃部に線条痕と刃こぼれが見られる。S 267は緑色片岩製の太型蛤刃石斧。刃部が欠けている。S 266は小型の扁平両刃石斧で、蛇紋岩製。S 268は磨製石斧を打剥して生じた剥片。粗粒安山岩製。S 269・S 270は磨製石庖丁であろうか。紐孔や挟りは見られない。刃部が厚めである。背部に打剥を受けている。S 269が粘板岩製、S 270が細粒花崗岩製。S 271は磨製石器の破片で、器種不明のもの。黒色頁岩製である。

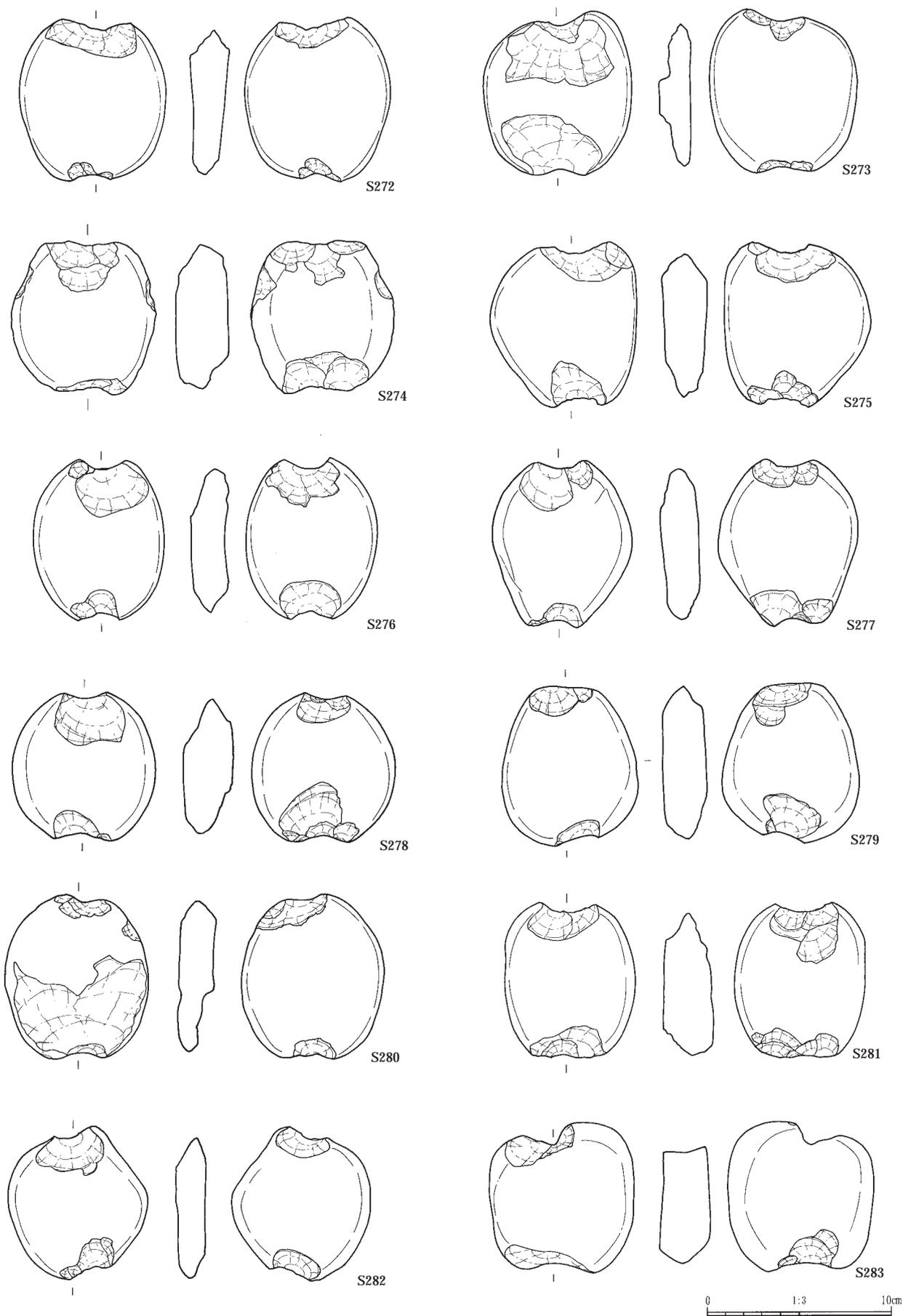
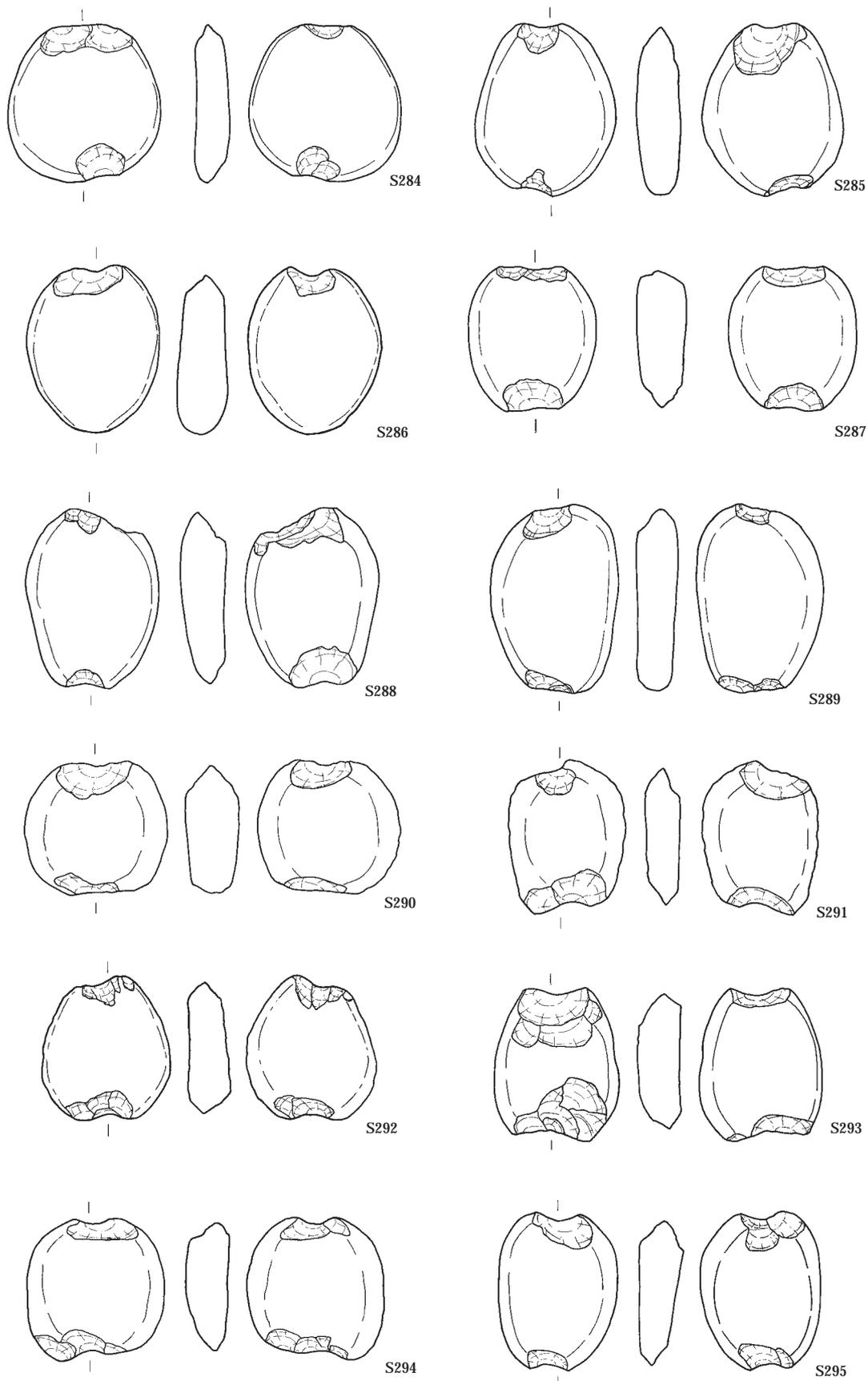


図149 包含層出土土器〔22〕石錘]



0 1:3 10cm

図150 包含層出土土器〔23〕石錘〕

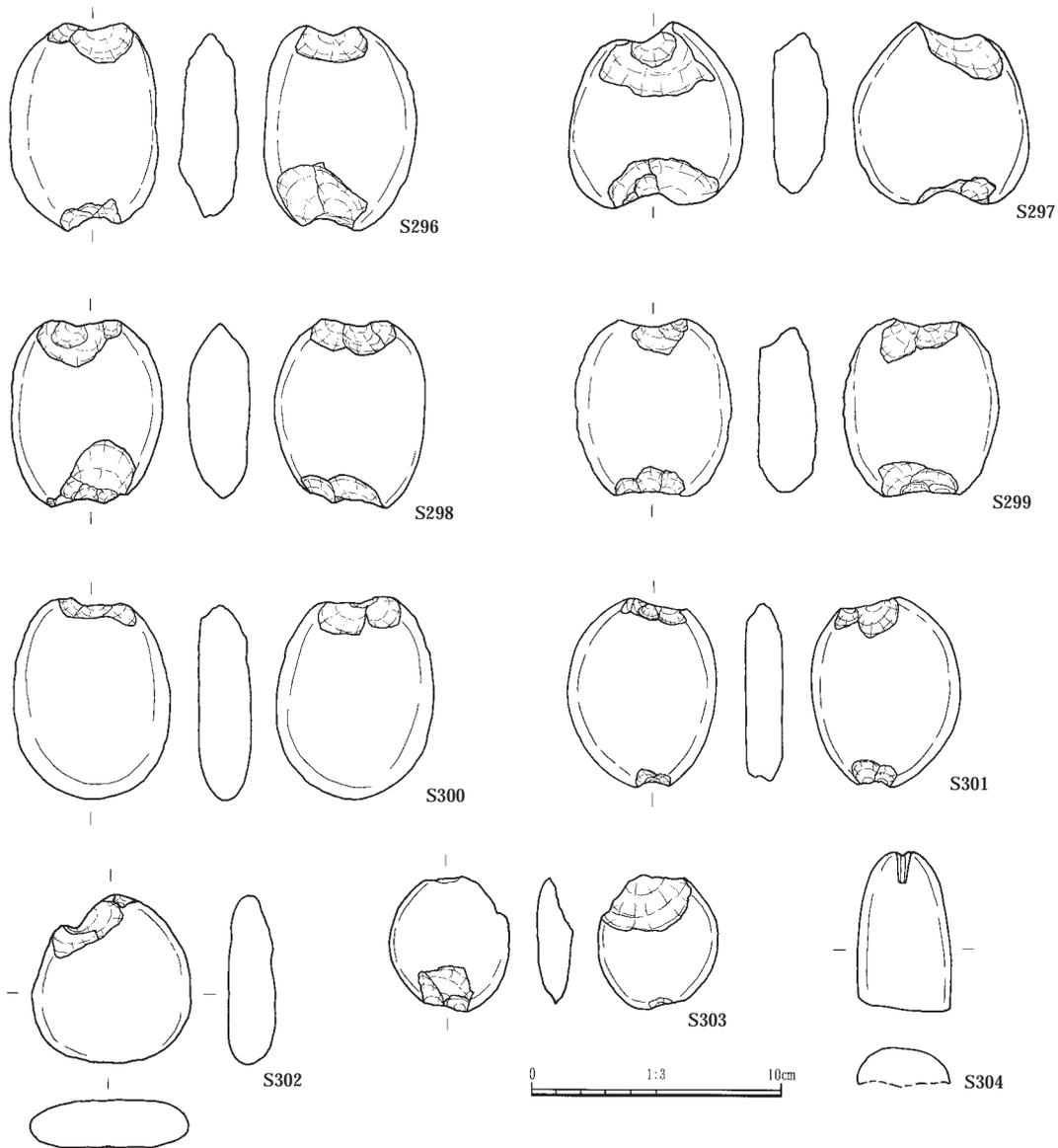


図151 包含層出土土器(24)【石錘】

石錘 (図149～151、表60)

32点出土した。うち、31点が打欠石錘 (S272～303) ですべて粗粒安山岩製、1点が切目石錘 (S304) でホルンフェルス製。G3グリッド周辺で多く出土している。

敲石・磨石・砥石 (図152、表60)

S305～S308は敲石。S307は磨り面が見られ、磨石との複合石器。S309～S310は磨石。敲石・磨石はすべて粗粒安山岩製。S311は細粒花崗岩製の砥石。全面が砥面となる。砥石目やや細。S312も細粒花崗岩製の砥石。砥面は1面で、砥石目は極細である。 (北)

【引用参考文献】

井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会

井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

岡平拓也2001『沢べり遺跡第3次発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



図152 包含層出土土器(25) 敲石・磨石・砥石]

千葉豊2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年の意義 - 崎ヶ鼻式と『権現山式』のあいだ - 」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会

濱田竜彦1999「古市河原田遺跡出土の突帯文土器について」『古市遺跡群1』(財)鳥取県教育文化財団

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』17 島根考古学会